板付周辺遺跡調査報告書

（7）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第65集

福岡市教育委員会
埋蔵文化財センター

1981
福岡市教育委員会

板付周辺遺跡調査報告書

（7）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第65集

1981

福岡市教育委員会

板付周辺遺跡調査報告書（7）正誤表

頁	行	誤	正
図版目次	PL.5-2	SX02（玄室から羨門部をのぞむ）	SX03（玄室から羨門部をのぞむ）
〃	PL.6-1	SX03（玄室より竪坑部をのぞむ）	SX02（玄室より竪坑部をのぞむ）
2	15	各れも	何れも
5	8	各れも	何れも
8	23	SD01→SX02→SD02	SD02→SX02→SD01
9	21	平担	平坦
12	19	〃	〃
〃	27	表土・各遺物は	表土・各遺構出土の遺物は
17	15	坏	杯
19	18	柄穴	柄穴
〃	21	柄穴状	柄穴状
20	31	6類（16）	b類（16）
22	19	平担	平坦
〃	28	45は小椀で	44は小椀で
24	11	60は黄灰色の	61は黄灰色の
〃	12	61はやや粗い	62はやや粗い
〃	13	62は胎土が	63は胎土が
28	7	新紀ローム	新期ローム
30	9	考古学な	考古学的な
35	4	柄穴	柄穴
40	18	（Ⅳ－4）	（Ⅳ－1）
44	14	（PL.23－e）	（PL.24－e）
47	8	17世紀前半	17世紀後半
PL.5	2	SX02（玄室から羨門部をのぞむ）	SX03（玄室から羨門部をのぞむ）
PL.6	1	SX03（玄室より竪坑部をのぞむ）	SX02（玄室より竪坑部をのぞむ）
PL.24	説明	ピット1（60）	ピット2（60）
〃	〃	ピット2（55）	ピット3（55）
〃	〃	ピット3（f）	ピット4（f）

福岡市教育委員会
No.100Pg
57.3.26
埋蔵文化財センター

序

福岡市教育委員会では、板付周辺地域の開発に伴う事前の緊急調査を国庫補助事業により、昭和48年度から継続して実施し記録保存につとめています。

本年度は諸岡台地の調査により中世の溝・地下式横穴・近世の建物が検出されるなどの成果をあげることができました。

本報告書が市民各位の文化財に対する理解を深めるために役立つとともに学術研究の分野で活用されることを願うものであります。

なお、調査に当り助言をいただきました調査指導員の先生方をはじめ、関係者各位の寄せられました多大のご協力に対し、心から感謝を申し上げます。

昭和56年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　西津茂美

例　言

1　本書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて1980年度に実施した史跡「板付遺跡」周辺地区ならびに諸岡遺跡周辺地区の緊急発掘調査の報告である。

2　本書の執筆は次のとおりである。

Ⅰ……柳沢一男

Ⅱ……横山邦継

Ⅲ・Ⅳ……塩屋勝利・田中寿夫

Ⅴ……柳沢

3　本書に掲載した写真・挿図は、各地点の執筆担当のものが撮影・作成した。

4　本書で使用する遺構名称は次のとおりである。

ＳＡ……柵

ＳＢ……掘立柱建物

ＳＤ……溝

ＳＫ……土坑

ＳＸ……その他

5　本書で使用する方位はすべて磁針方位で真北との偏差は西偏6°40′である。

6　本書の編集は、各担当者が行い、柳沢がまとめた。

本　文　目　次

序　　頁

Ⅰ　本年度調査区と調査経過……1

Ⅱ　G－5b地点……2

　1　調査概要……2

　2　遺構と遺物……2

　3　小結……5

Ⅲ　諸岡Ⅰ区……8

　1　調査概要……8

　2　検出遺構……9

　3　出土遺物……11

　4　小結……12

Ⅳ　諸岡J区……15

　1　調査概要……15

　2　検出遺構……17

　3　出土遺物……21

　4　小結……27

Ⅴ　諸岡K区……28

　1　調査概要……28

　2　検出遺構……28

　3　出土遺物……36

　4　小結……46

図　版　目　次

PL．1　G－5b地点

　1　調査区全景（西から）

　2　K01出土状況

　3　K01

PL．2　諸岡Ⅰ区

　1　調査終了全景（南々西から）

　2　調査終了全景（北から）

PL．3　諸岡Ⅰ区

　1　SD01およびSX02（南から）

　2　SX01（西から）

PL．4　諸岡Ⅰ区

　1　SX01と柱穴群（南から）

　2　SX02（南西から）

PL．5　諸岡Ⅰ区

　1　SX02（南から）

　2　SX02（玄室から羨門部をのぞむ）

PL．6　諸岡Ⅰ区

1　ＳＸ03（玄室より竪坑部をのぞむ）
2　ＳＸ03竪坑部（南から）
3　ＳＸ03（西から）
ＰＬ．7　諸岡Ｉ区　出土遺物
ＰＬ．8　諸岡Ｊ区
1　調査前現況近景（東から）
2　調査終了全景（東から）
ＰＬ．9　諸岡Ｊ区
1　調査終了全景（東から）
2　調査終了後全景（南から）
ＰＬ．10　諸岡Ｊ区
1　井戸および柱穴群、ＳＤ01（北から）
2　ＳＤ01、ＳＥ01～05（南から）
ＰＬ．11　諸岡Ｊ区
1　ＳＤ01土層断面（北から）
2　ＳＥ01（東から）
ＰＬ．12　諸岡Ｊ区
1　ＳＥ02（東から）
2　ＳＥ03・04（東から）
ＰＬ．13　諸岡Ｊ区
1　ＳＥ04木製桶出土状況
2　ＳＥ04枠組状況
ＰＬ．14　諸岡Ｊ区
1　ＳＫ01（東から）
2　ＳＫ02（北から）
ＰＬ．15　諸岡Ｊ区　出土土師器・瓦器・白磁
ＰＬ．16　諸岡Ｊ区　出土青磁・陶器・染付
ＰＬ．17　諸岡Ｊ区　出土石製品・瓦・木製品
ＰＬ．18　諸岡Ｋ区
1　調査区全景（調査前・南東から）
2　調査区全景（調査後・東から）
ＰＬ．19　諸岡Ｋ区
1　掘立柱建物群（北から）
2　掘立柱建物群（南から）
ＰＬ．20　諸岡Ｋ区
1　ＳＥ01・02（南から）
2　ＳＥ03（北から）
ＰＬ．21　諸岡Ｋ区
1　ＳＤ03・04（南から）
2　ＳＤ01（東から）
ＰＬ．22　諸岡Ｋ区　出土遺物Ｉ
ＰＬ．23　諸岡Ｋ区　出土遺物II

ＰＬ．24　諸岡Ｋ区　出土遺物Ⅲ
ＰＬ．25　諸岡Ｋ区　出土遺物Ⅳ

挿　図　目　次

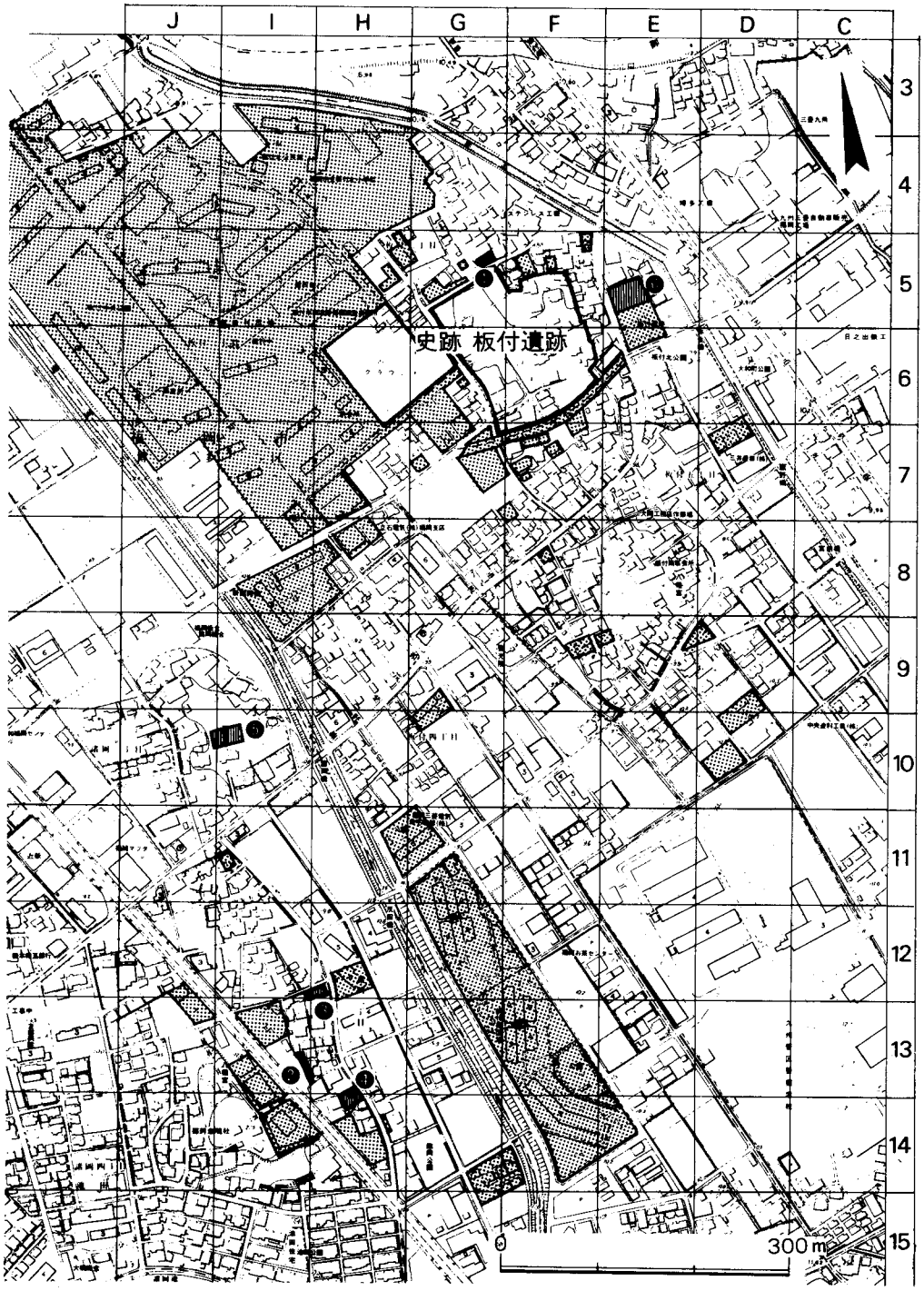
頁

Fig. 1　調査地区位置図（1/7000）
Fig. 2　Ｇ－５ｂ地点東西土層図（1/80）…… 2
Fig. 3　Ｇ－５ｂ地点位置図（1/200）…… 3
Fig. 4　K01壺棺墓実測図（1/20）…… 4
Fig. 5　K01実測図（1/8）…… 4
Fig. 6　ＳＢ01実測図（1/40）…… 5
Fig. 7　諸岡遺跡の分布と調査区位置図（1/3000）…… 6
Fig. 8　諸岡遺跡遺構配置図（1/1000）…… 7
Fig. 9　諸岡Ｉ区地形図（1/400）…… 8
Fig. 10　諸岡Ｉ区遺構配置図（1/200）…… 9
Fig. 11　諸岡Ｉ区地下式横穴実測図（1/80）…… 10
Fig. 12　諸岡Ｉ区出土ナイフ形石器実測図（1/1）…… 11
Fig. 13　諸岡Ｉ区表土層出土遺物実測図（1/3）…… 13
Fig. 14　諸岡Ｉ区各遺構出土遺物実測図（1/3）…… 14
Fig. 15　諸岡Ｊ区地形図（1/400）…… 15
Fig. 16　諸岡Ｊ区遺構配置図（1/80）…… 16
Fig. 17　諸岡Ｊ区溝（ＳＤ01）実測図（1/60）…… 17
Fig. 18　諸岡Ｊ区井戸（ＳＥ01～03・05）実測図（1/60）…… 18
Fig. 19　諸岡Ｊ区井戸（ＳＥ04）実測図（1/60）…… 19
Fig. 20　諸岡Ｊ区土坑（ＳＫ01・02）実測図（1/40）…… 20
Fig. 21　諸岡Ｊ区出土土師器・瓦器・土師質土器実測図（1/3）…… 21
Fig. 22　諸岡Ｊ区出土土師質土器・瓦質土器・白磁・青磁実測図（1/3）…… 23
Fig. 23　諸岡Ｊ区出土青磁・陶器実測図（1/3）…… 25
Fig. 24　諸岡Ｊ区出土染付・石製品・瓦・木製品実測図（1/3、1/4）…… 26
Fig. 25　諸岡Ｋ区位置図（1/400）…… 29
Fig. 26　遺構実測図（1/100）……30－31おりこみ
Fig. 27　掘立柱建物実測図Ｉ（1/100）…… 31
Fig. 28　掘立柱建物実測図II（1/100）…… 32
Fig. 29　井戸ＳＥ01・02実測図（1/50）…… 34
Fig. 30　ＳＥ03井戸枠実測図（1/12）…… 35
Fig. 31　出土遺物実測図Ｉ（1/3）…… 37
Fig. 32　出土遺物実測図II（1/3）…… 39
Fig. 33　出土遺物実測図Ⅲ（1/3、1/4）…… 43
Fig. 34　出土遺物実測図Ⅳ（1/3）……44－45おりこみ

表　目　次

頁

Tab. 1　諸岡Ｊ区遺構別出土遺物一覧表…… 27
Tab. 2　諸岡Ｋ区掘立柱建物計測表…… 33



①板付G－5b地点　②諸岡Ⅰ区　③諸岡J区　④諸岡K区　⑤諸岡館址　⑥板付E－5b地点

Fig. 1　調査地区位置図（1/7000）

昭和55年度調査区

既調査区

Ⅰ　本年度調査区と調査経過

昭和55年度の発掘調査は、宅地造成・住宅建築などに伴う緊急調査として、下記の６地点について実施した（Fig. 1）

	調査地区	調査地区地籍	調査対象面積	調査面積	調査期間
1	Ｇ－5b地点	博多区板付２丁目７－24	191.10m²	30m²	80.２.10～２.12
2	諸岡Ｉ区	〃　諸岡２丁目９－25	381.58m²	375m²	80.５.29～６.19
3	諸岡Ｊ区	〃　諸岡２丁目９－１	214.87m²	172m²	80.５.12～５.31
4	諸岡Ｋ区	〃　諸岡２丁目９－11	372.65m²	285m²	80.７.15～８.12
5	諸岡館址	〃　諸岡１丁目17－31	330m²	330m²	80.11.18～12.12
6	Ｅ－5b地点	〃　板付２丁目13－14	1,130m²		81.２.９～

Ｇ－5b地点　史跡指定地の北西に接し、Ｇ－5a地点の東に位置する。水田に使用されていたため、遺構面の削平が著しい。掘立柱建物、弥生後期終末の壺棺が検出された。

諸岡Ｉ区　諸岡丘陵の東裾上部に位置し、昭和47年に調査したＨ区の南に接する。明確な包含層はみとめられないがナイフ形石器が出土している。その他、中世の溝、柱穴群、地下式横穴などが検出された。

諸岡Ｊ区　諸岡丘陵の東裾端部で沖積地に接する位置にある。中～近世にわたっての溝、井戸、土坑などが検出された。

諸岡Ｋ区　昭和54年度調査のＧ地区の北に接し、丘陵東裾にあたる。調査区は、室町時代後半期の地下げ整地がみとめられる。古代末の溝・井戸、中世末～近世前半にわたっての掘立柱建物、柵、溝、井戸、土坑などが検出された。

諸岡館址　諸岡丘陵北端の舌状台地端部に築造されている。文献に見えないため、年代、性格は不明である。幅５ｍ、高さ１ｍほどの土塁が、南北（西辺のみ）60ｍ、東西（南辺のみ）20ｍ残存している。調査は、その南辺⅓程度をおこなった。その結果、土塁の両側には幅２ｍの溝がめぐり、その心々幅は約６ｍを測る。また弥生時代の遺構も重複しており、前期後半の貯蔵穴が検出された。

Ｅ－5b地点　昭和53年に調査したＥ－5a地点の北側に接し、板付台地の東端部にあたる。台地端部の地山上には夜臼・板付Ｉ式の包含層が検出されている。現在調査中。

調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会文化課　　文化部文化課埋蔵文化財第２係

事務担当　古藤国生

発掘担当　横山邦継（Ｇ－5b地点）　塩屋勝利・田中寿夫（諸岡Ｉ・Ｊ区）　柳沢一男（諸岡Ｋ区）　柳沢・二宮忠司（諸岡館址・Ｅ－5b地点）

調査補助　吉原滝雄　小林義彦　渡辺和子

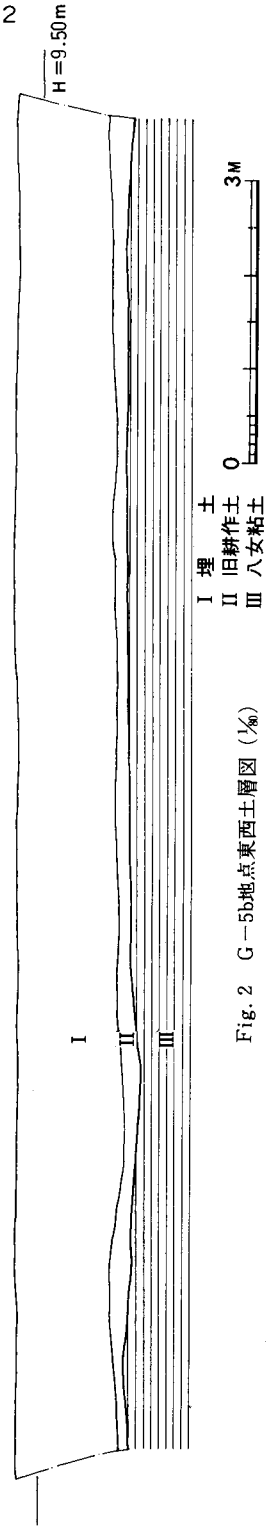


Fig. 2　G－5b地点東西土層図（1/50）

II　G－5b地点の調査

1　調査概要

G－5b地点（博多区板付２丁目７－24）は個人専用住宅建設のために緊急発掘調査を実施した。（Fig. 3）

調査は対象地が狭少で、排土作業等の条件から約30m²の範囲にとどまった。土層は（Fig. 2）15～20cm程度の旧耕作土直下は青白色粘土（八女粘土、標高９ｍ前後）となり周辺地域で通有の遺物包含層（暗茶褐色粘質土）は過去の削平によって失なわれていた。遺構は弥生時代終末期壺棺１基、掘立柱建物１棟などである。他に径10～30cm、深さ10cm程度のピット26個を検出したが建物としてのまとまりを欠き、時期的に限定できないものであった。

G－5b地点の両側に隣接するG－5a地点では地山面（標高8.5ｍ、鳥栖ローム）上に約30cm程度の遺物包含層（註1）（夜臼式土器、弥生中期土器、各種石器類、糸切り土師皿等出土）が残り、遺構としては弥生時代竪穴５基、甕棺墓43基（前期末～中期）、木棺墓13基、土坑墓11基（各れも前期末）、井戸３基（中世～近世）それに近世甕棺墓２基、木棺墓３基などが検出されているが、遺構の上で最も新しい近世甕棺、木棺墓は時代的に寛永年間以降の造営であることが副葬銅銭から知られ、G－5bを含む一帯の耕地化はこれ以降の時期に行なわれたものであろうか。

以下検出遺構と遺物について説明を加えることとする。

2　遺構と遺物

壺棺墓　（Fig. 4･5、ＰＬ. 1）

K01（Fig. 4）　第１号壺棺は調査区東側に検出された。過去の削平によって墓坑は殆ど完全に消失し、底部付近から胴部にかけての破片が全体の⅓程残存していた。埋置角度は不詳であるが、棺長軸はほぼＮ－15°－Ｗをむいている。

出土壺棺（Fig. 5）　棺として使用された壺は口縁および底部を欠損している。半球形の胴部は中位よりやや上った位置を最大径とし、この部分にヘラ状のもので右上りの刻目をつけた平たい突帯を

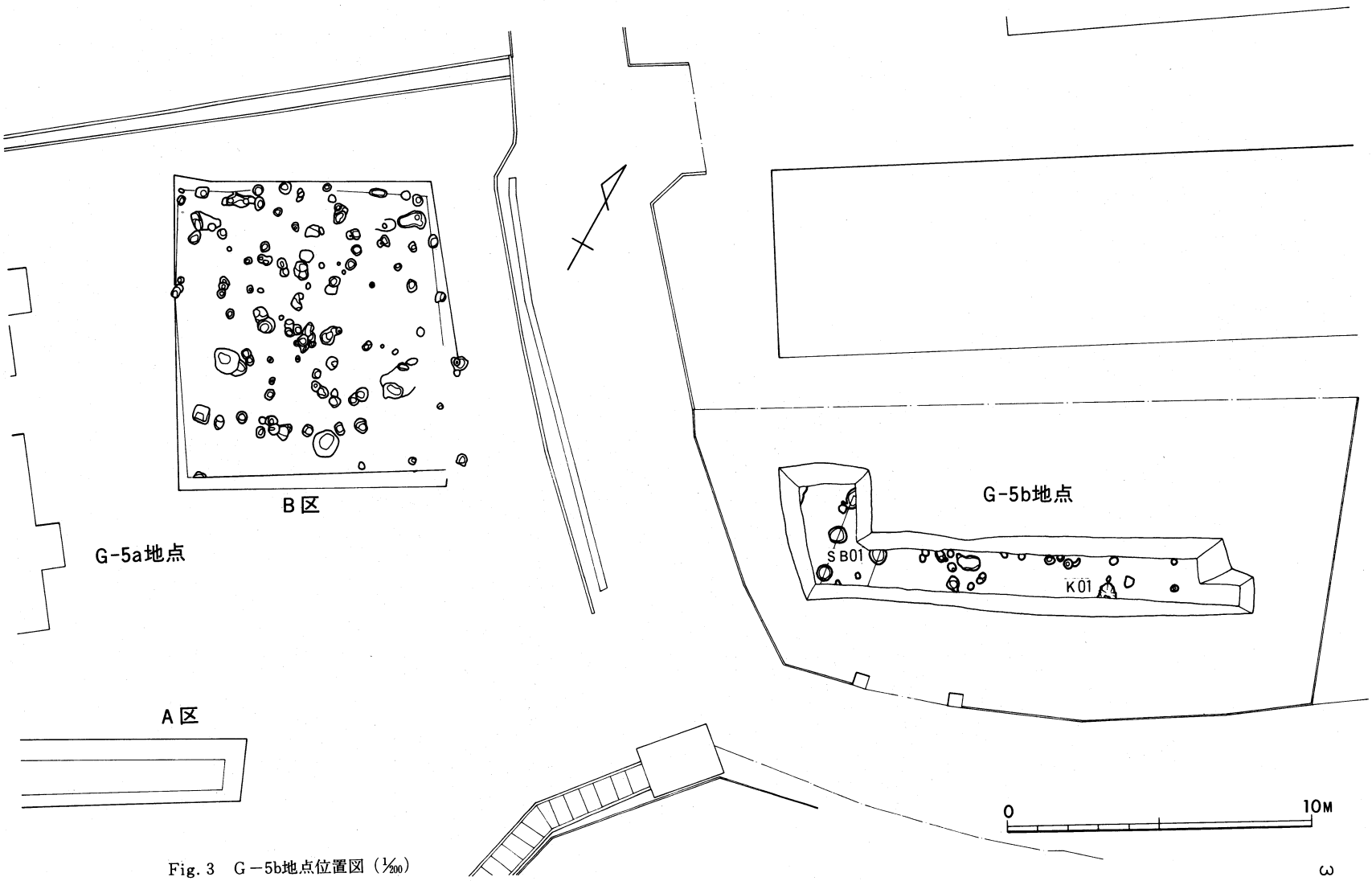


Fig. 3　G－5b地点位置図（1/200）

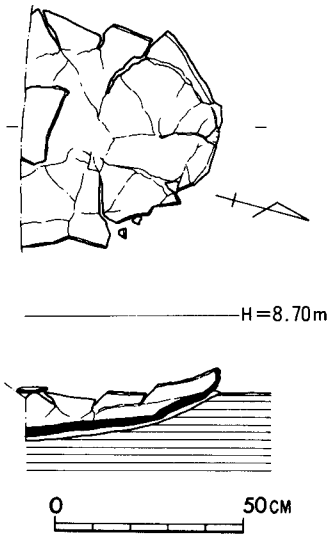


Fig. 4　K01 壺棺墓実測図（1/20）

一条廻らす。底部は丸底と考えられ、残存部分で器厚 3.4cm をこえる分厚いものである。このほか器壁は全体に均一さに欠ける。器色は外面赤褐色を呈し底部付近に径30cm程度の黒斑がみられる。また内面は淡い赤褐色を呈する。器面調整は外面が巾 2.7cm 程度の板状工具による刷毛目調整を行ない、底部付近は更にヘラ状のものでヨコにナデ調整している。内面は巾2～2.5cm程度の板状工具による荒い刷毛目調整を施こす。胎土は小砂粒を含み緻密である。焼成は堅緻である。時期的には弥生時代終末期の所産であろう。

掘立柱建物（Fig. 6、ＰＬ．1）

ＳＢ01　調査区西隅に検出された掘立柱建物と考えられる遺構で調査区の制約から全掘はできなかった。従って桁・梁規模は完全に知り得ないが、建物

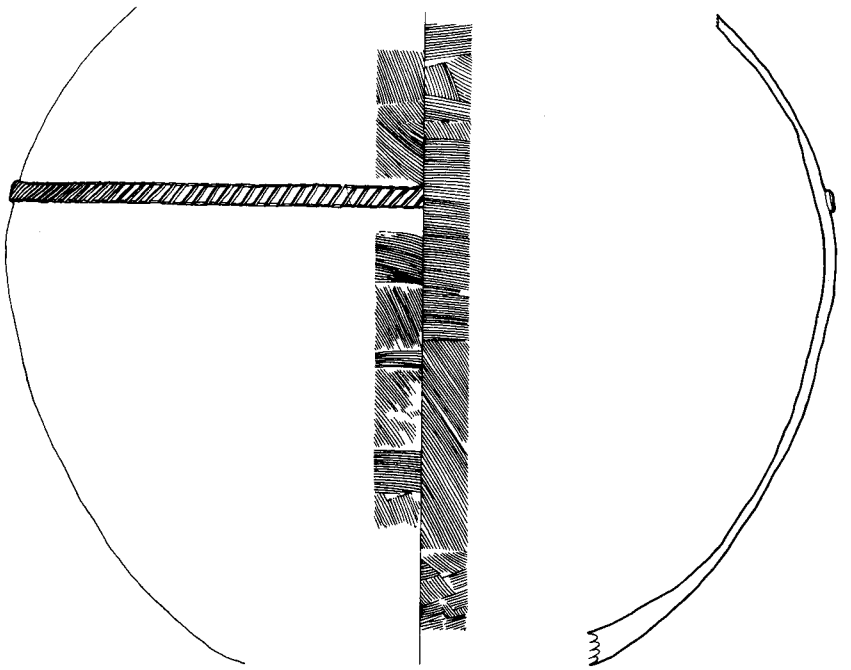


Fig. 5　K01　実測図（1/8）

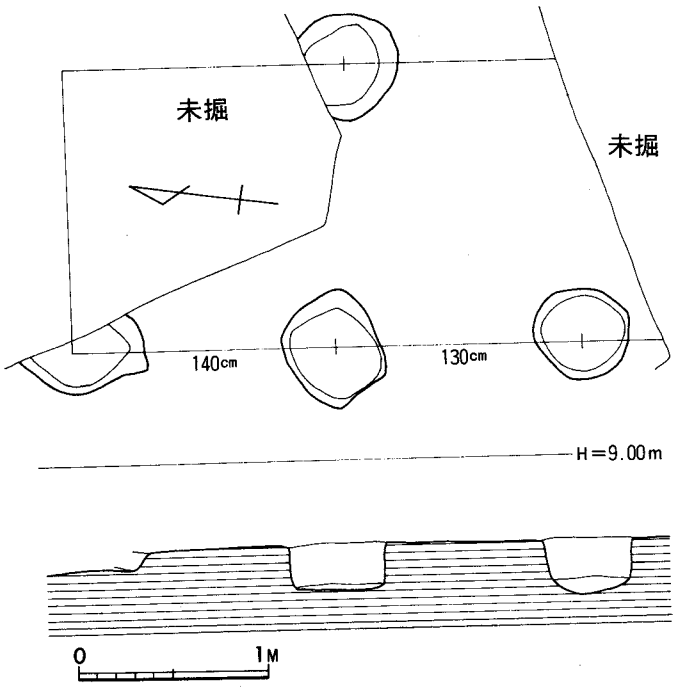


Fig. 6　ＳＢ01　実測図（1/40）

の長軸はＮ－9.5－Ｅをとる。桁行２間以上で柱間は130cmである。柱掘方は径50cm、深さ30cmをはかる。また梁行は１間以上と考えられ、柱間は 150cm である。本遺構は通常の掘立柱建物としては異例に近く、規模的に小さいものである。時期的には柱掘方の覆土中から各々弥生時代中期土器細片が出土しているのでこれ以降という大まかな限定しかなし得ない。

3　小結

Ｇ－5b地点の調査は過去の工作によって遺構の大部分は失なわれていると考えられた。

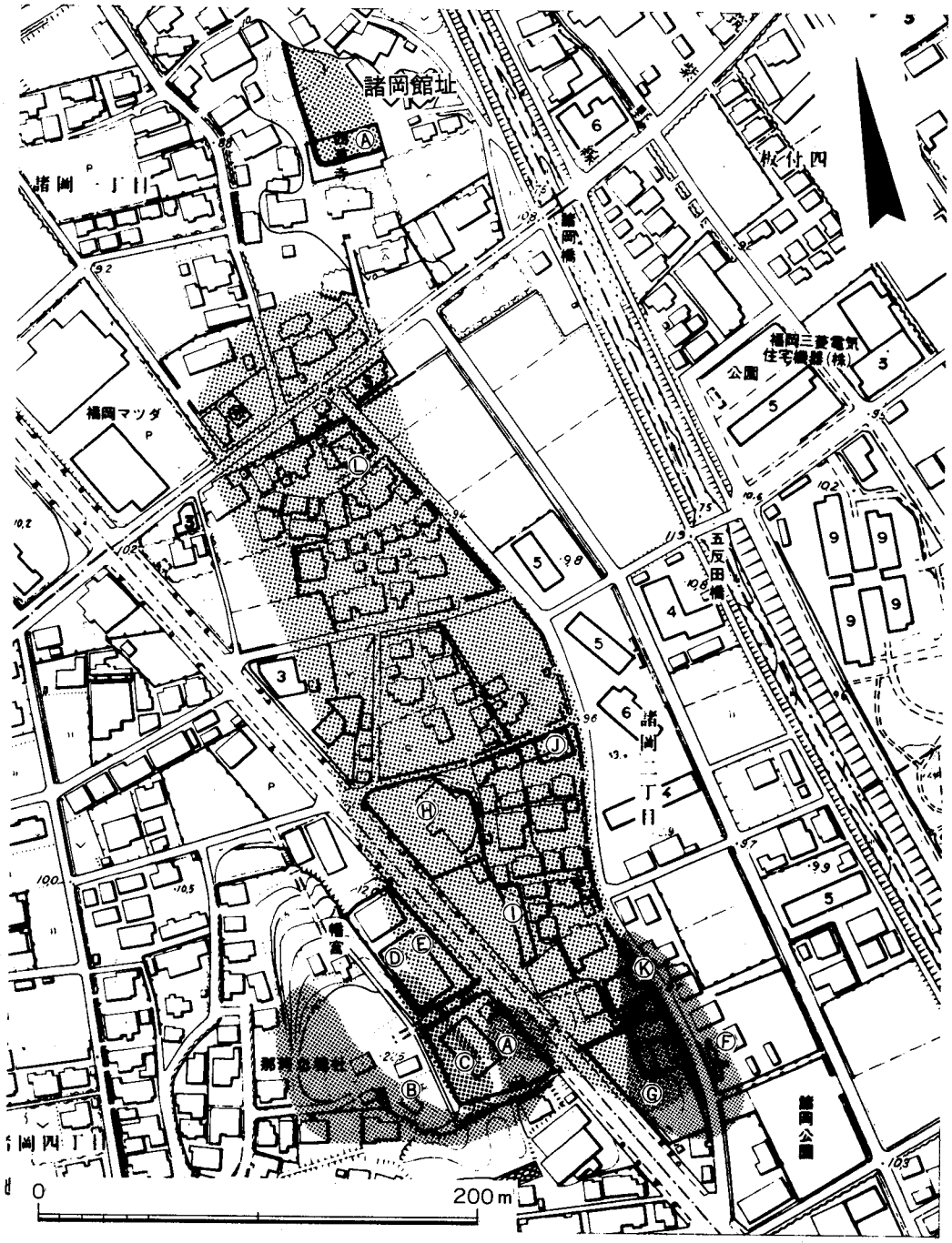
これまで板付丘陵では弥生時代墓地として確実なものは北端部にあたる板付北小学校運動場地点、本地点に隣接するＧ－5a地点、細形銅剣を出土した田端(註3)などであるが、各れも土坑墓、木棺墓(註2)を含む弥生時代前期後半～中期後半の時期に限られており、後期墓域の一端に触れ得たのは新しい成果である。また掘立柱建物は丘陵上では東側裾部にあたるＥ－５・６地点(註4)で中世期のものとされる１×２間の建物１棟が検出されている。今後の調査に期待したい。

註　註１　板付周辺遺跡調査報告３　福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集　1977

註２　板付－市営住宅建設にともなう発掘調査報告書－1971～1974　福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　1976

註３　中山平次郎「銅鉾・銅剣の新資料」　考古学雑誌第７巻第７号　1917

註４　板付周辺遺跡調査報告書６　福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集　1980



夜臼～板付Ⅰ式　板付Ⅱ式(無文系土器伴出)　甕棺墓(中期中葉～後期)　古代末～中世

Fig. 7　諸岡遺跡の分布と調査区位置図 (1/3000)

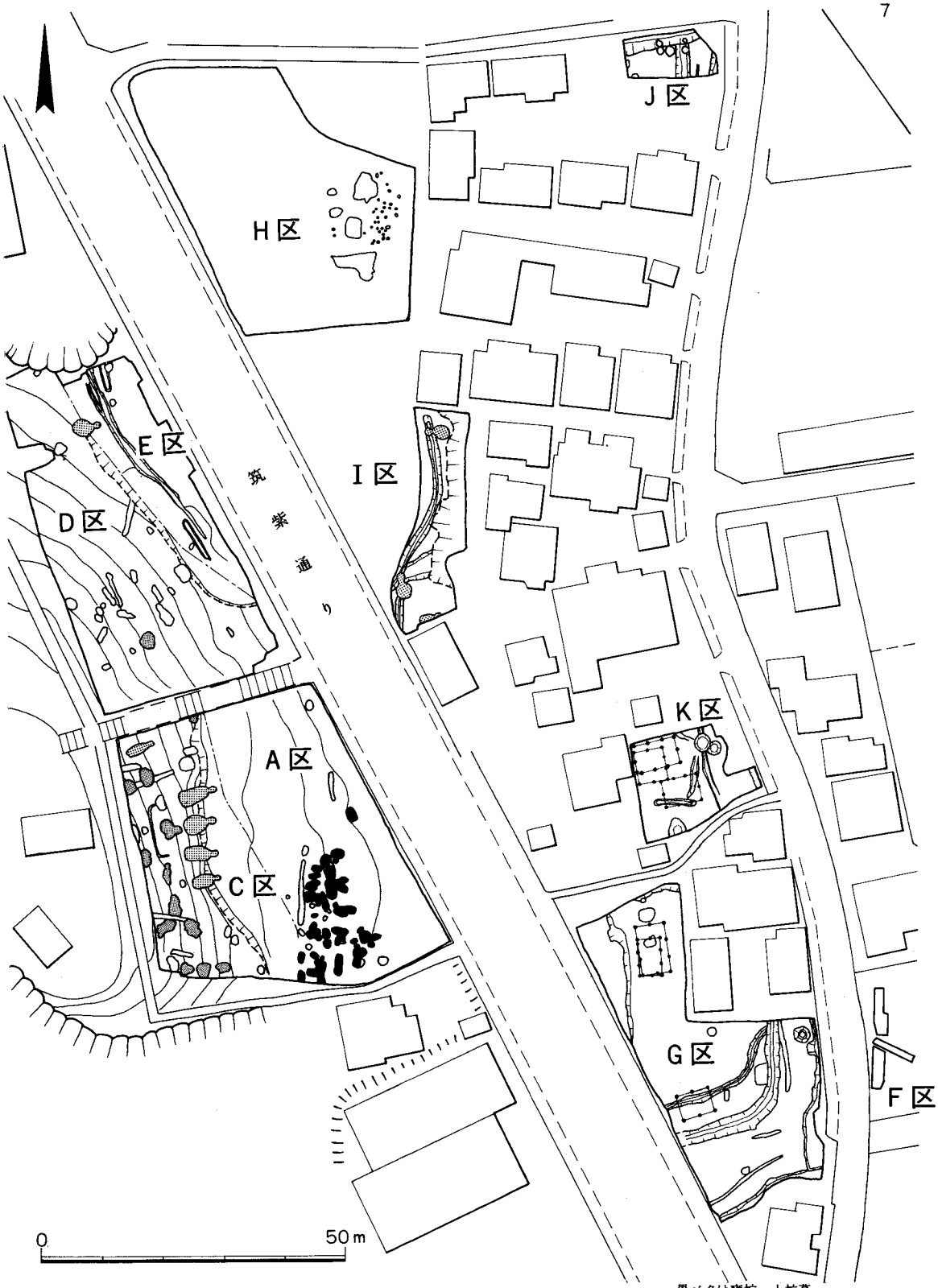


Fig. 8　諸岡遺跡遺構配置図（1/1000）

黒ベタは甕棺・土坑墓
細かいドットは無文土器出土土坑
粗いドットは地下式横穴

III　諸岡Ⅰ区の調査

1　調査概要

今回調査を行った諸岡Ⅰ区は、諸岡丘陵の緩やかな傾斜面となっている東側裾部に位置しており、1973～74年にかけて調査された諸岡A～D区とは国道3号線バイパスを挟んで相対している。標高12m前後を測る当地区の東側は人為的な削平によって切通し状の段落ちとなっており、人家の立ち並ぶ平地との比高差は約2mである。現状は山林で遺存状況は比較的良かった。

検出された遺構は柱穴状小竪穴102、地下式横穴（**SX**）3、溝（**SD**）2が調査区のほぼ全域にわたって検出された。柱穴と思われる小竪穴は調査区中央から北側にかけて分布する一群と、南側に集中する一群とにグルーピングできるが、個々の小竪穴間の関連性については明らかにできなかった。地下式横穴はこれまでの諸岡丘陵東側斜面の調査によって7基検出されているが、今回の分も含め計10基確認されたことになる。これらの地下式横穴は形態上の諸要素をほぼ同じくするが、調査区北側で検出された**SX03**の場合、竪坑の平面形が方形をなすなど若干の差異が認められた。時期比定の目安となる遺物の出土は少なく、またいずれも崩壊埋土からの出土のため、造営時期については明確にできなかった。溝は調査区の南北長軸に沿って二本検出された。いずれも緩やかな弧を描きつつ南北に連続すると思われるが両端で削平を受けている。これらの遺構の切り合いからみた先後関係は、**SD01→SX02→SD02→**柱穴状小竪穴の一部となる。出土遺物は少ない。**SD02**から土師器小片、瓦器椀、青磁、白磁、**SX02**から青磁、白磁、**SX03**から瓦質土器などが出土しているが、いずれも遺構床面からかなり浮いた状況で出土したものである。その他表土層からナイフ形石器、滑石製品、土師器小片などが若干出土して

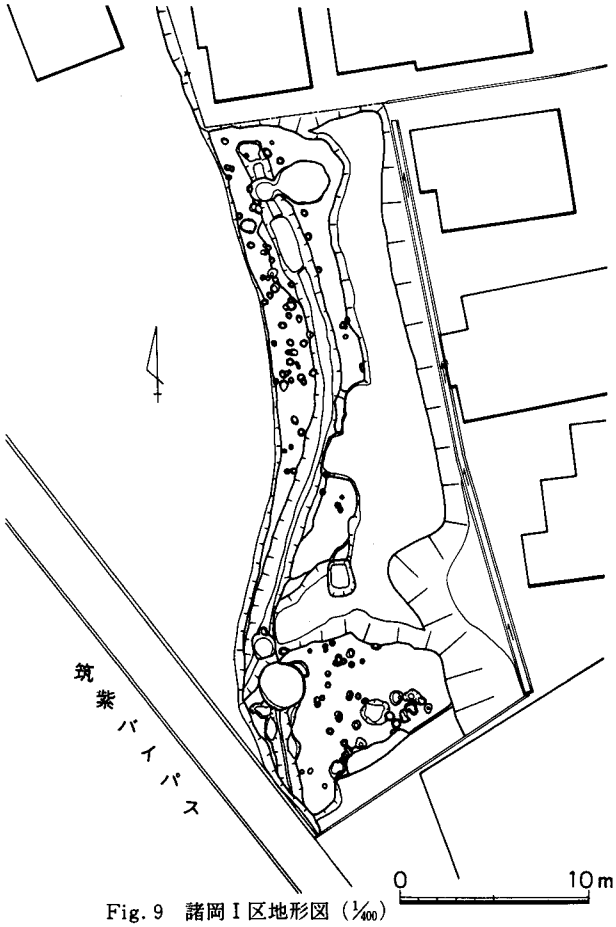


Fig. 9　諸岡Ⅰ区地形図（1/400）

いる。以下遺構・遺物について記述する。

2 検出遺構

溝

SD01（Fig. 10, PL. 3） 調査区南端～西側にかけて検出されたもので、土層観察によると、**SX02**崩壊埋土上部を切って掘削されている。溝断面形はV字形で、掘方上端で幅1.10～1.20m、深さ0.56～0.60mを測る。ほぼ南北に長軸をもつ。

SD02（Fig. 10, PL. 1） 緩やかな弧を描き南北に走る溝で、南側では断面形がV字形を、北側では逆台形をなし、次第に浅くなりつつ削平によって消滅している。南側では溝掘方上端幅1.80m～1.90m、深さ0.65～0.75mで、遺物は埋土上部から出土。

地下式横穴

SX01（Fig. 11－1, PL. 3・4）

調査区の南端にかかり完掘はしていない。竪抗は推定径約80cmの不整円形、主室は長さ約2.40m、推定幅約1.75mの不整楕円形にそれぞれなる。床面はほぼ水平で平担な面となっている。壁面は内弯気味に除々にせり上りドーム状をなす天井部へと続く。天井部の高さは復元推定約1.5mほどである。

SX02（Fig. 11－2, PL. 4・5）

SX01の北西約3.5mの地点に隣接して造営されている。長軸の方向はN－23°40′－Wで、**SX01**とはほぼ直角をなす。竪坑は径85～90cmほどの円形、主室は長さ2.61m、幅2.28mの不整円形の平面形をそれぞれもつ。壁面は床面からやや外へ張りだすように立ち上り床面から50cmほどの位置で緩やかに内弯し

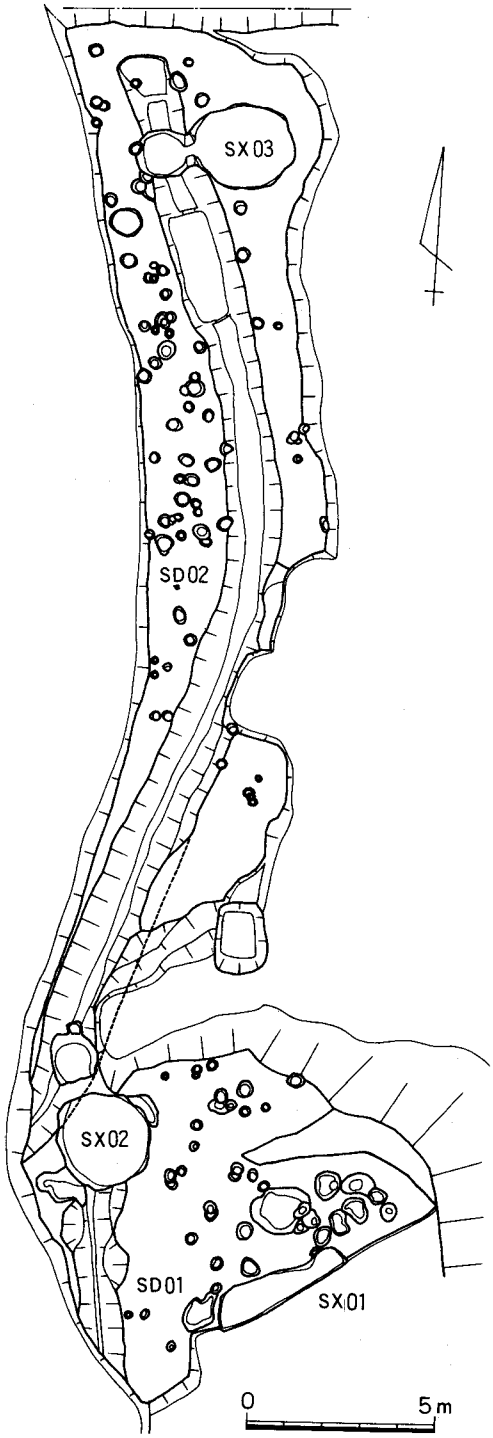


Fig. 10 諸岡I区遺構配置図（1/200）

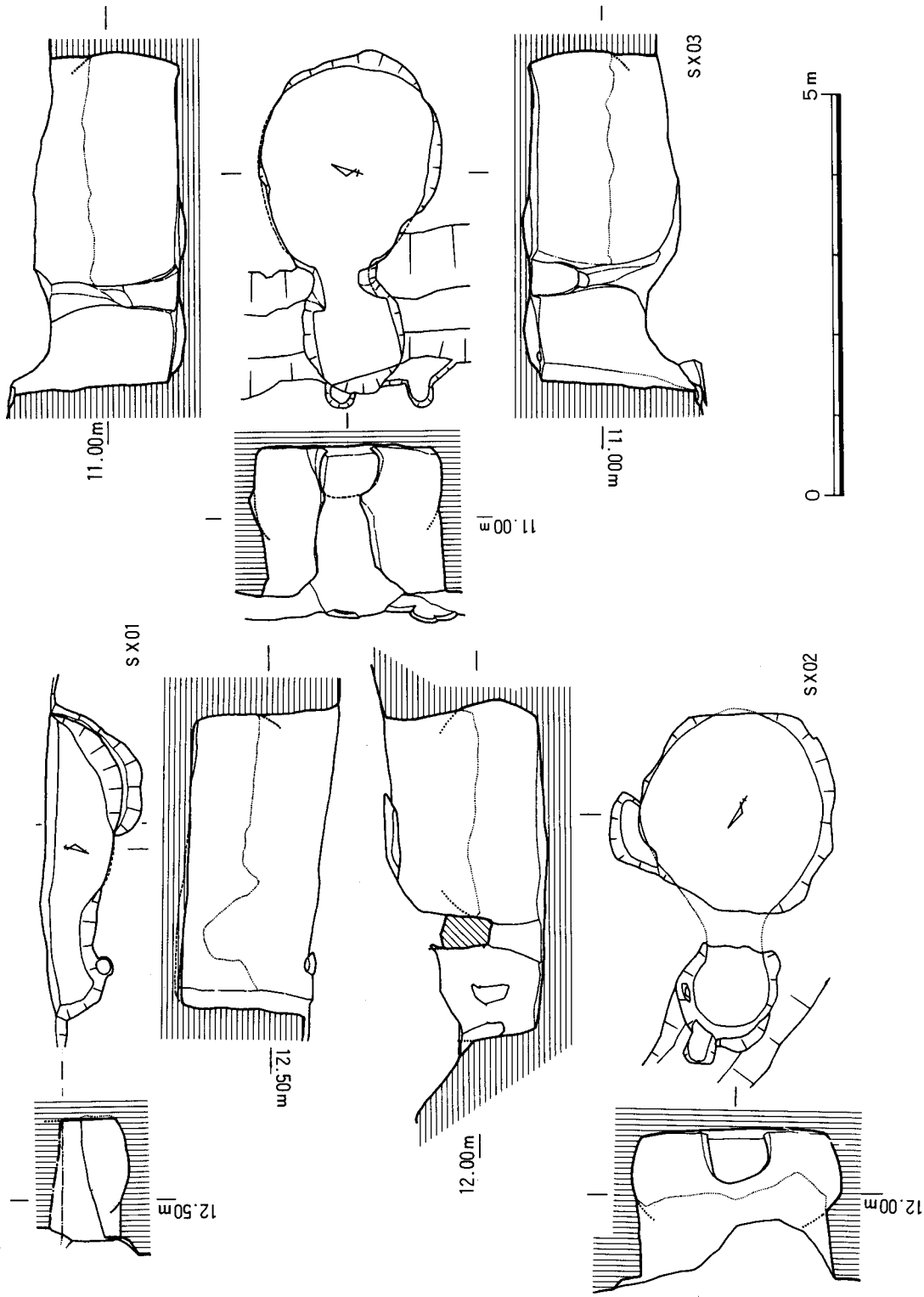


Fig. 11　諸岡Ⅰ区地下式横穴実測図（1/80）

つつドーム状をなす天井部へと続く。羨門部は長さ0.51m、高さ0.61m、幅0.80mを測る。土師器小片2、白磁椀小片4が崩壊埋土から出土。

SX03（Fig. 11−3, PL. 6）　調査区北側で検出。長軸方向はS−86°10′−Wをとる。竪坑は**SX01・02**が円形の平面形をなしていたのに対して、やや歪んだ方形となっており、また主室の長軸に対して約13°南へずれて配置されている。床面の四隅には、径6〜7cmを測るピットがみられたが、これは竪坑掘削時もしくは造営時の壁面崩壊防止のための矢板杭の痕跡かと思われる。主室平面形は長さ2.54m、幅2.15mの楕円形をなす。天井部は**SX01・02**同様ドーム状をなすと考えられる。土師器小片4、瓦質土器鉢1、砥石1が出土している。

3　出土遺物

ナイフ形石器（Fig. 12, PL. 7）　黒曜石製。現存長4.3cm、幅1.45cm、厚さ0.65cm。厚手の縦長剥片を素材とするもので、基部の二側縁に角度の深いブランティングを施し、鋭利な一側縁を素材のまま生かし刃部とする。先端部は素材時の打瘤部にあたる。素材の形状からみて、ブランティングに先行して、素材の折断が行われたと考える。基部調整は顕著でない。

土師器・皿（Fig. 13−**1**）　口径8.4cm、底部径6.4cm、器高1.3cm。糸切り・板目痕の残る厚手の底部から体部は直線的に立ち上り、口縁部へ続く。胎土・焼成ともに良好。

瓦器・椀（Fig. 13・14）　**2**・**3**は底部、**13**は口縁部破片である。いずれも器表面は銀灰色を呈し、内面にはヘラミガキが施されている。**2**・**3**の外底にはヘラ切り痕が残る。**13**は復元口径15.2cmを測る。体部はやや内弯気味に外広し、口縁端部は丸くおさまる。

瓦質土器・鉢（Fig. 14）　**12**は摺鉢と思われる。胎土はきめ細かく、焼成は堅くしまる。復元口径は24.0cmを測る。口縁部は外面端部で肥厚し段を有す。器内面は刷毛目調整後、目が八条の櫛状施文具で底部から口縁にかけ掻き上げている。

白磁・椀（Fig. 13・14, PL. 7）　いずれも破片であり全体の形状を知りうるものは無い。体部の形態的な特徴から、3類に分類できる。体部はわずかに内弯気味に外広して立ち上がり、口縁端を折り返して玉縁をなすもの（A類）、口径に比して器高が低く、体部は内弯しつつ立ち上り、内弯する体部中位から外広し口縁端部を引き出すもの（B類）、直線的に外広する体部から口縁端部をそのままおさめるもの（C類）などであり、A類が多数を占めている。A類は**4**〜**6**、**14**〜**16**

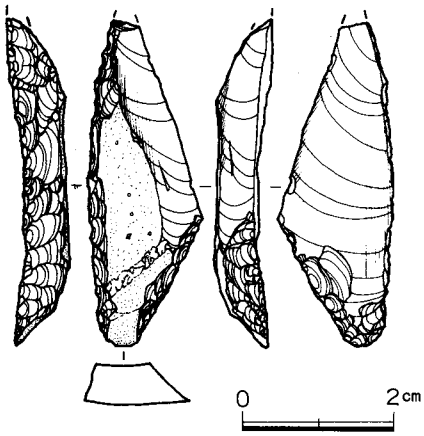


Fig. 12　諸岡I区出土ナイフ形石器実測図（1/1）

21～**22**で、いずれも玉縁は大きく、外面はヘラ削りし、内面見込みに沈線を１条めぐらす。胎土はおおむね灰白色を呈し細かい黒斑が見られ、釉は体部外面下半まで施される。焼成が良好でキメ細かく青味の濃いもの(**14**)、淡い青味を帯びた乳灰色を呈するもの（**4**，**6**，**16**，**21**，**22**）、灰白色を呈し粗い貫入があるもの(**5**)、焼成が悪く黄灰色を呈するもの(**15**)など焼成および釉調に相違が認められる。復元口径は最小14.8cm(**14**)、最大17.2cm(**6**)の間におさまる。Ｂ類は**8**，**19**で高台を細く高く削り出し体部外面はヘラ削りする。釉は外面高台部付近まで施され、内面に沈線１条と共に櫛目文を配す。胎土は灰白色、釉色は淡い乳灰白色を呈す。Ｃ類は**20**のみで胎土は灰白色を呈し精良、青味を帯びた乳白色の釉である。底部の破片には二種類あり、**7**と**17**は幅広の高台で削り出しが浅いもので、玉縁口縁となるものである。**18**は高台を細く高く削り出し内底見込みに段をつくり、釉を輪状にカキ取っている。口縁部を外反させる形態の椀であろう。

青磁・椀（Fig. 13・14，ＰＬ．7）　**9**は口縁部片で復元口径16.2cm、口縁端部を丸くおさめ内面に沈線をめぐらす。釉は薄く、内面に草花文を配している。**10**～**11**は底部片で、器肉の厚い底部から断面四角形の高台を削り出している。胎土は灰色を呈し精良で、釉色は草緑色を呈し高台部畳付およびその内側は露胎となる。**10**は内面を２条の沈線で五つに画して飛雲文を配し、内底見込みにはキノコ状の文様を３個片彫りするもので、**11**は内面と見込みに草花文を片彫りする。**23**は口縁部片で復元口径14.3cm、口縁端部を外反させ丸くおさめ、釉は厚く青緑色を呈す。これらはいずれも龍泉窯系青磁である。

滑石製合子（Fig. 14－**24**）　底部径5.6cm。底部は平担にノミ削りによって仕上げられる。体部外面はノミ削り痕を残しており、直線的に底部から外広しつつ立ち上った後、若干内傾気味に口縁へと続く。内面はノミ成形後滑らかな面に仕上げられている。

砥石（Fig. 14，ＰＬ．7）　砂岩製。現存長16.7cm、巾10.1cm、厚さ8.5cmを測る。表裏および左右両側面に滑らかな砥ぎ面が残る。下半部が欠損している。

4　小結

遺構の切り合いからみた先後関係は先述したように、**ＳＤ02→ＳＸ02→ＳＤ01**→柱穴状小竪穴群の一部、**ＳＤ02→ＳＸ03**となり、少なくとも三時期にわたる遺構の造営時期が想定できる。表土・各遺物は、ナイフ形石器を除いて概ね11世紀後半～14世紀後半におさまるが、これらから各遺構の時期について検討すると次のようになる。**ＳＸ02**の崩壊埋土中から出土した白磁椀**19**は太宰府周辺においては、その初現を14世紀中頃にみるとされている。したがって**ＳＸ02**を切る**ＳＤ01**は、少なくとも14世紀後半以降のものと考えられる。**ＳＸ02**は、**19**の堆積以前は当然として、諸岡Ｃ・Ｄ区、板付Ｆ－7a調査区の諸例から12世紀後半～13世紀に求められ、**ＳＸ01・03**もほぼ同時期と考えられよう。**ＳＤ02**については明確でないが、**ＳＸ02・03**より若干古い時期11世紀末～12世紀前半とみて大過ないと思われる。

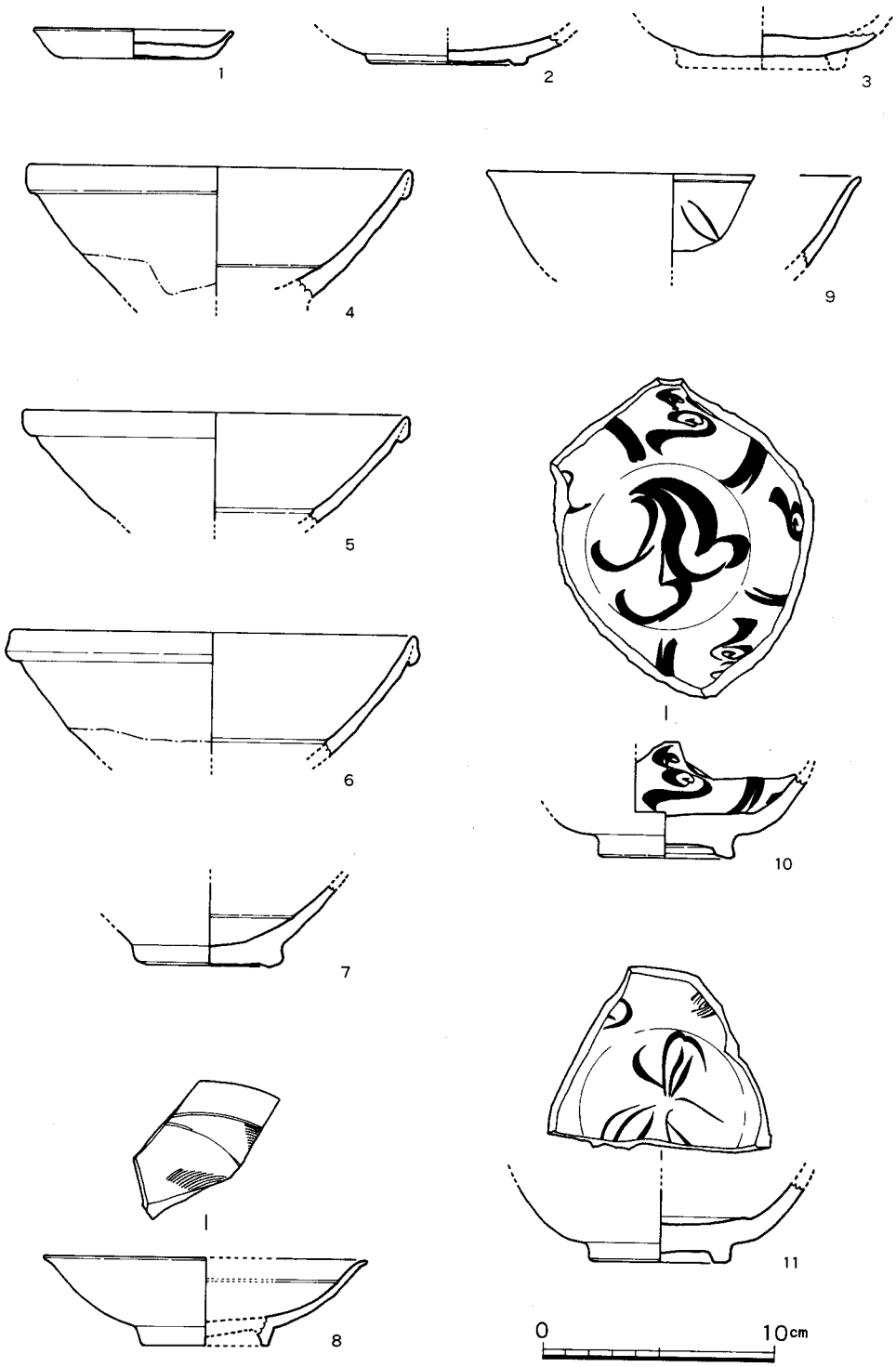


Fig. 13 諸岡 I 区表土層出土遺物実測図 (1/3)

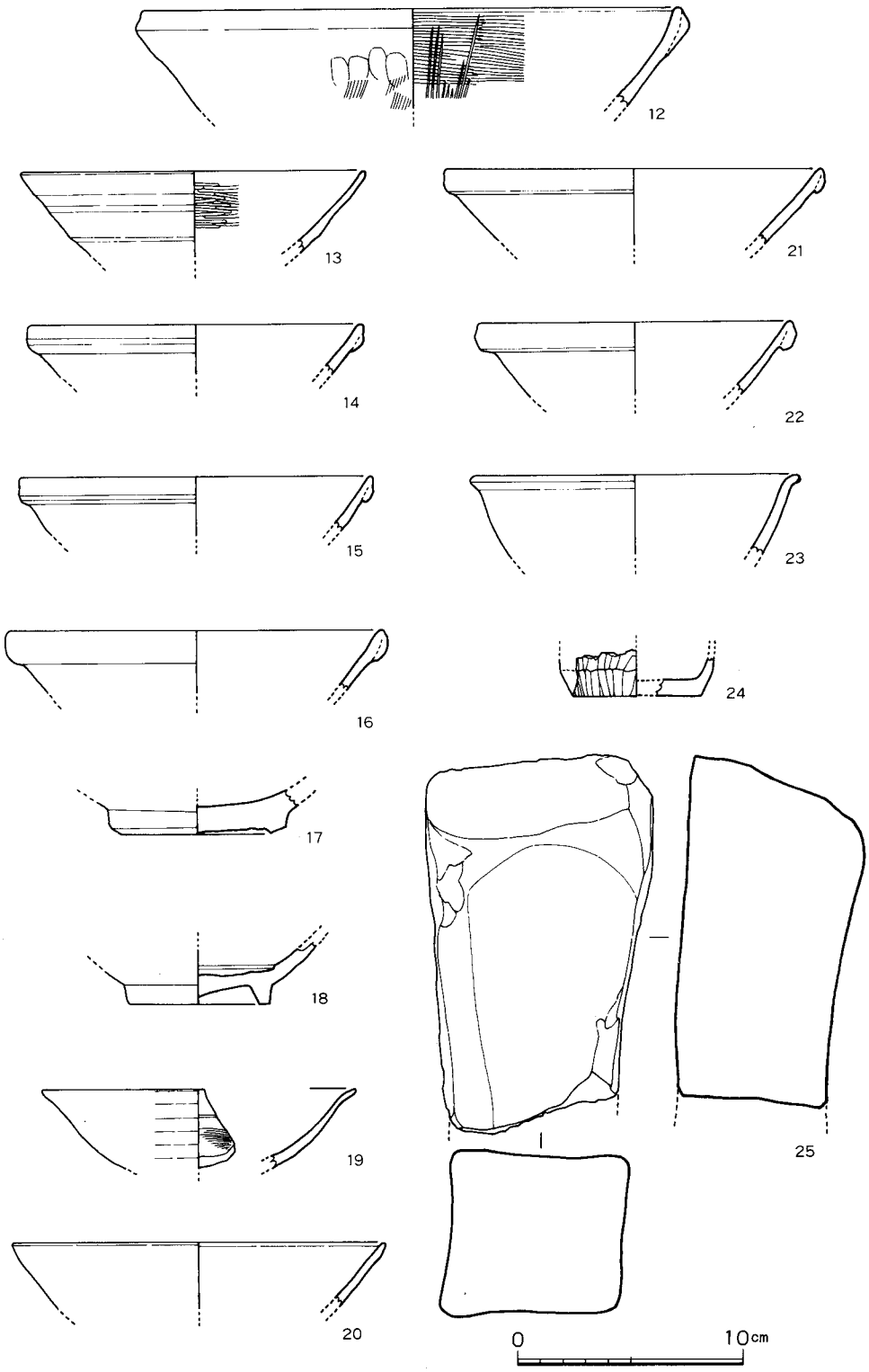


Fig. 14　諸岡Ⅰ区各遺構出土遺物実測図　(⅓)

Ⅳ　諸岡Ｊ区の調査

1　調査概要

諸岡Ｊ区は諸岡丘陵東側斜面の端部に位置し、Ｉ区から北東へ約70ｍ隔てた地点にある。古くから宅地化されているため、すでに自然地形は失なわれ、地山も大幅な削平を受けている。旧地形では調査区東側に隣接する里道が南北に走っており、その東側は段落ちして水田が営まれていた。現況は水田が埋め立てられ、市道が走り高層アパートが建てられている。北側は里道を挟んで民家があり、西側、南側も民家が隣接する。今回の調査は住宅の建替えに伴うもので、発掘区は建築部分のみに限定し、東西15ｍ、南北８ｍ、植木のために北東隅を斜めにした略長方形をなす面積約172㎡を調査した。調査区全体は整地のために地山面まで削平を受け、暗褐色粘質土の遺物包含層は黄褐色粘質土の地山の凹部に部分的に残るのみで、30cmの厚さで客土層が直接地山を覆っている。地山面の標高は9.40ｍ前後でほぼ平坦であるが、北側と東側にわずかに傾斜している。

検出した遺構は、溝４条、井戸５基、土坑２基、柱穴状小竪穴83個である。溝は調査区東半部にＳＤ01が南北に走り、その東側にＳＤ02が並行しながら途中で消滅する。調査区北端部には西から東へ走るＳＤ03を検出したが、西壁と底の一部を明らかにしえたのみで、北側は調査区を外れるので、全体の規模は不明である。また、調査区東端部に東側に急傾斜する段落ちが認

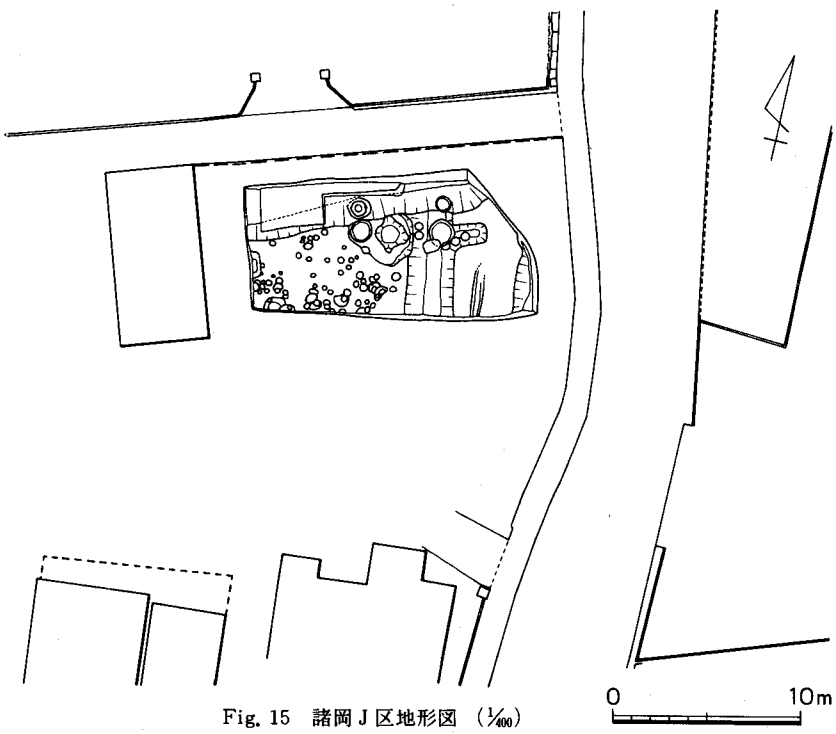


Fig. 15　諸岡Ｊ区地形図（1/400）

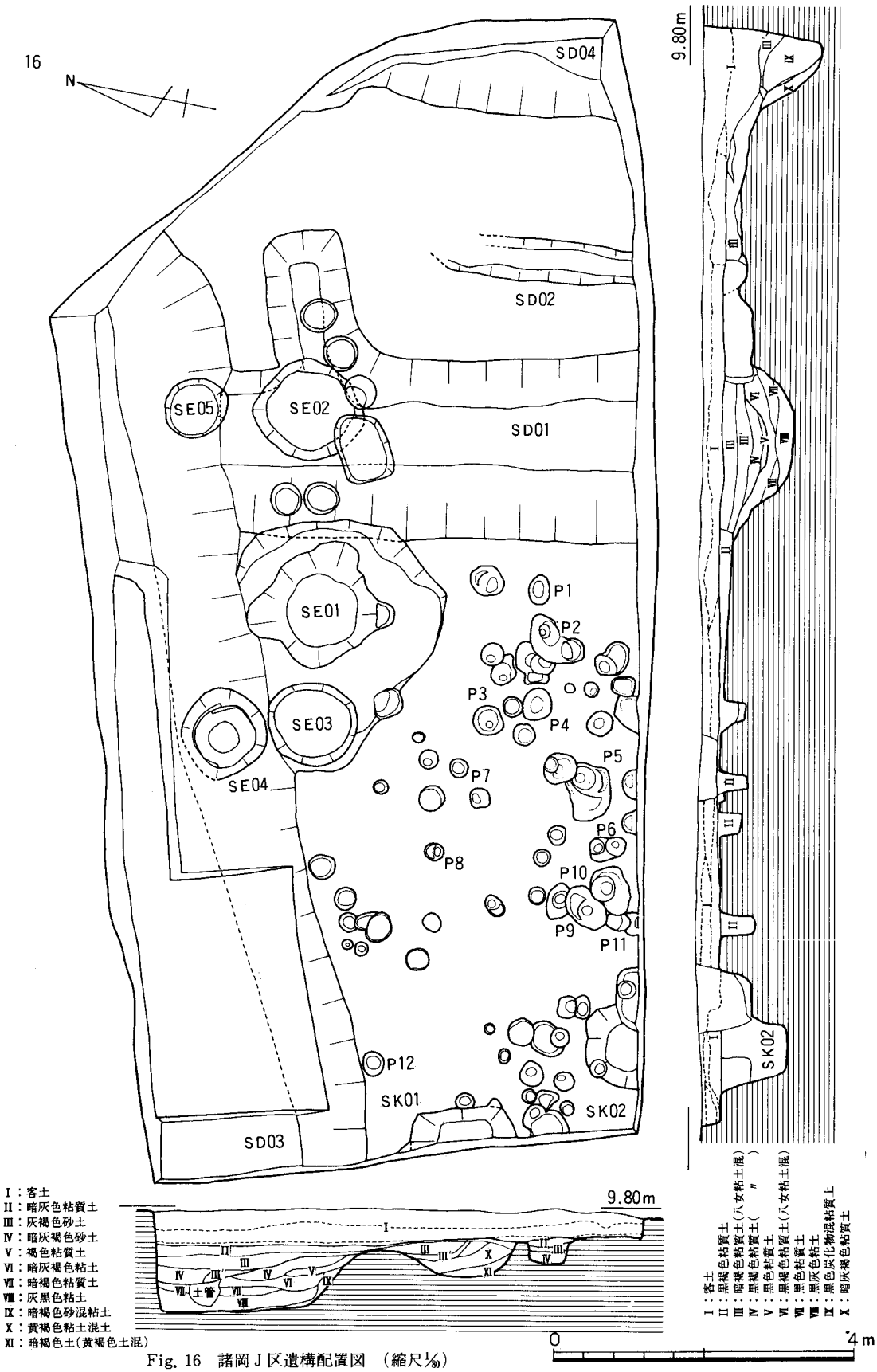


Fig. 16　諸岡J区遺構配置図　(縮尺1/80)

められ、その東側も調査区を外れるため全体は不明であるが、一応溝として考えＳＤ04とした。井戸は調査区中央北寄りに５基が集中するが、切り合うものは無い。ＳＥ01とＳＥ03は地山面から検出され、ＳＥ02はＳＤ01の埋土から、ＳＥ04とＳＥ05はＳＤ03の埋土除去過程で検出された。土坑はＳＫ01が調査区西壁に接して、ＳＫ02が南壁に接して検出された。柱穴状小竪穴は調査区西南寄りに集中し、掘り方、切り合い、埋土の相違から、中世から近代にわたるものが重複すると考えられるが、調査区の限定から建物を確実になしえない。遺物は、土師器、瓦器、瓦質土器、瓦、宋・元代の磁器などの外、明、李朝の陶磁器、伊万里、唐津、高取など近世の陶磁器、下駄、滑石製石鍋などが出土した。

2　検出遺構

溝

ＳＤ01（Fig. 14, ＰＬ. 10）　長軸をＮ－11°－Ｗにとり南から北へ直線的にのびる溝で、幅広の逆台形の断面をなす。南端部での上幅2.60ｍ、底幅0.93ｍ、深さ0.80ｍを測る。北側5.40ｍの位置でＳＤ03によって切られ、北西壁はＳＥ01によって切られている。東北壁には平面長方形の張り出し部があり、長さ1.80ｍ、幅1.10ｍ、深さ0.50ｍを測る。溝の埋土はレンズ状に堆積し５層に分けられる。埋土中の遺物は土師器皿、坏、椀、瓦器椀、土師質の鍋、釜、施釉陶器、白磁椀、青磁椀、瓦、砥石などが出土している。埋土最下層の黒灰色粘質土の遺物は

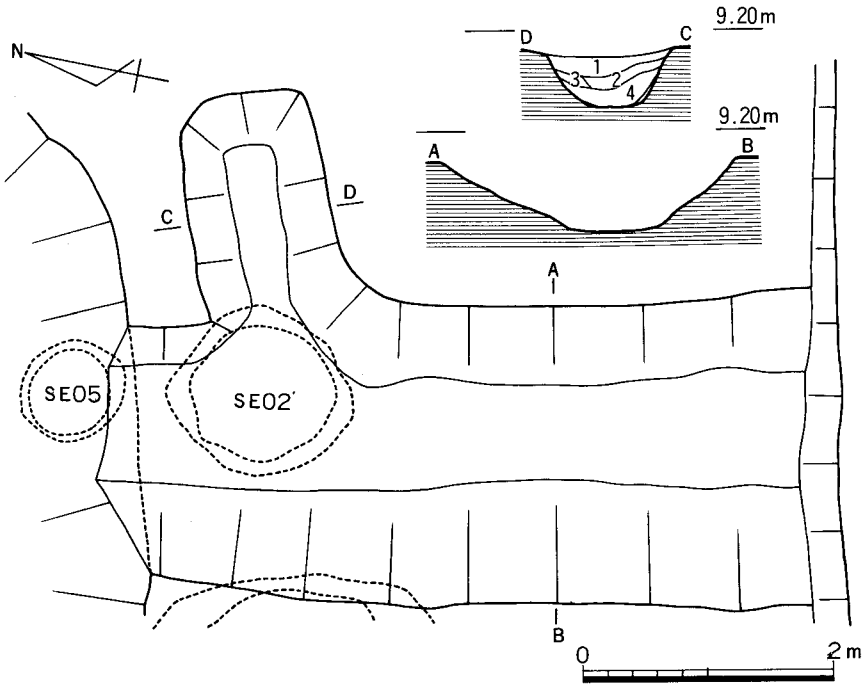


Fig. 17　諸岡Ｊ区溝（ＳＤ01）実測図（1/60）

糸切り離しの土師器皿、布目丸瓦片が出土し、**ＳＤ03**の時期比定の参考となろう。

ＳＤ02・ＳＤ01の東側約1.0ｍの位置に並行する小溝で、調査区中央付近で消滅する。幅は0.40ｍ、深さは0.20ｍ前後である。埋土は暗灰褐色粘質土単一層で、白磁、青磁が出土した。

ＳＤ03　主軸をＮ－67°－Ｅにとり西南西から東北東へのびる溝である。調査区を外れるため北側壁の掘りかたは明らかでない。南側壁掘り方の傾斜は約45°で、底はゆるやかな傾斜を見せて続き、北端部での深さは0.82ｍを測る。調査区西端部では掘りかた下場から1.90ｍの位置まで底が続いており、断面形は逆台形をなす幅広の大溝であると考えられる。埋土からは土師器、瓦器、瓦質土器、白磁、青磁などの外、近世の陶磁器が多量に出土した。この**ＳＤ03**が埋まった後、**ＳＥ04**と**ＳＥ05**が掘られている。

ＳＤ04　調査東端に南北へ続くもので、西側壁と底の一部しか確認できない。掘り方の傾斜は約50°で深さ0.95ｍ、底は平坦である。**ＳＤ03**とほぼ直交する位置関係をなすが、未掘のため不明である。埋土中の遺物には、土師器、土師質土器、近世陶磁器、石斧などがある。

井戸

ＳＥ01　（Fig. 18, ＰＬ. 11）上端径1.65ｍ、深さ1.87＋α ｍ、底付近径0.94ｍの素掘りの井戸である。掘り方上端から1.45ｍ下方までは井戸壁はやや外広するがそれ以下は垂直に掘削が行われている。湧水点は遺構検出面から約1.80ｍ（標高7.20ｍ）の位置で、湧水量は多い。井戸内の埋土は黒灰色粘質土であり、堆積状況からみて埋め立てられたものと考える。遺物は土師器小片、陶器摺鉢が出土している。いずれも埋土上部からの出土である。

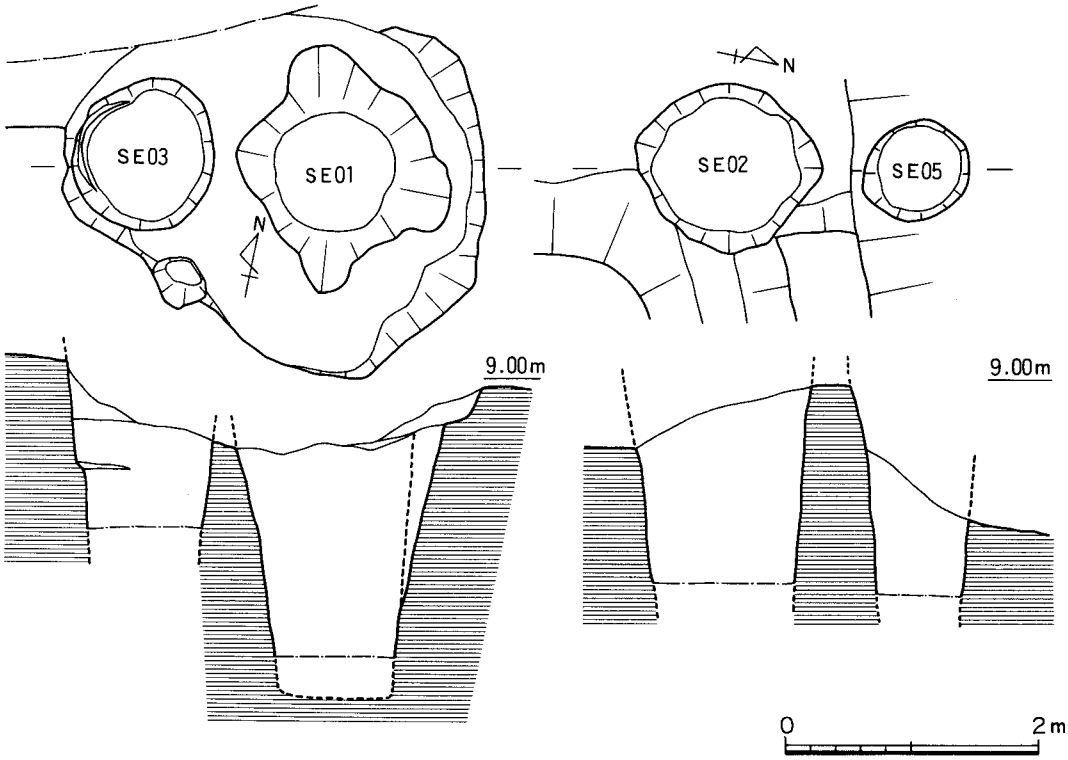


Fig. 18　諸岡Ｊ区井戸（ＳＥ－01・02・03・05）実測図（1/60）

SE02（Fig. 18, PL. 12）上端径1.34m、深さ1.56＋α m、底付近径1.3mの素掘りの井戸である。井戸壁はほぼ垂直に掘削されている。湧水点は**SE01**と同様ほぼ同じ高さで、湧水量も多い。埋土は自然堆積とは認められない。黒灰色粘質土の単一層であり**SE01**同様埋め立てられたと考える。埋土上部より白磁が出土。

SE03（Fig. 18, PL. 12）上端径1.15m、深さ1.35＋α m、底付近径0.895mの素掘の井戸で、井戸壁はやや外広し、西側に一段の作りつけがみられる。埋土の堆積状況は**SE01**と同様である。湧水点の位置は、未確認であるが他の例とほぼ同じ標高をとると思われる。埋土上部から土師器小片が出土。

SE04（Fig. 19, PL. 13）掘り方は径1.16mの円形をなし基底部に刳り貫きの木枠を据え置いた井戸である。現存高59.1cm、長径77.8cm、短径67.2cm。基底面は八女粘土層下部にあたり、細砂質粘土となっている。組み合わせは2.5～3cm厚の刳り貫き板材の両端下部に径5.2cmの柄穴を穿ち、そこに楔状の用材を打ちこんで二枚の板材を桶状に固定している。おそらく木枠上部にもこれと同様な造作が行なわれていると思われるが腐蝕しており明らかでない。北側の板材内面には柄穴状の未貫通の穴がみられるがその用途は不明である。木枠と掘方との隙間には青灰色粘土をつめこみ木枠の安定を図っている。瓦器椀片3、白磁椀片1、瓦片1、染付片1が掘り方埋土（暗灰褐色粘土）より出土している。なお**SE04**は**SD03**の埋没後掘削されている。

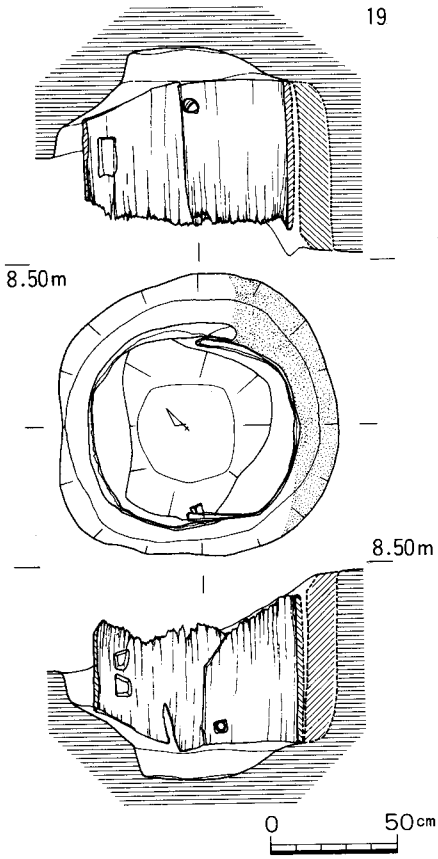


Fig. 19 諸岡J区井戸（SE04）実測図（1/60）

SE05（Fig. 18, PL. 10）上端径0.83m、深さ1.68＋α m、底付近径0.66mの素掘りの井戸である。井戸壁は底にややすぼまりつつ掘削されている。湧水点は**SE02**とほぼ同じ標高7.20mを測る。**SD03**の埋没後掘削されている。掘り方埋土は黒褐色粘質土の単一層で、自然堆積とは認められない。遺物は出土していない。

土坑

SK01（Fig. 20, PL. 14）調査区西壁にかかり検出された。平面形は長軸1.60m、短軸0.50＋α mの長方形をなす。深さは0.46mを測る。掘り方内には7枚の土層堆積がみられる。Ⅵ層から青磁椀高台片、Ⅲ・Ⅳ層から瓦器、白磁、染付等の小片が出土している。

SK02（Fig. 20, PL. 14）南壁にかかり検出。平面形は径約1.20mの不整円形をなす。掘り方内埋土は黒褐色粘質土の単一層で、土師器、瓦器、白磁、染付等の小片が出土している。

3　遺物

記述にあたっては本調査区出土遺物をすべて一括して分類を行った。限られた紙面の都合によるものであるが、遺構毎に記述する繁雑さを避けたためである。なお遺構毎の出土遺物の内容と対照は章末の一覧表（Tab.1）の備考欄と実測図（Fig. 21～24）下欄を参照されたい。

土師器　（Fig. 21－**1**～**10**, ＰＬ. 15）**1**～**4**は皿である。口径8.6～9.8cm、器高1.0～1.9cmにおさまる。いずれも底部に糸切り痕を残す。**1**・**3**・**4**は厚手の底部から直線的に体部を引き出し、口縁端は丸くおさめる。**2**は体部がやや内弯し口縁端は尖る。**5**～**9**は杯でa～cに分類できる。杯a(**5**・**6**）は口径10.8・13.9cm、器高2.4・2.3cmで口径に比して器高がやや高いものである。底部はやや厚手で内弯気味に体部を引き出し口縁端は尖る。杯b(**9**）は底部と体部との境に有するもので、口径10.7cm、器高2.3cmである。杯c(**7**・**8**）はやや上げ底の底部をもち直線的に体部を引き出すもので、胎土・焼成ともに精良である。以上の杯はすべて糸切りで、色調は概ね黄～灰褐色を呈す。**10**は甑の把手である。胎土は粗く焼成不良。

瓦器　（Fig. 21－**11**～**20**, ＰＬ. 15）　**11**～**17**は椀高台部、**18**～**20**は椀口縁部。椀高台部は高台の形態からa・bの二類に分けられる。a類(**11**～**15**・**17**）はヘラ切りの底部に断面が三角形に近い高台を低く貼付するもので、焼成はややあまい。内外面とも暗灰色を呈しヘラミガキが施されるもの（**11**・**15**）と体部外面の高台付近にナデ調整が施されるもの（**12**～**14**）とがめる。6類(**16**)は高台を高く貼付するもので、a類と比べ胎土・焼成と

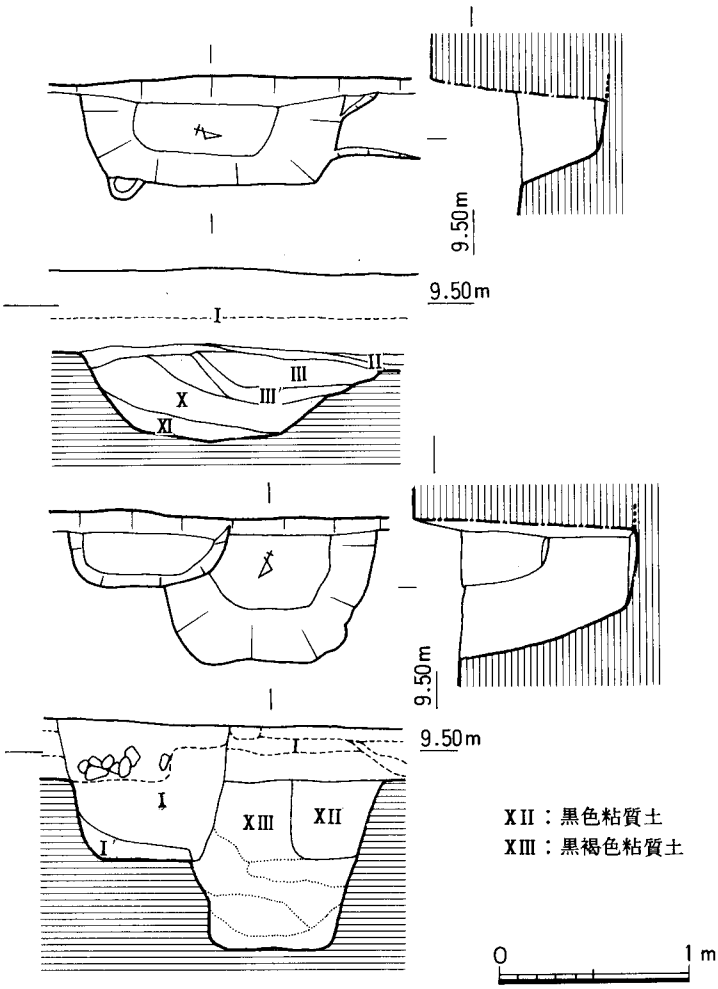


Fig. 20　諸岡Ｊ区土坑（ＳＫ01・02)実測図（1/40）

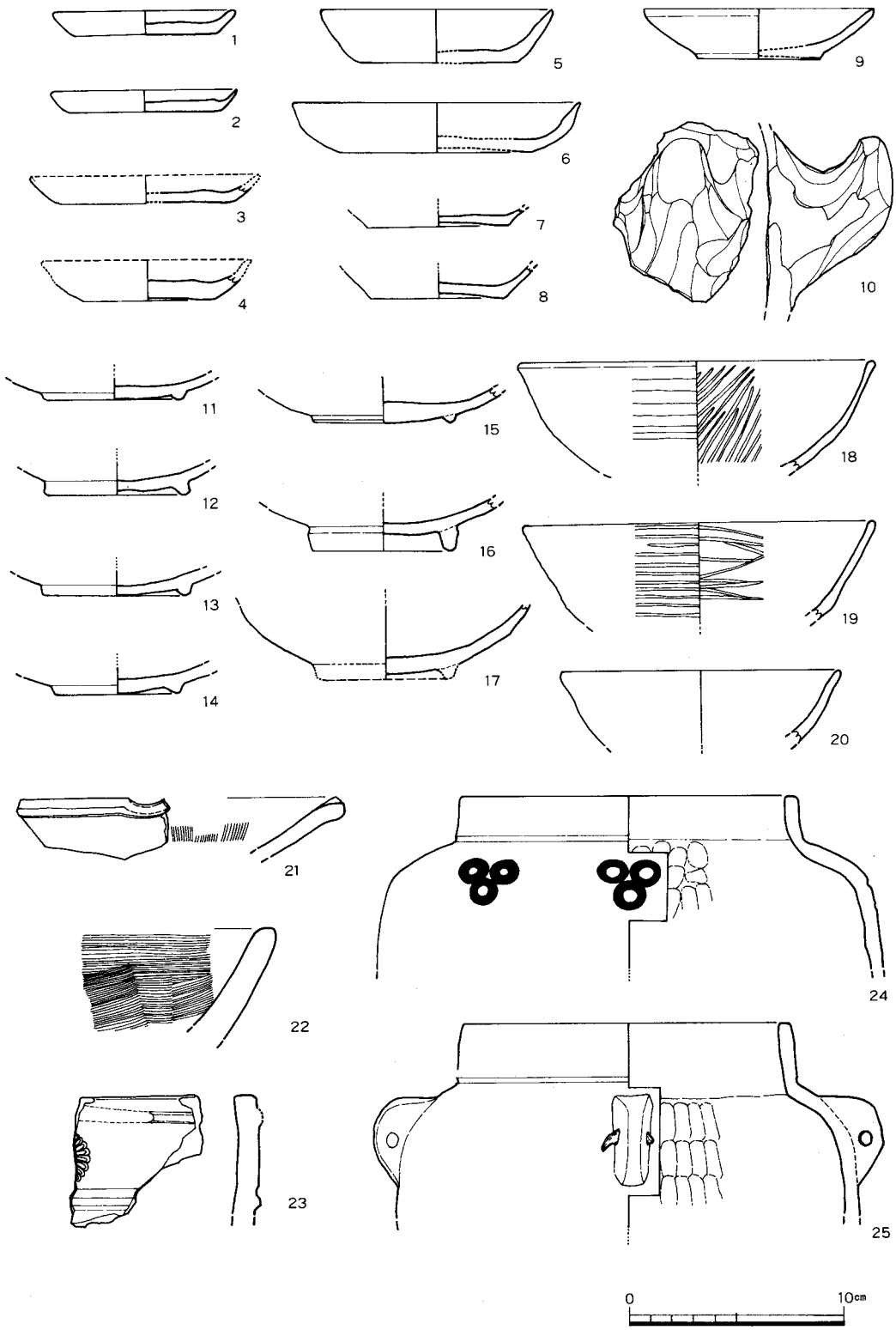


Fig. 21 諸岡J区出土土師器・瓦器・土師質土器実測図 (1/3)

(SD01：4.8.9.12.18.24.25, SD02：3.20, SD03：1.2.5.10.13.15.16 21～23, SE04：14.17.19, 表土：6.7.11)

も良好で、内面は銀灰色を呈す。体部外面・外底はナデ仕上げで暗灰色を呈す。**17**はａ類に含まれるものと思われる。焼成は良く内面は銀灰色を呈す。口縁部（**18**〜**20**）はいずれも体部内外面に横位あるいは斜位のヘラミガキが施されるもので、内弯気味に立ち上がる体部中位に屈曲がみられる。胎土・焼成とも精良で器表面は黒灰色を呈し部分的に銀灰色となる。

土師質土器　（Fig. 21－**21**〜**25**、Fig. 22－**26**〜**28**）　いずれも胎土は精良であるが焼成はあまい。**21**・**26**・**27**は片口である。**21**は内面に10条単位の櫛目が、**27**は底部から口縁へ釘線文がみられる。**26**はヨコ方向の目の細かなハケ目調整が施こされている。**22**は土鍋口縁部である。内外面とも黒灰色を呈しハケ目調整が施されている。体部へ移る屈曲部位で欠損。**23**は火鉢である。型押しによる菊花文がみられる。**24**・**25**は土釜である。口縁は直立し、やや肩の張った体部となる。**24**は肩部に円を三つ組み合わせた幾可学文を施す。**25**と同様に肩部に一対の耳を有すと思われる。**25**の耳には腐蝕した鉄環が若干残る。**28**は土鍋である。内外面とも黒灰色を呈し、内面には指頭圧痕および横位のハケ目調整、外面には縦位のやや目の粗いハケ目が施される。体部の最大径を測る位置に断面台形の鍔が貼付されている。

瓦質土器　（Fig. 22－**29**・**30**）　いずれも火鉢である。**29**は地蔵をデフォルメ化した文様が、**30**には梅花文が型押しされている。内面はいずれも黒灰色で目の粗いハケ目調整が施される。

白磁　（Fig. 22－**31**〜**44**, ＰＬ. 15・16）　**44**の小椀を除きいずれも椀各部の破片である。椀口縁から体部片では形態・手法などの特徴から３類に分けられる。Ａ類は**31**で、やや内弯気味に外広する体部に小さな玉縁口縁をつくり、胎土は灰白色を呈し精良、焼成も良い。釉は美しい乳白色を呈す。Ｂ類は**32**で、口縁端を外反させ上面を平担に仕上げ、内面に１条の沈線をめぐらす。胎土は灰白色、釉は白色である。Ｃ類は**33**〜**35**で、幅広の玉縁口縁をなす。内底見込みに１条の沈線をめぐらす。釉は乳青灰色を呈すもの(**33**・**34**)、黄灰白色のもの(**35**・**36**)との相違がある。椀底部は４類に分類できる。Ｉ類は**37**〜**38**で、高台の削り出しが細く高く、内底見込みに沈線をめぐらす。施釉は高台外面まで、**38**には体部内面に櫛描文を施す。II類は**39**で、Ｉ類に比べ高台幅が大きい。釉は淡い青灰色を呈す。III類は**40**〜**42**で、幅広の高台を浅く削り出し、底部の器肉が厚い。**40**を除いて内底見込みに沈線がめぐる。IV類は**43**で、高台を断面三角に削り出し、青白色の施釉がなされる。畳付部は赤く発色し、高台内側外底部は露胎となる。これらの底部はＩ〜II類がＢ類に、III類がＣ類に対応し、IV類は口禿青白磁であろう。**45**は小椀で、細く高台を削り出し、厚目の底部より内弯気味に外広する体部に、外反する口縁が続く。高台畳付部および内底見込みの釉を輪状にカキ取る。釉色は白色、口径10.4cm、器高2.8cm。

2.**青磁**　（Fig. 22, 23－**45**〜**55**, ＰＬ. 16）　**45**〜**53**は龍泉窯系青磁椀の各部破片である。いずれも胎土は暗灰色を呈し精良で、釉色は青緑色に発色する。高台の削り出しは断面四角形をなし底部の器肉は厚い。**45**は体部外面に沈線による蓮弁を配するもので、**46**は内面に沈線と草花文様を片彫りする。**47**は２条の沈線によって体部内面を５剉し、間に雷雲文を片彫りする。**48**は

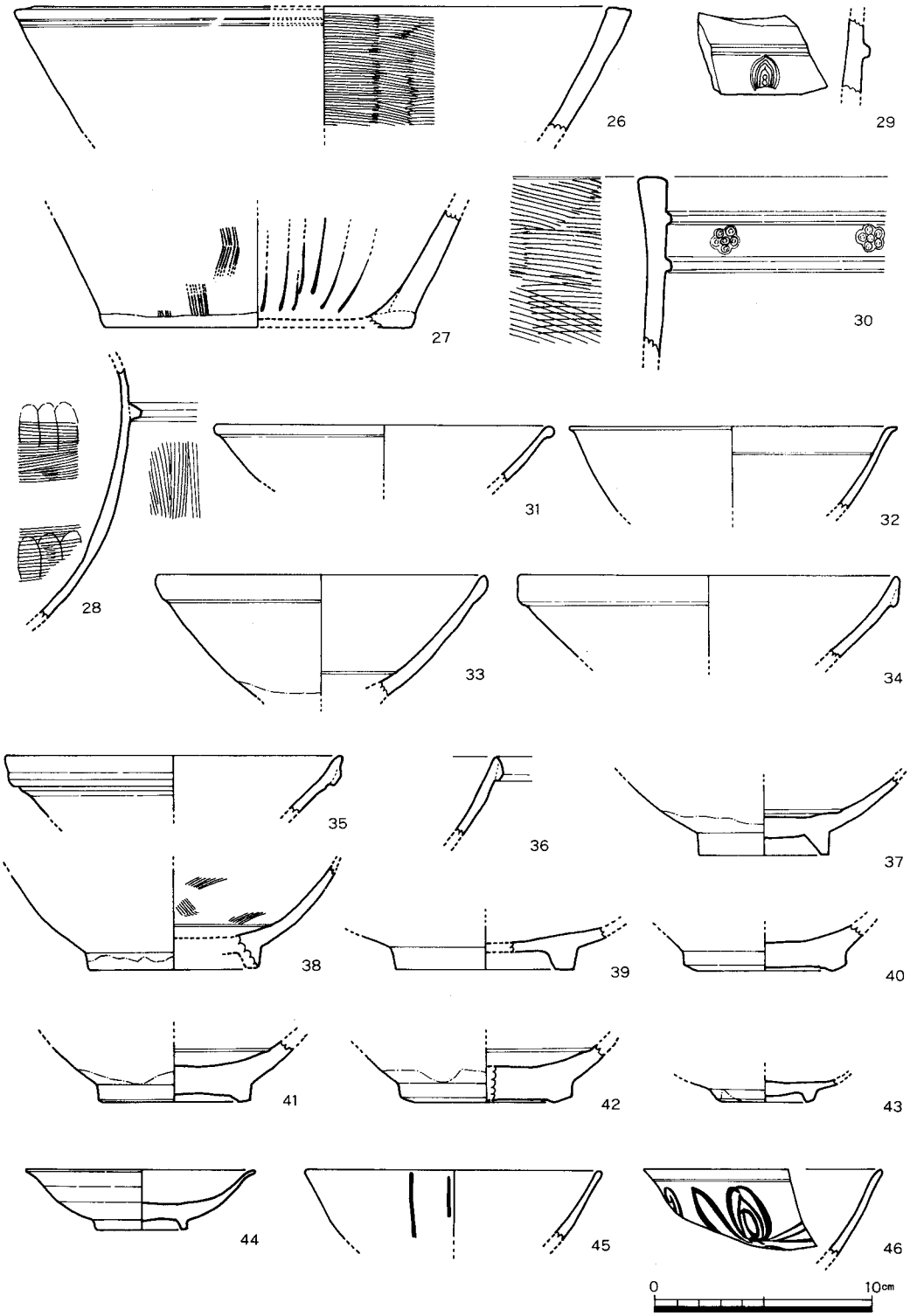


Fig. 22　諸岡J区出土土師質土器・瓦質土器・白磁・青磁実測図　(1/3)

(S D01：26.29.30.33.36.41.42.46,　S D02：32.35,
S D03：27.37～39,　S E02：28.31,　S P03：44
表　土：34.40.43.45)

高台畳付部の釉をカキ取り、露胎部は赤く発色する。**49**の内底見込みには不鮮明な草花文様の片彫りが見られる。**50**〜**51**は無文であるが、**52**は高台がやや高く、内底見込みには十字に組んだ独鈷文を刻している。**53**は高台部が小さく、外底高台内側の釉を輪状にカキ取っている。**55**は瓶子口縁部片で、口径5.2cmを測る。胎土は灰色を呈し精良、釉の発色は青緑色である。**54**は古伊万里系の青磁椀で、淡い青色を呈す。底部に化粧土を用い、厚く施釉する。露胎部は赤く発色し、体部内面は蕉葉らしき文様を刻す。

陶器・染付　（Fig. 23, 24－**56**〜**71**, ＰＬ. 17）　図示したもの以外にも、唐津、伊万里、高取系統の国産陶磁器が、**ＳＤ03**, **ＳＤ04**の埋土中より出土している。**56**は体部内面に緑釉を施した皿で、胎土は灰白色を呈し焼成も良い。**57**は内側に褐色の釉を施す燈明皿で、胎土は灰褐色を呈し焼成も良い。**58**〜**59**は外面に黒色の釉を施す蓋で、外面凹部中央に宝珠形のつまみを有す。いずれも内径6.0cmである。**60**は褐釉の瓶子底部片である。**60**は黄灰色の精良な胎土であり、釉は黄色に発色する椀である。細かい貫入があり透明である。**61**はやや粗い灰褐色の胎土で灰緑色の釉が全面に施される。**62**は胎土が黄灰色で粗く、化粧土の上から体部下半まで黄灰色の釉が施される。**64**は口径11.6cm、器高3.0cmの椀で、いわゆる李朝の粉引手茶椀に似るものである。**65**は削り出し高台畳付部３ヵ所に窓を切り、底部から屈曲して立ち上がる茶椀で、体部外面に化粧土を用い、不透明な白色の釉を施す。古高取に類例を見る。**66**は削り出し高台の鉢であり、体部内面に鉄絵を描き釉は黄色に発色する。いわゆる献上唐津であろう。**67**〜**68**は無釉の擂鉢で、**67**は糸切り離し、**68**は低い高台を削り出している。どちらも赤褐色を呈す。**69**〜**71**は古伊万里系の染付磁器椀である。**69**, **70**は体部外面に横線と柳文を配し、**71**は草花文を描いている。

石製品　（Fig. 24－**72**〜**74**, ＰＬ. 17）　**72**は滑石製石鍋の口縁部破片である。耳状突起が付され、突起中央には横位から削りこんだ凹部がみられる。黒灰色を呈す。**73**は粘板岩製砥石でほぼ半分が欠失。**74**は硬砂岩製柱状片刃石斧である。刃部は磨耗し丸くなる。基部は欠損。

瓦　（Fig. 24－**75**〜**77**, ＰＬ. 17）　**75**は平瓦片で胎土は精良、焼成も堅緻で暗灰色を呈す。凸面は縄目の叩き、凹面はヘラ調整する。**76**〜**77**は丸瓦片で外面は縄目の叩きをすり消し、内面は桶巻作りの模骨痕を残す。側縁部を内側斜めにヘラ削りする。**76**は焼成不良で暗褐色、**77**は焼成良好で灰色を呈す。

木製品　（Fig. 24－**78**〜**80**, ＰＬ. 17）　**78**は長さ12.4cm、厚さ0.4cmを測る方形板材の破片で、一端を斜めに削る。欠損部は楕円形の窓が切られており、断面は斜めである。中央に小さな釘穴と何かを取り付けた痕跡が認められる。**79**は連歯の下駄で後部を焼失している。台部の長さ17.6cm、幅6.9cm、厚さ1.1cm、器高2.8cm、前歯幅2.1cm、後歯幅2.4cmを測る。**80**は組合せ円板中央部の板材で径22.7cm、厚さ0.7cmを測る。両側に２ヵ所の釘穴、中央部には直交する幅1.5cmの接合痕と裏打ちの釘穴が残る。縁部は斜めに削っている。鍋の蓋であろう。

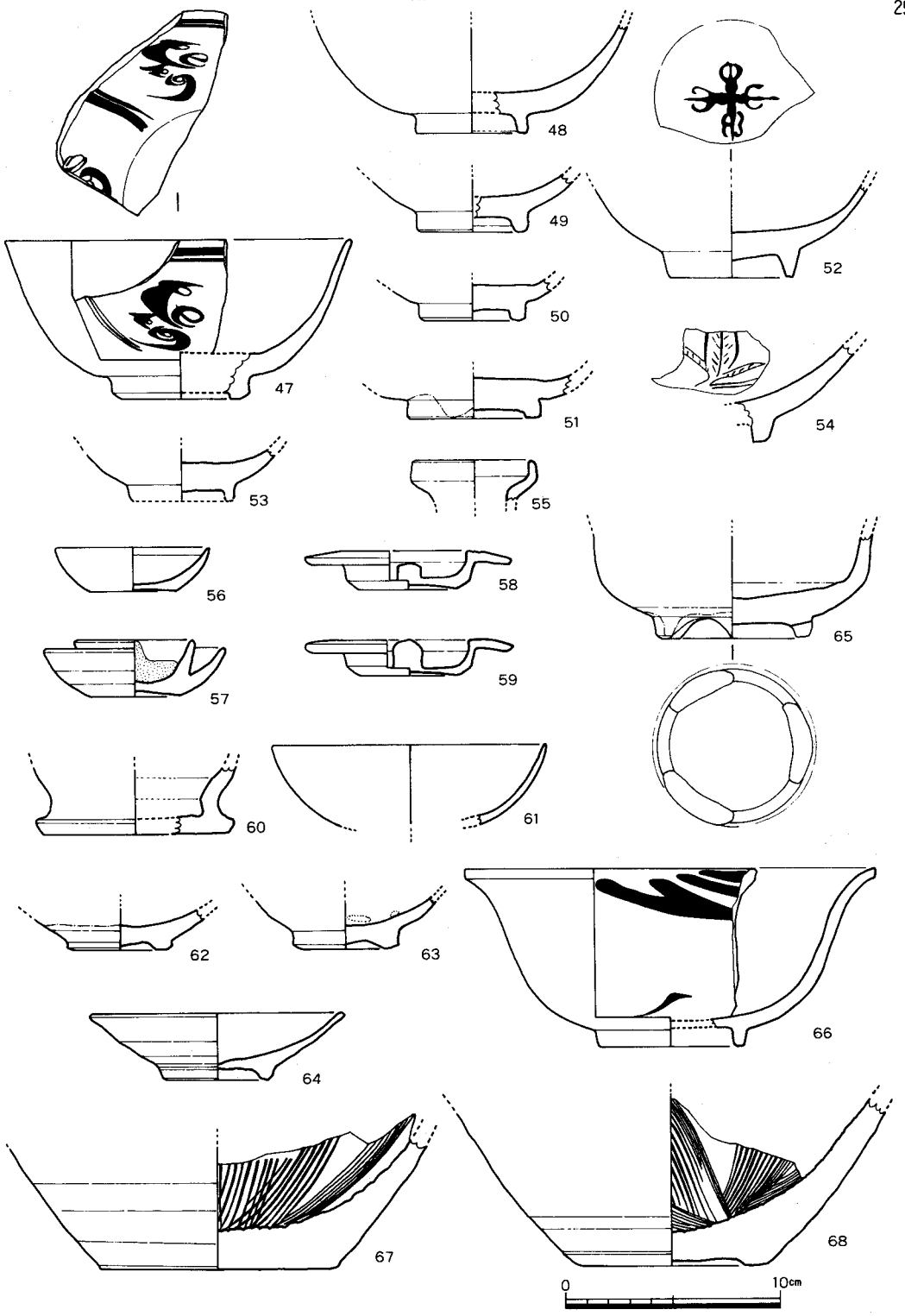


Fig. 23 諸岡J区出土青磁・陶器実測図 (1/3)

(S D01：50.51.64, S D02：49.52, S D03：47.48.54～61.63.66
S D04：65.67.68, S E04：62, S K01：53)

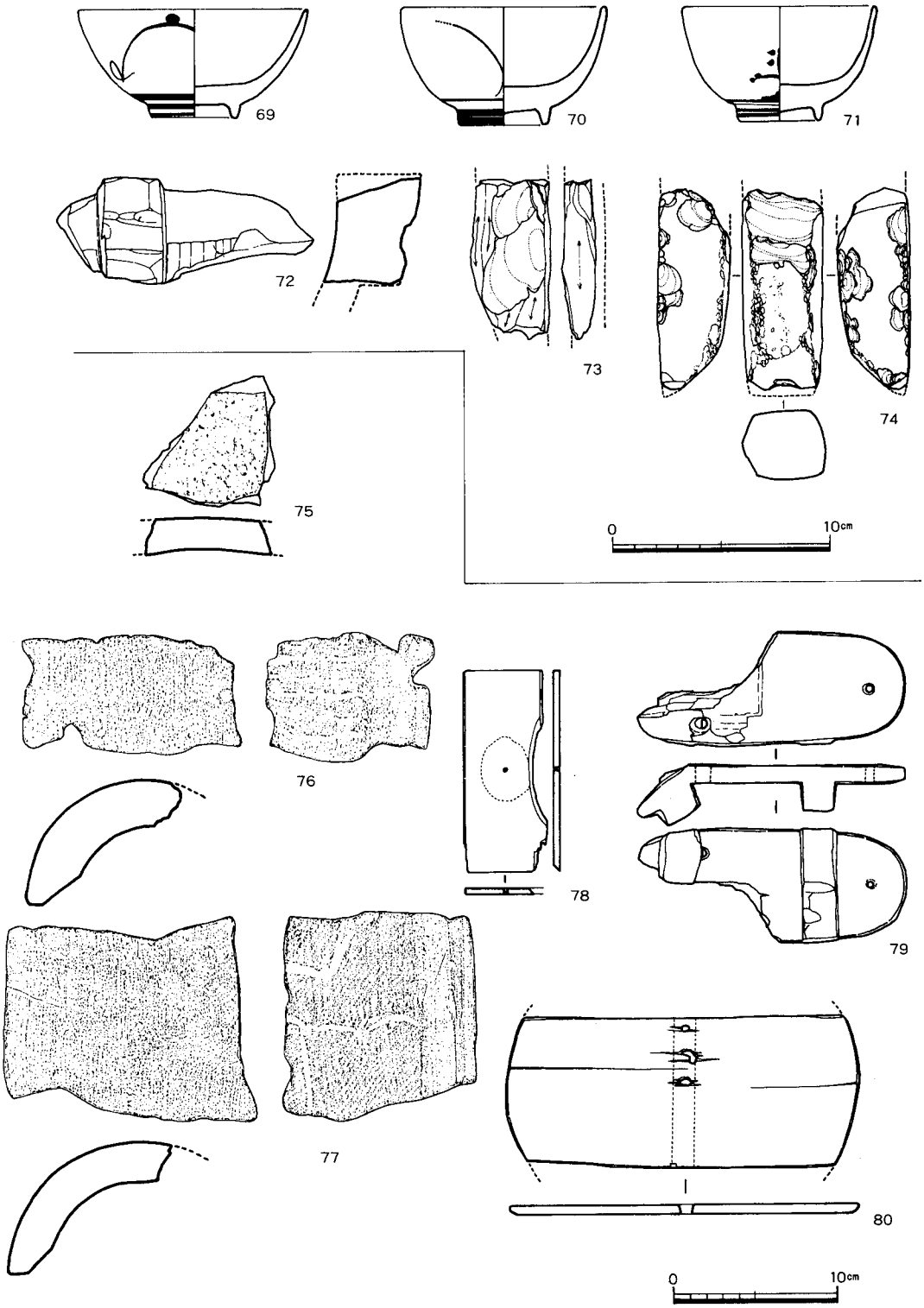


Fig. 24　諸岡J区出土染付・石製品・瓦・木製品実測図　(⅓, ¼)
(SD01：73.76.77, SD03：69.70.78～80, SD04：74, SE04：71.75, 表土：72)

4　小結

これまで報告したように、検出した遺構は溝４条、井戸５基、土坑２基、柱穴状小竪穴群などであるが、調査区の狭少さや地山の大幅な削平などにより、各遺構の性格や相互関係について完全に明らかにする事ができない。溝についてはＳＤ01とＳＤ02が部分的に規模と構造を把握できるが、ＳＤ03とＳＤ04では一方の壁が明らかでなく両溝の関係は不明である。井戸は発掘作業の安全のためＳＥ04のみ完掘した。残る４基は形態的に類似しており、年代に大きな隔たりは無いと考えられる。土坑については壁際に検出され全体は不明である。柱穴状小竪穴群は調査区西半部から南側に集中するが、建物の構成を復原できなかった。切り合い関係を有する遺構は、ＳＤ01とＳＤ03，ＳＤ01とＳＥ01・ＳＥ02，ＳＤ03とＳＥ04・ＳＥ05であり、これらの先後関係はＳＤ01が最も古く掘削され、その後ＳＤ03が掘り込まれ、ＳＤ03がある程度埋められた後にＳＥ04とＳＥ05が前後して掘削されている。したがって本調査区においては、第Ⅰ期が溝ＳＤ01，第Ⅱ期が溝ＳＤ03，第Ⅲ期が井戸ＳＥ01～ＳＥ05の各期の遺構が営まれたと把握できる。柱穴状小竪穴の大部分は、第Ⅲ期以降のものであると考えられる。

各遺構から出土した遺物は下の表に記すとおりであり、中国製白磁・青磁、国産陶磁器、瓦、木製品などを含み、溝からの出土量が圧倒的に多く特に溝ＳＤ03埋土からの出土が多い。これらの遺物の中で、白磁・青磁類，土師器など12世紀後半代を上限とし中世末まで認められるが出土量は少ない。国産陶磁器の出土量が最も多く、初期伊万里、古唐津、古高取などがあり、17世紀から19世紀まで認められる。したがって、本調査区における各遺構の年代観は、第Ⅰ期が12世紀後半代を上限とする時期、第Ⅱ期が中世後半、第Ⅲ期が近世前半～末葉と想定される。

Tab. 1　諸岡Ｊ区遺構別出土遺物一覧表

		須恵器		土師器					瓦器	土師質土器					瓦質土器			白磁		青磁		瓦			施釉陶器								無釉陶器				染付・磁器		木製品		石製品		黒曜石	備考
		甕	杯	甕	椀	皿	杯	その他	椀	鍋	釜	擂鉢	火鉢	火舎	擂鉢	火舎	その他	椀	小皿	椀	その他	平瓦	軒平瓦	丸瓦	椀	蓋	瓶	壺	燈明皿	擂鉢	甕	急須	鉢	擂鉢	火舎	鉢	甕	染付	磁器	下駄	その他	石鍋	砥石	石片	（挿図遺物番号）
溝	ＳＤ01				4	9	4		10	7	3	6			1	2	2	4		3		7		2	1													4				1		4,8,9,12,18,24,25,26,29,30,33,36,41,42,46 51,64,73,76,77
	ＳＤ02	1			1	4	4		5			3	1	1	2			13		11	1				1								1				3	1					4	3,20,32,35,49,52
	ＳＤ03		1			5	2	1	2			4	2	2		1	1	5		2		8	1		20	2	8		5	1	6	3	7	6	1	1	2	98	18	1	2				1,2,5,10,13,15,16,21,22,23,27,37,38,39,47,48,54,55,56,57,58,59,60,61,63,66,69,70,78,79,80
	ＳＤ04					1						1	1	1								7			1		1	1			1			2				3							65,67,68,74
井戸	ＳＥ01	1																																			1							
	ＳＥ02								1	2		1	1			1	1	1							2									1				1	1			1			28,31
	ＳＥ03																																												
	ＳＥ04	1			2				6			1										2			1													1				1			14,17,19,62,71,75
土坑	ＳＫ01																			1																									53
	ＳＫ02						1		1																													1							
小竪穴	ＳＰ03																		2						1																				44
	ＳＰ18				5	3	5		4									3		2														1								1			
表土																																													6,7,11,34,40,43 45,72
計		3	1	0	12	22	16	1	29	9	3	16	5	4	3	4	4	26	2	19	1	24	1	2	27	2	9	1	5	1	7	3	7	11	1	1	2	108	24	1	2	3	1	4	

V　諸岡K区の調査

1　調査概要

本調査区は、昨年度実施したG区の北方20mに位置し、諸岡遺跡でも沖積地に接する丘陵裾端部の地点である。G区では、11～16世紀にわたる遺構（掘立柱建物3、井戸2、溝3、土坑墓1）と、夜臼式期の竪穴住居址1などが検出されている。(註1) したがって、G区に接する本地点も同様な遺構が予想されたが、調査区西半分は地下げ整地によって著しく削平されていた。

K区の土層層序は、全体に20cmほどの盛土下に畑地土壌（20～50cm）があり、その下の鳥栖ローム下層が遺構検出面である。包含層・新紀ローム層は削平されている。そのため、夜臼式期の遺構は全く検出できなかった（夜臼式土器は、中世井戸や土坑から出土している)。また中世の遺構も、井戸・溝など深い掘り込みをもつものが遺存するのみであった。この地下げによる整地は、室町時代の後半期におこなわれたと思われ、整地面にはそれ以後の掘立柱建物が重複して検出された。発掘区の東半分はゆるい下り傾斜となり、あまり削平は受けていないようである。東端部で段落ちの肩を検出した。

2　検出遺構

本調査区で検出した遺構は、柵4・掘立柱建物12・溝5・土坑2などである。その他、多数の柱掘方と思われるピットがあるが、平面規模としてまとめきれなかった。

遺構の年代は、12世紀を前後するものと16世紀～17世紀に分れる。前者は井戸1、溝1にすぎず、他はすべて後者に属するものである。

柵列　(Fig. 26)

SA01　調査区南よりで、東西にのびる3間分(6.3m）を確認した。短かく、建物の一部とも考えられるが、対応する柱列がないため柵列とした。柱間は2.1mの等間、柱穴は径30～40cmの不整円形、30～40cmの深さである。溝**SD01**と重複し、切り合いのある柱穴では溝に切られている。

SA02　調査区東よりで2間分(3.6m）を検出した。建物**SB03**と方位を同じくすることから、**SB03**を構成する一部の可能性もある。そのばあい、北端の柱で西に折れ、3間分西にのびるかもしれない。Fig. 26では、その部分を破線でしめした。柱穴は径25～50cm、25～40cmの深さである。柱穴が溝**SD03**を切っている。

SA03　調査区東よりに検出された。南北2間（3m）で、建物の一部の可能性もある。柱穴は径30～40cmの不整円形、25～40cmの深さである。

SA04　調査区中央東よりに検出された。南北にのびる4間分（約8m）確認でき、北側は

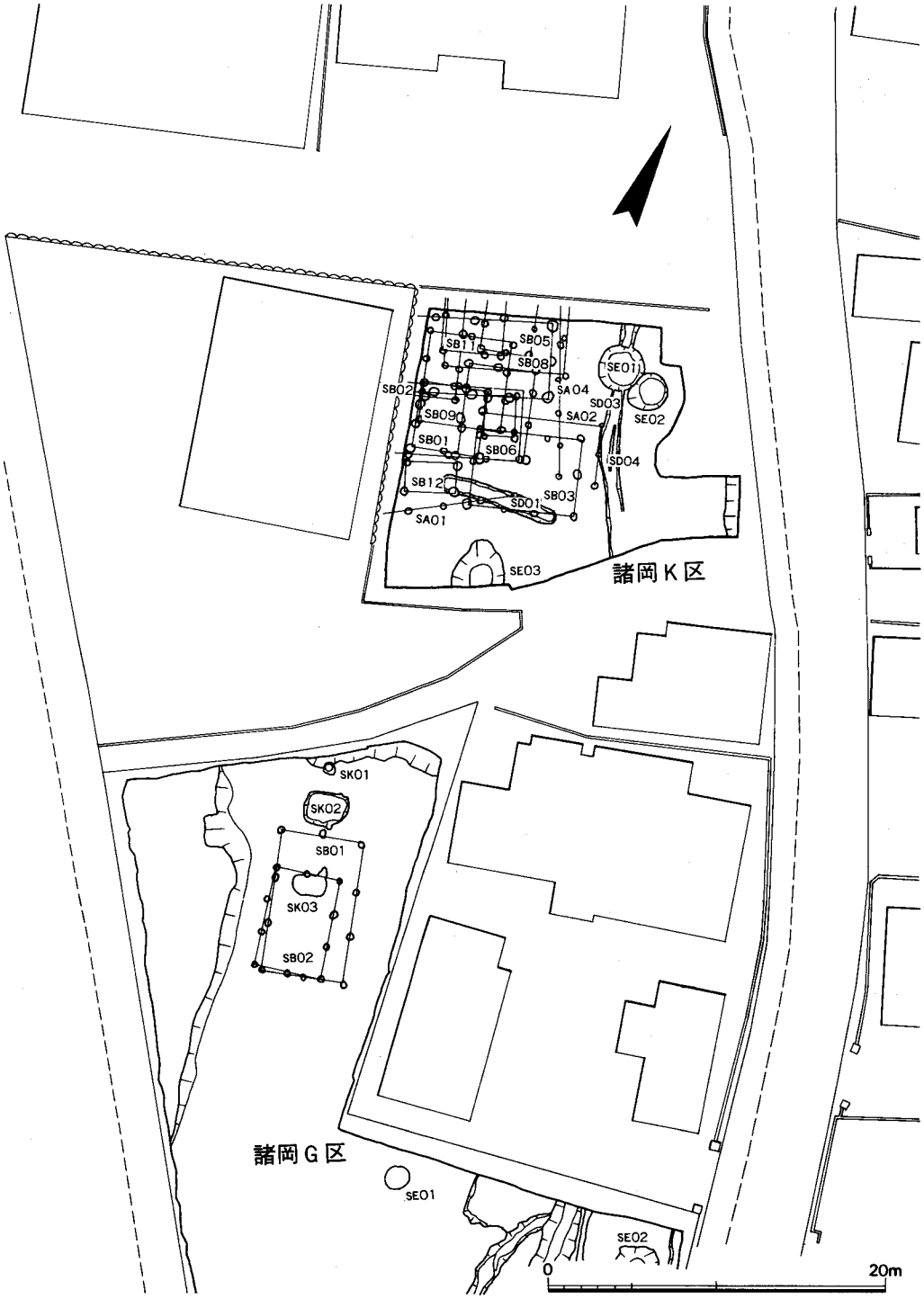


Fig. 25 諸岡K区位置図 (1/400)

未掘区に入る。柱間はほぼ２ｍの等間である。柱穴は径25～35cmの不整円形、深さ20～40cmである。

掘立柱建物　（Fig. 27・28, ＰＬ. 19）

調査区内では、かなりの密集度で計348個のピットが検出された。そのうち、規模や柱の圧痕の残っているものから、明らかに柱掘方と思われるピットは161個である。建物として平面的規模の全部あるいは一部を確認できたものは12棟、84個のピットの組み合せによる。したがって161のうちの84であるから、ほぼ半数強がまとまったことになる。これら12棟の建物は16世紀を上限として、下限は17世紀中頃もしくは18世紀頃までの可能性がある。いわば中世末から近世初期の掘立柱建物であり、考古学な調査例が少なく、その平面規模や屋内の間仕切り等について不明な点が少なくない。したがって柱穴のまとめ方にも誤まりがあると思われるが、柱並びのよいもの、柱穴埋土から判断して確実と思われるものを報告する。内部の間仕切に伴なうと思われる床束柱は、**ＳＢ03**を除いてほとんど不明である。側柱の間に通る柱穴も少なくないが、あえて無理なまとめ方はしていない。

ＳＢ01　２×３間の方形の建物。桁行3.9ｍ、梁行3.9ｍ。柱間は桁行が1.3ｍ(約4.3尺)、梁行1.95ｍ(6.5尺）の等間である。柱穴掘方は径40～60cmの不整な円形、深さ40～60cmを測る。掘方底面に柱の圧痕を残すものが多い。**ＳＢ08**と重複する掘方では、すべて切られている。

ＳＢ02　２×３間以上の東西棟である。西端部に妻柱がみとめられないため、さらに西にのびるのであろう。桁行は３間分までで6.90ｍ、梁行4.50ｍを測る。桁行の柱間は東より2.25ｍ(7.5尺)・2.25ｍ(同)・2.40ｍ(８尺)とバラツキがある。梁行は2.25ｍ(7.5尺)の等間である。柱穴掘方は径40～60cm、深さ50～60cmを測り、底面に柱圧痕を残すものが多い。

ＳＢ03　２×３間の東西棟。身舎の内側に床束と思われる柱穴がある。桁行6.30ｍ（21尺)、梁行4.50ｍ（15尺）を測る。桁行の柱間はやや不揃いだが、中央1.50ｍ（５尺)、東西2.40ｍ(８尺)と思われる。梁行は2.25ｍ(7.5尺）の等間である。柱穴掘方は径25～50cm、深さ25～40cmである。溝**ＳＤ02**と重複するが、溝より新しい。

ＳＢ04　発掘区西北隅で検出された。大半が調査区外に入り、東西１間以上、南北２間以上の建物。柱穴掘方の規模、柱間が一致するのでまとめてみた。柱間は1.80ｍ(６尺)で東西・南北とも等しい。柱穴掘方は径30cmほどの円形、深さ30～40cmである。土坑**ＳＫ01**との重複では、土坑が新しい。

ＳＢ05　発掘区北端部で検出された。東西２間、南北１間以上で大半は未掘区に入る。柱間は東西1.50ｍ（５尺）の等間、南北も1.50ｍ（５尺）である。柱穴掘方は径25～50cmの不整円形、深さ40～60cmを測る。掘方の重複する**ＳＢ11**との先後関係は確認できなかった。

ＳＢ06　発掘区北端で検出された東西棟建物。東西３間、南北１間以上で未掘区に入る。桁行7.20ｍ（24尺）で、その柱間は2.4ｍ(８尺）の等間である。梁行は2.25ｍ(7.5尺)。柱穴掘方

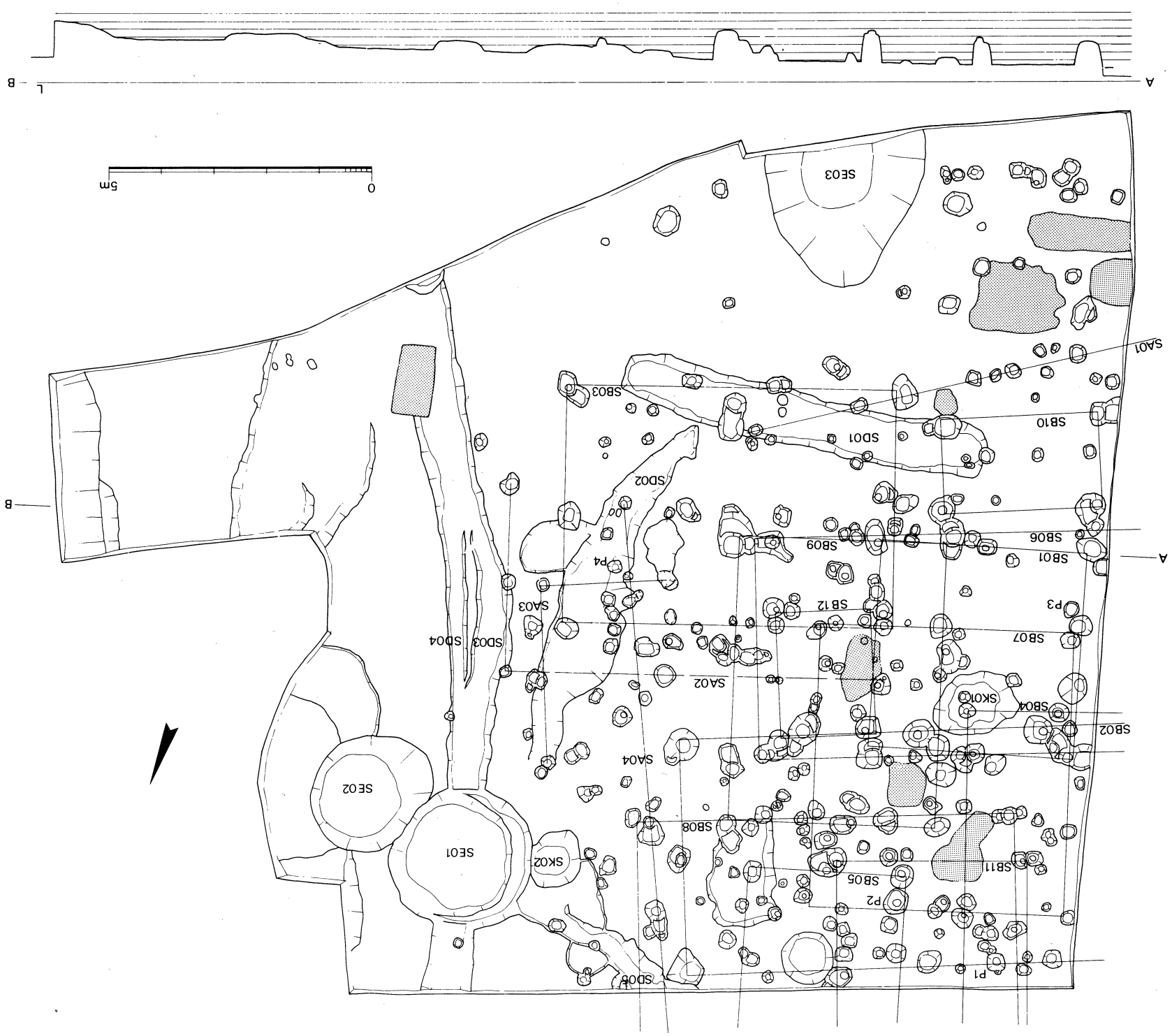


Fig. 26　遺構実測図（1/100）L＝GH. 10.064m　ドットの部分は近世攪乱

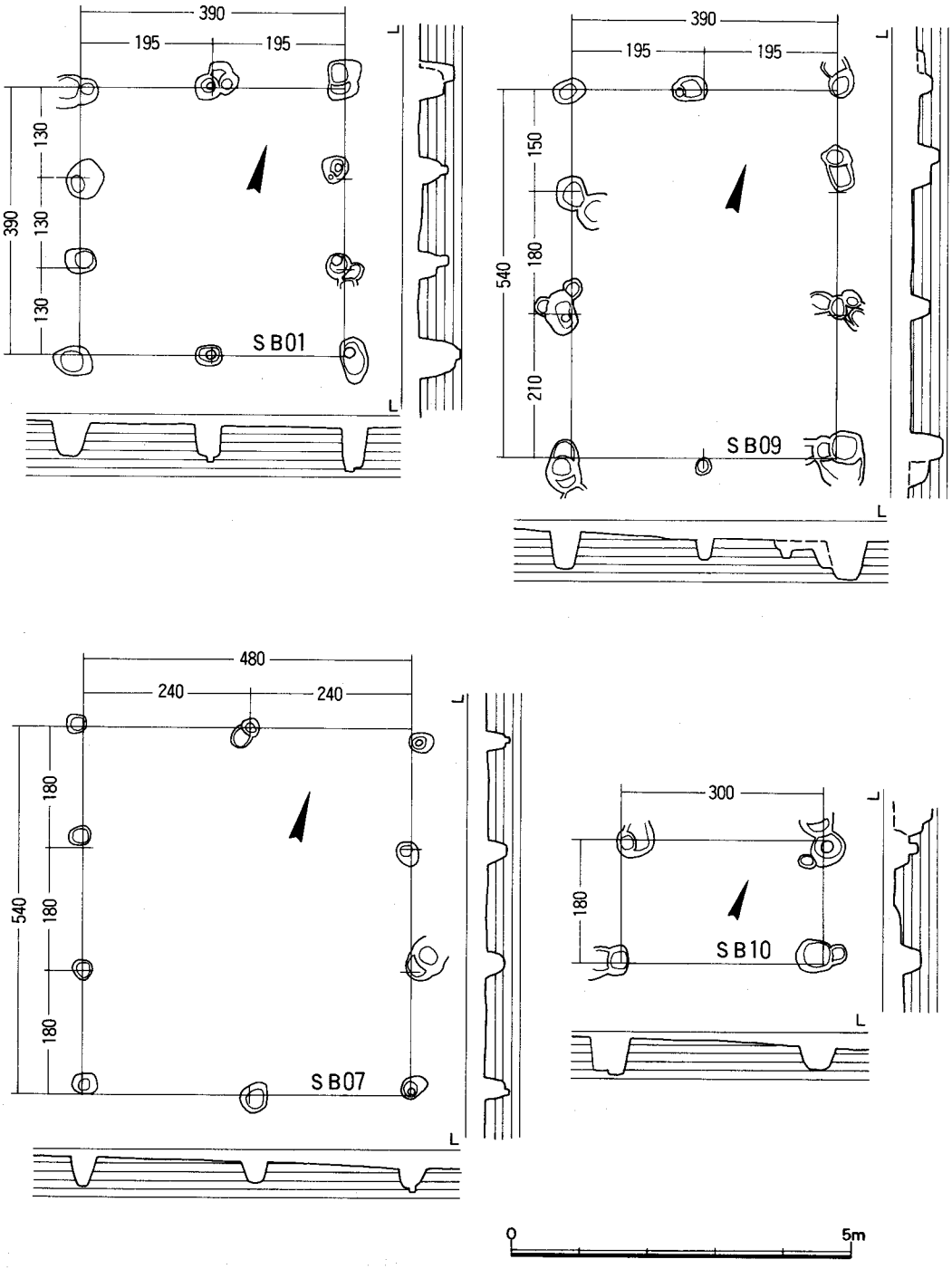
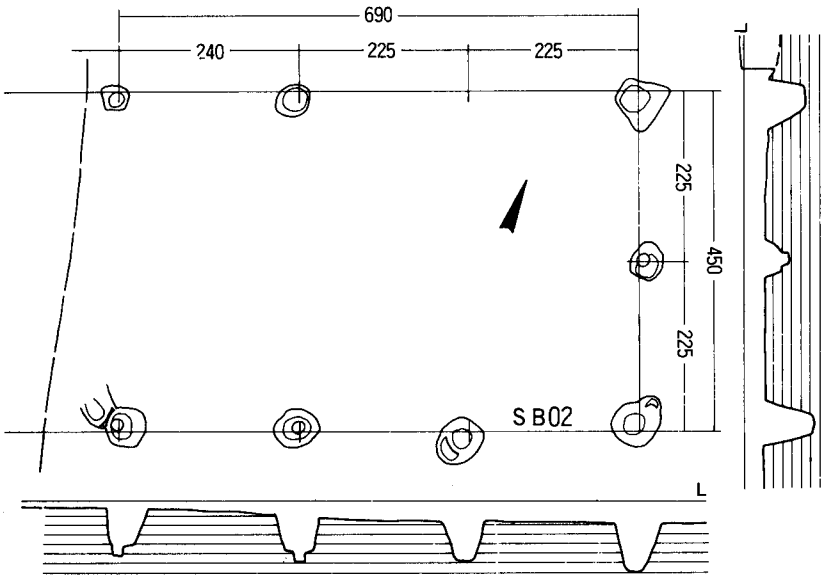


Fig. 27 掘立柱建物実測図Ⅰ（1/100）L＝GH. 9.864m

は径25～40cm、深さ20～50cmを測り、底面に柱圧痕を残すものがある。

ＳＢ07　調査区西北隅で検出された。２×３間の南北棟である。桁行5.40ｍ（18尺）、梁行4.80ｍ（16尺）を測る。柱間は桁行が1.80ｍ（６尺）の等間、梁行が2.40ｍ（８尺）の等間である



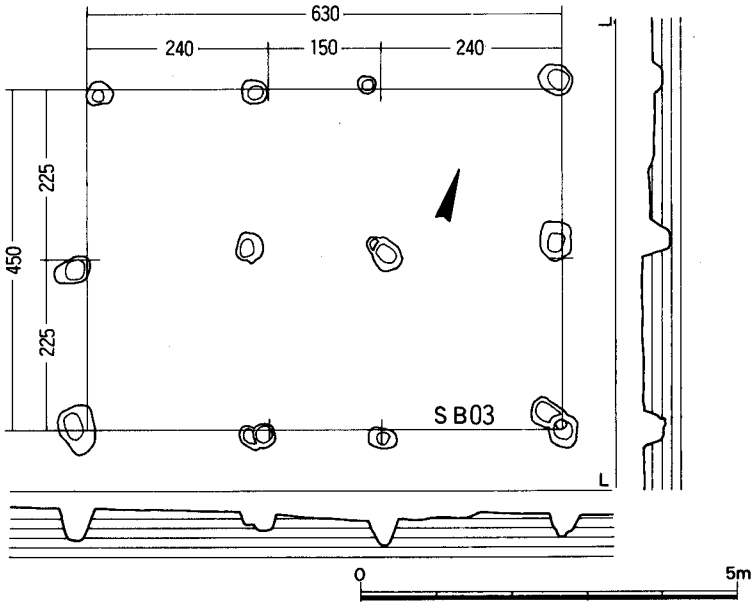


Fig. 28　掘立柱建物実測図II（1/100）L＝GH．9.864ｍ

る。柱穴掘方は径30～45cm、深さ30～50cmで底面に柱圧痕のみられるものがある。

SB08 調査区中央西よりに検出された東西棟。西端に妻柱がないため、さらに西にのびる。桁行3間以上、梁行2間である。桁行の柱間は2.10m（7尺）の等間、梁行長3.90m（13尺）で、柱間は1.95m(6.5尺）の等間である。柱穴掘方は径30～50cm、深さ40～60cmを測る。柱根の残存が1ヵ所にあった。それは径16cmで、不揃いな多面体（6角形）に加工している。

SB09 調査区中央の西よりに検出された2×3間の南北棟建物。桁行5.40m（18尺)、梁行3.90m（13尺）を測る。桁行の柱間は南より2.10m(7尺）・1.80m(6尺)・1.50m(5尺)である。梁行は1.95m(6.5尺）の等間である。**SB02**と重複する掘方では、**SB02**より古い。

SB10 調査西端南よりに検出された。1×1間だが東西に長い。東西3m（10尺)、南北1.80m（6尺）である。柱穴掘方は径40～50cmの不整円形、深さ30～50cmを測る。

SB11 調査区北端の西よりに検出された。東西2間、南北1間以上で、北側の未掘部に入り完結していない。東西長3.60m（12尺)、柱間は2.10m（7尺）と1.50m（5尺）である。南北柱間は2.10m（7尺)。柱穴掘方は径25～45cm、深さ30～50cmを測り、底面に柱圧痕が残存している。

SB12 発掘区中央西よりに検出された。1×1間の建物で、東西長1.80m（6尺)、南北長2.40m（8尺）を測る。柱穴掘方は径40～50cm、深さ35～50cm、底面に柱圧痕がある。

Tab. 2 諸岡K区掘立柱建物計測表

	規模	方向	桁行		梁行		方位（磁針）	床面積
			実長	柱間寸法(尺)	実長	柱間寸法(尺)		
SB01	3×2		390(13)	4.3・4.3・4.3	390(13)	6.5・6.5	N16°30′E	11.7m²
SB02	3以上×2	EW	690+α	7.5・7.5・8	450(15)	7.5・7.5	N23°E	
SB03	3×2	EW	630(21)	8・5・8	450(15)	7.5・7.5	N19°30′E	28.35m²
SB04	3以上×2	NS	360+α	6・6	180+α	6	N19°30′E	
SB05	1以上×2		150+α	5	300(10)	5・5	N17°E	
SB06	3×1以上	EW	720(24)	8・8・8	225+α	7.5	N22°E	
SB07	3×2	NS	540(18)	6・6・6	480(16)	8・8	N18°E	25.92m²
SB08	3以上×2	EW	630+α	7・7・7	420(14)	7・7	N22°E	
SB09	3×2	NS	540(18)	7・6・5	390(13)	6.5・6.5	N18°30′E	21.06m²
SB10	1×1	EW	300(10)	10	180(6)	6	N23°E	5.4m²
SB11	1以上×2	NS	210+α	7	360(12)	7・5	N21°E	
SB12	1×1	NS	240(8)	8	180(6)	6	N23°E	4.32m²

桁・梁行実長はcm、（ ）内は1尺を30cmとして割った数値

井戸　(Fig. 29, ＰＬ. 20)

ＳＥ01　発掘区北東隅に検出された。上端径2.8m、底面径1.8mの不整な円形を呈する。深さは検出面より1.2mを測り、西側は２段の掘り込みとなっている。湧水線は、上端より－50cmほどの鳥栖ローム・八女粘土層間にある。井戸枠・桶ともに残存していない。埋土は黒色土で人為的な様子ではない。溝**ＳＤ03**、井戸**ＳＥ02**との重複では、溝より新しく、**ＳＥ02**より古い。

ＳＥ02　上端径2.2m、底面径1.5m、深さ1.8mを測る。埋土の下半部はヘドロ状を呈し、また井戸枠も残存しないことから素掘りのまま使用されたのかもしれない。

ＳＥ03　発掘区南西端に検出されたが、南側⅓は調査区外にある。上端径3.1m×(2.5+α)mの不整な円形を呈し、深さは1.9mを測る。下底部は1.3mほどの不整な方形で、南と西側に井戸枠横板が残存していた（北・東側はない)。その固定は隅柱を用いずに、一辺に２～３本の丸太杭を打ち込んでいた。写真撮影後、調査区境の壁面が崩壊し、枠は原位置をとどめず、固定していた杭も移動してしまった。再度の発掘は危険であったため、井戸枠のみを取りあげ調

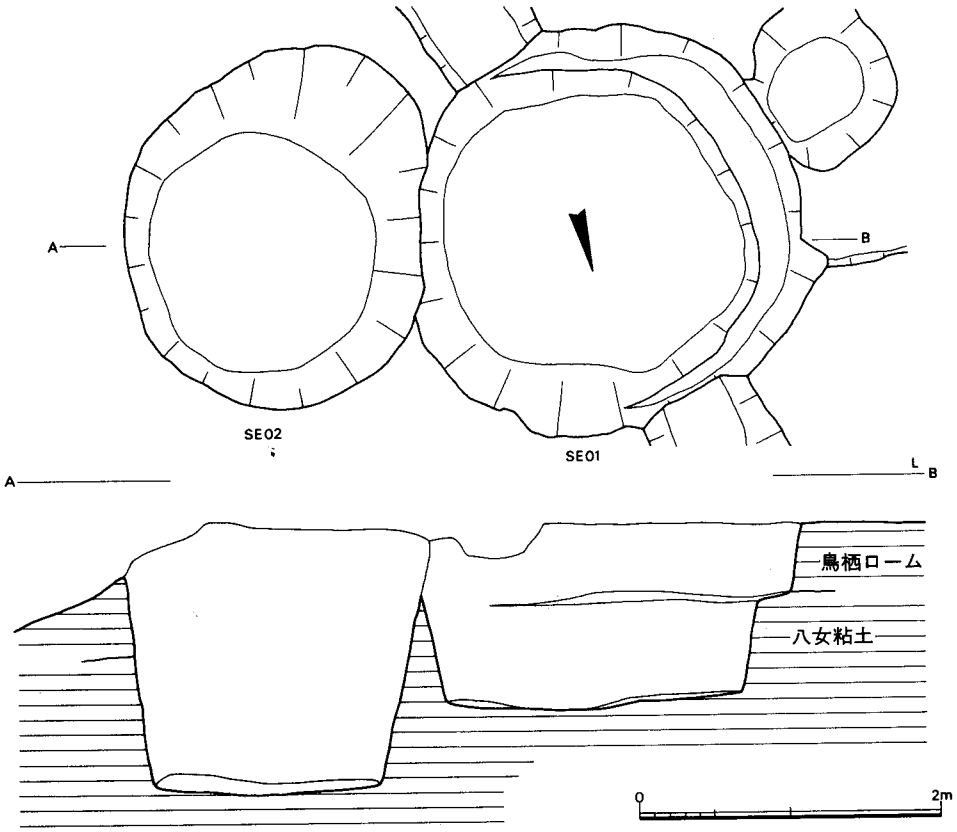


Fig. 29　井戸ＳＥ01・02実測図　(1/50)　L＝GH. 9.50m

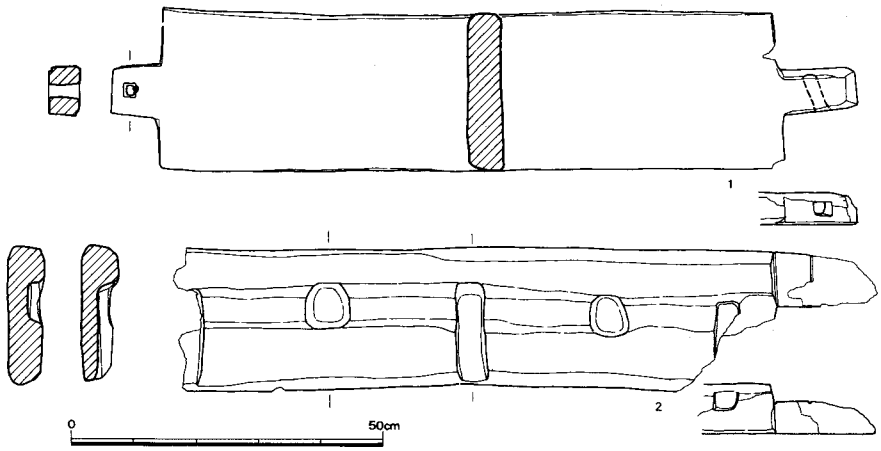


Fig. 30 ＳＥ03井戸枠実測図 (1/12)

査を中止した。埋土は残存した井戸枠上にレンズ状をなして、八女粘土・鳥栖ロームのブロックが多量に混入している。

井戸枠 (Fig. 30, ＰＬ. 25) 1は全長120cm、高さ25cm、厚さ6cmの横板で、左右両端には凸部が切り出されている。左端の柄穴は水平、右端部では上下方向の柄穴がある。2は転用材の横板である。左右端部が折れ、現在の残存長114cm、高さ22cm、厚さ6cmあまりである。表面(井戸枠使用時は裏面)の3ヵ所に幅5cm、長さ16cm、深さ2cmほどの長方形の溝を一側面から切り込み、そのあいだに径6～7cm、深さ2cmほどの不整円形の掘り込みを入れている。長方形の溝の上端から7cmあまりの幅で浅い掘り込みが横方向にはしっている。はたして建築部材なのか否か不明である。横板転用にあたって、凹部を切り込んでいる(右端にわずかに残存している)。1・2とも材質は未鑑定。

土坑 (Fig. 26)

ＳＫ01 上面は1.6×1.2mの不整形を呈する。深さ0.3mほどの浅皿状の断面形である。建物**ＳＢ04**より新しい。

ＳＫ02 上面は1辺1mほどの不整な隅丸方形をなし、深さ0.3mを測る。**ＳＥ01**よりも新しい。

溝 (Fig. 26, ＰＬ. 21)

ＳＤ01 発掘区の南よりに検出された長さ7m、幅1mあまりの土坑状の溝である。西側から徐々に下降している。深さは0.2～0.25mと浅く、皿状の断面形をなす。

ＳＤ02 **ＳＤ01**の東端部近くから、北にのびる不整な溝である。幅0.5～1.4m、深さ0.2～0.3m、長さは6mほどで**ＳＥ01**の南側で消滅している。

ＳＤ03 丘陵部の段落ちにほぼ平行して、南北にのびる溝である。発掘区外の南・北にさらにのびる。南半部では**ＳＤ04**に切られて東側の壁は消滅している。幅0.4～0.8m、深さ0.2～

0.4mを測り、底面は北に向ってゆるく下降している。

ＳＤ04　**ＳＤ03**を切りながら北にのび、**ＳＥ01**の上で東に屈折し、**ＳＥ02**を切って発掘区外に続く。近世の溝。

ＳＤ05　発掘区の中央部北端から南東にのび、ＳＥ01付近で消滅する。長さは２ｍほど検出し、さらに発掘区外にのびる。幅0.4～0.7ｍ、深さ0.3ｍを測る。

3　出土遺物

調査区の大半が削平されていたため、遺構面上に遺物包含層はなかった。出土した遺物は、井戸・土坑・溝、建物の柱穴掘方、ピットなどから土師器・輸入陶磁器・国産陶磁器・石製品などが出土している。総量は少なく、コンテナに６箱程度にすぎない。以下、遺構ごとに記述する。

井戸

ＳＥ01下層出土遺物　（Fig. 31, ＰＬ. 22・25）　土師器（皿・杯・椀・鍋）、白磁（碗）、石鍋、縄文土器などが出土した。

土師器

皿（１・２）　１の外底はヘラ切り、板目圧痕がある。２は外底器表が剥離し、不明である。１・２とも内底はナデ調整されている。口径9.2～9.3cm、器高1.3～1.5cm。他に５個体の破片がある。外底はすべてヘラ切りである。

杯（３）　いわゆる丸底の杯。口径16.3cm、体部上位で屈折し、外上方に内弯ぎみにのびる。屈折部内面は強くナデて段状になる。他に１個体の破片がある。外底はすべてヘラ切り、板目圧痕を残すものもある。

椀（４～９）　口径15.4～16.6cm。器高5.0～5.7cm。いずれも体部中位から上位で屈折し、内弯ぎみにのびるものと外反するものがある。４・８は丸底の杯に見られたように屈折部内面を強くナデて段状になる。器表は内・外面とも粗いヘラミガキを施すが、７・９では丁寧なナデ調整なのか不分明なものもある。６は屈折部の内・外面に指頭押圧痕が残る。いずれも、高台は小さく鈍い。胎土・外表とも白みがかった灰褐色で、炭素の吸着はみられない。胎土中には１～２mmの石英・長石粒、雲母粒子を含む粗いもので、皿・丸杯の杯に等しく、精選されたとはいえない。しかし、１点ではあるが８は、暗褐色を呈し、胎土に茶褐色の粒子を含み異質である。

鍋（10）　体部下半を欠き、器形全容を知ることはできない。口径39.6cmの大形品である。口縁部外面に凸帯をめぐらす。内面は粗いハケメ、外面はナデ調整。暗茶褐色で外面にはススが付着している。

白磁

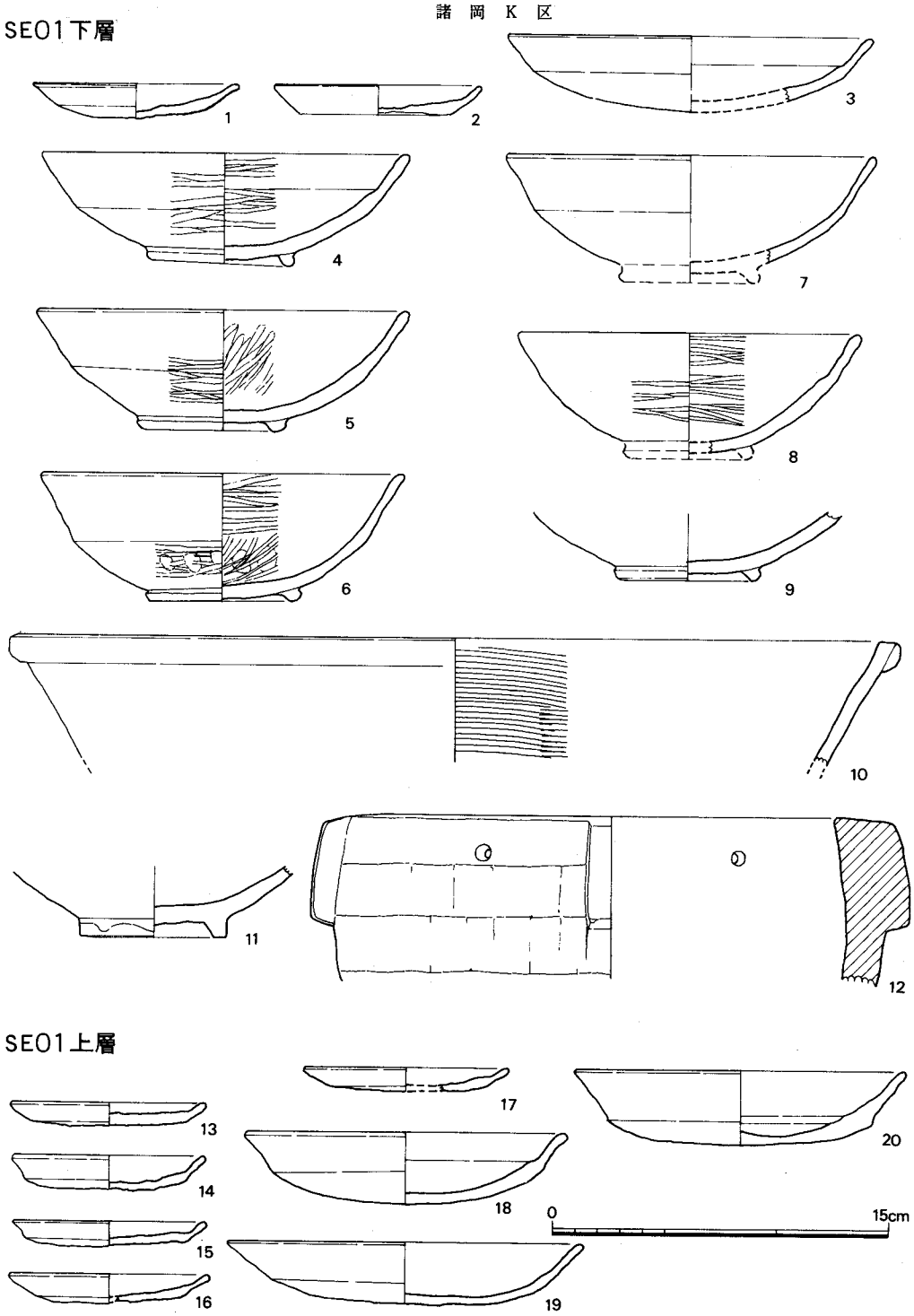


Fig. 31 遺物実測図Ⅰ（1/3）

碗（11）　体部上半を欠く。淡い青灰色の胎土に灰白色の釉がうすくかけられている。細かい貫入が入る。高台は露胎である。高台外面は直に、内面は斜めに削り落されている。同一個体と思われる小さな玉縁の口縁部破片がある（II－1・a）[註2]。

滑石製品

石鍋（12）　7個の破片が出土したが、個体数は判別しえない。12は縦長の把手を削りだしたもの。破片のため、把手数は不明だが4ヵ所につくと想定して図示した。把手のあいだに小孔を穿つ。これも数は不明である。内面はよく研摩されている。外面のノミ痕はかなり摩耗している。ススが付着している。

ＳＥ01上層出土遺物（Fig. 31・32, ＰＬ. 22・23）

土師器（皿・杯・椀・鍋）、瓦器（椀）、白磁（皿・碗）、青磁（碗）、施釉・無釉陶器、滑石製品などが出土した。

土師器

皿（13～17）　ヘラ切りのもの（13～17）と糸切りのものがある。糸切りのものは量的に少なく、かつ細片のため図示しえない。口径8.6～9.2cm、器高1.1～1.5cmで、下層の皿より口径が小さい。いずれも外底には板目圧痕があり、内底はナデ調整が加えられている。灰褐色系の色調を呈し、胎土は密だが1mmぐらいの石英・長石粒を含む。他にヘラ切りのもの20個体、糸切りのもの3個体分の破片がある。

丸底の杯（18・19）　口径14.6～16.0cm、器高2.7～3.3cm。18は体部の屈折部内面を強くヨコナデして段を付す。内面はナデ調整、体部外面は不調整である。ともに外底に板目圧痕がある。胎土は砂粒を含んだ粗いもので、淡い灰褐色を呈する。

杯（20）　口径14.8cm、器高3.3cm・底・体部の境は低い位置にある。体部外面は不調整。胎土・色調は丸底の杯と同じである。

椀A（21・22）　丸底の杯よりも体部が深く、かつ高台を付さないもの。口径14.6～15.6cm器高は5cm前後である。底・体部の境で屈折し、体部は内弯ぎみに外上方にのびる。体部外面はロクロナデの凹凸が顕著で、21は不調整、22は凸部にヘラミガキを施す。外底は粗いナデ調整、21には板目圧痕がある。22の内面は粗いミガキ、21の内面はナデかミガキか不分明だが滑らかに器面を調整している。外面は暗褐色を呈し、内面には炭素の吸着がみられるが充分なものではない。胎土は緻密だが、2～3mmの砂粒のほか茶褐色の粒子を含む。

椀B（23～26）　体部中位で屈折し、体部は外反ぎみにのび、外底に高台のつくもの。ただし、底部まで残存したものはない。口径16.0～16.8cm。24は屈折部内面よりやや上部に強いヨコナデを加えて段をなしている。体部内面は丁寧なナデ調整のものと、その上に粗いヘラミガキを施すものがある。胎土は椀Aよりも砂粒の混入が多く、杯に近い。色調も灰褐色系がほとんどである。24は内面に淡く炭素の吸着がみられる。他に5個体以上の破片がある。

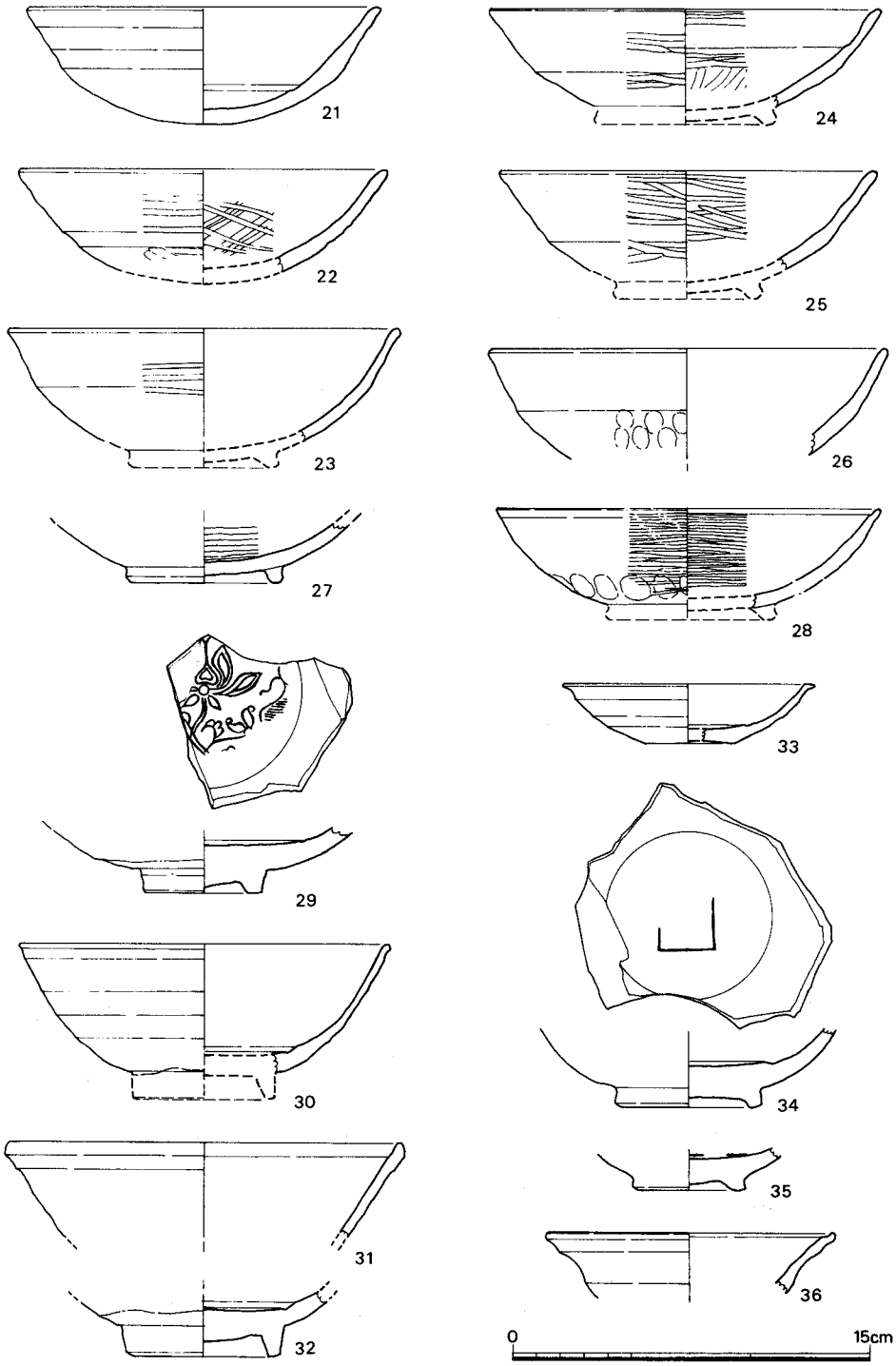


Fig. 32 遺物実測図II (1/3)

鍋（37）　復原口径37.4cmを測る。体部上位の内・外面はヨコナデ、中位以下はナデ調整。体部の上半内・外面にはスス・炭化物が付着している。胎土は大粒の砂粒を多量に含む。

瓦器

椀（27・28）　28は底部を欠く。体部上位でゆるく屈折し、口端内面に小さな段を付す。体部下半外面に指頭圧痕がみられる。体部の内・外面は細かいヘラミガキを施し、内底部には松葉状の暗文がある。胎土は精緻でほとんど砂粒を含まない。色調は黒灰～銀白色を呈する。27もほぼ同様な胎土・色調だが、ヘラミガキは28に比して粗雑である。内底のミガキは一方向のミガキの後に、直交するミガキを施している。他に底部が一点出土した。

白磁（29～33）

碗はⅣ類３点（１が１点、不明２点）、Ⅴ類４点（１が１点、３・ａ類が１点、不明２点）、その他１点が出土した。皿はⅣ－１類が１点、その他１点が出土した。

碗（29～32）　29は淡い灰色の胎土に、やや厚めに施釉されたもの。体部下半は露胎である。釉色は緑がかった灰白色で貫入が入る。内底見込みに沈線をめぐらし、その内側に草花文のスタンプがある。高台内側の削りが浅く、底部の器肉が厚い（14～15世紀）。30は白褐色の粗い胎土に、うすく施釉されている。体部下半は露胎である。釉色はくすんだ灰白色で、細かい貫入がある。見込みに浅い沈線状の段がめぐる。器肉は薄く、口端を外方にわずかにひきだしている（Ⅴ－３・ａ）。31は不整な玉縁状の口縁部をもつ。灰白色の胎土に、やや厚めに施釉されている。釉色は淡い緑がかった乳白色である（Ⅳ－４）。32は灰白色の粗い胎土に厚めに施釉されている。体部下半は露胎である。見込みに太い沈線状の段がめぐる。高台内面に径４cmほどの焼台痕がある（Ⅴ－１）。

皿（33）　口径10.6cm、器高2.5cmを測る。あげ底ぎみの底部端から口縁部の下までヘラ削りされる。口縁端部は水平に外方にするどくのびる。見込みに沈線状の浅い段がめぐる。胎土は白みの強い灰白色で、黒色の小粒子を含む。釉は底部を除く全面に施釉されている。釉色はウグイス色ぎみの灰白色である。

青磁

龍泉窯系の２点が出土した。

碗（34）　白味をおびた灰褐色の粗い胎土に、高台端部まで厚めに施釉されている。釉色はくすんだ緑褐色で細かい貫入が入る。高台畳付には５ヵ所の目跡がある。見込みには浅い段がめぐり、なかに方形のスタンプが押されているが、刻印が浅く文字はみえない（Ⅰ－１）。もう１点は、14世紀代のものである。

施釉陶器

輸入陶器（中国・明、朝鮮・李朝）と国産のものがある。

碗（35・36）　35は李朝期のものである。胎土は淡い赤褐色で、１～２mmの砂粒を含みやや

粗い。釉はくすんだ白褐色でうすめに全体に施釉されている。高台畳付けと内底見込みに、重ね焼きの目跡がある。36は灰色の胎土にうすく施釉したもの。釉は白みがかったウグイス色である。口縁部内面は小さな受け口状をなす。唐津系と思われるが断定しえない。

他に褐釉の壺体部片と宋三彩洗（盤）の可能性のある底部破片がある。洗（盤）の胎土は淡いネズミ色で、砂粒を含み粗い。内底にヘラによる文様の一部があるが小破片のため、どのような文様かわからない。釉はすべて剝げ落ちている（ＰＬ．23－ａ）。

無釉陶器

甕（38）　底部のみの小片。胎土は１～２㎜の砂粒を含んだ粗いもので、淡い赤褐色を呈する。あげ底状の底部である。外面にはススが付着している。

滑石製品

（39）　石鍋片を再利用したミニチュアであろう。

ＳＥ03出土遺物　（Fig. 33, ＰＬ．22）

土師器（杯）、輸入陶磁器（青磁・白磁・李朝陶器）などが出土した。

土師器

杯（40～42）　すべて糸切りである。口径11.4～11.7cmを測る。器形のうえで、40と41・42の２種にわかれる。40は器高2.1cmで、体部が低く皿に近い形態である。41・42は2.5～2.9cmと少し高い。体部は内弯ぎみに外上方にのび、端部は尖りぎみに終る。体部内・外面はロクロナデ、40のみ内底にナデ調整が施されている。41・42は灰褐色を呈し、胎土に石英・長石粒子を多量に含み粗い。４は精選された緻密な胎土で、赤色・灰色の粒子を含む。

青磁

龍泉窯系碗Ⅰ類の小破片が１点出土している。

白磁

碗Ⅳ類の小破片が１点出土している。

施釉陶器

小碗（43）　口径10cm、器高3.6cmを測る。体部の内・外面はロクロナデ、底部は内面を浅く削りだして低い高台状にしている。暗灰色で砂粒を多く含んだ胎土に、全面にうすく施釉している。高台畳付の釉はカキ落している。釉はくすんだ緑灰色で、内・外面に斑点状の焼きむらがある。内底見込みと高台畳付に５～６ヵ所の重ね焼きの目跡がある。李朝陶器である。(註３)

他に産地不明の小破片１点がある。

ＳＫ01出土土器　（Fig. 33）

土師器（杯・椀、鍋、鉢）、瓦質擂鉢、石鍋、白磁Ⅳ類などが出土したが、いずれも細片である。

土師器

（44）　無釉陶器としたほうがよいかもしれない。器肉のきわめてうすい土器である。器形

は椀のようなものであろうか。内面にはロクロ水びきの痕が顕著である。胎土は緻密で灰褐色を呈する。外面にススが付着している。

ＳＫ02出土遺物

土師器皿、瓦質の擂鉢の細片が出土した。図示できるものはない。

ＳＤ01出土遺物　(Fig. 33,　ＰＬ. 24・25)

土師器（杯・皿・椀・鉢)、土師質の擂鉢、瓦器（碗)、白磁（碗)、染付、石製品が出土したが、細片が多い。その他に黒躍石フレイクが２点出土した。

白磁

碗Ⅷ類の小片が１点、他は図示した２点が出土した。

小碗（45）　体部の低い皿状のもの。胎土は白みの強い灰白色で緻密である。釉は全面にやや厚めに施釉された後、高台畳付の部分をカキ落している。釉色は青みがかった白色である(明・16世紀)。

猪口（46）　伊万里系の製品と思われる。口径5.2cm。灰白色のやや粗い胎土に、くすんだ灰白色の釉をうすめに施釉している。底部の器肉が厚い。

染付

碗（46）　小破片のため、口径は確実なものでない。胎土は淡い灰褐色で、灰黒色の粒子を含む。釉はやや厚めに施釉され、淡い灰褐色、細かい貫入が入る。呉須は黒色に近い緑色に発色している。文様は不明。国産か輸入品か判別しえない。

滑石製品

（48）　宝塔の相輪であろう。上部を欠く。現高31.6cmを測る。下端は差し込みの部分である。断面形は正円でなく、楕円形となっている。

ＳＤ02出土遺物

土師器（皿・杯・椀)、瓦質土器（鉢)、瓦器（椀)、白磁（碗)、施釉陶器（天目碗)、土師質の火鉢などが出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。その他に夜臼式土器甕体部片、砥石の小片などもある。土師器の皿にはヘラ切り、糸切りともにある。

ＳＤ03出土遺物　(Fig. 34,　ＰＬ. 23・24)

土師器（皿・杯・椀)、土師質土器、瓦質土器（擂鉢)、石鍋、白磁、施釉陶器などが出土したが、細片が多く図示できるものは少ない。その他、夜臼式土器壺の体部片、黒曜石フレイクが出土した。

土師器

杯（49・50）　いわゆる丸底の杯である。口径14.7～15.0cm。底・体部の境で屈折し、体部は内弯ぎみにのびる。49の底部には指頭圧痕がある。灰褐色系の色調で、胎土も粗い。

瓦器

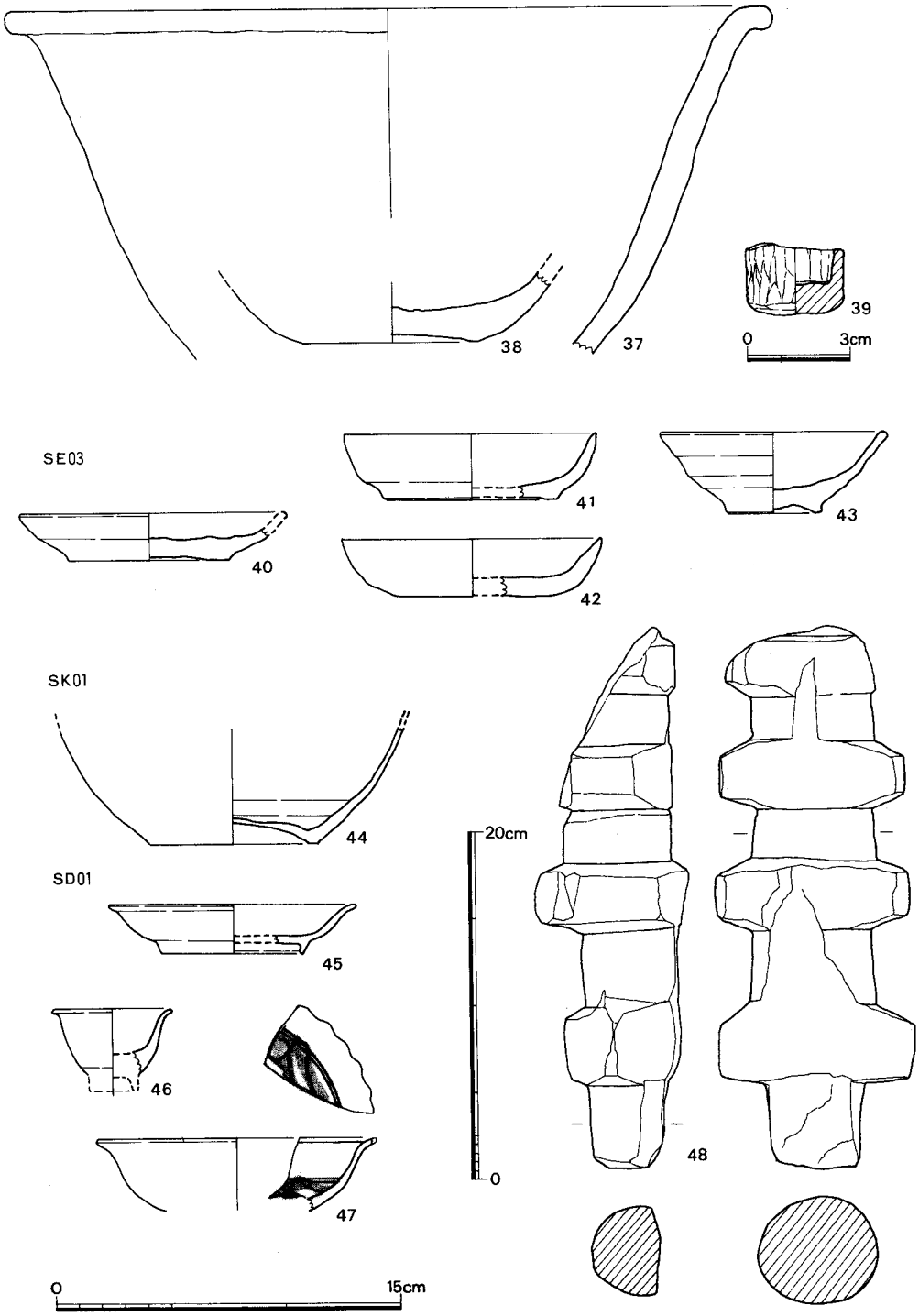


Fig. 33　遺物実測図Ⅲ（39は½、48は¼、他は⅓）

椀（51）　口径17.0cm、器高5.0cmを測る。体部は中位で屈折し、外反ぎみにのびる。器表の剝離が著しく調整は不明である。胎土は砂粒を多く含み緻密なものではない。淡い黒灰色を呈する。

瓦質土器

擂鉢（52）　口径29cm、器高11.4cm。体部内・外面はナデ調整、口縁部内・外面はロクロナデを施す。体部下半外面に粗い指頭圧痕がある。内面には4本1単位の太い条溝が入る。破片のため片口部はわからない。胎土は砂粒を含んだ粗いもの、外面は暗灰褐色、内面は黒灰色である。

白磁

碗Ⅳ類の小破片が1点出土している。

施釉陶器

美濃系の灰釉陶器（碗）と、産地不明の黒釉碗がある。灰釉陶は小片のため図示できないが、暗灰色の胎土に厚めに施釉されたもの。釉は淡いウグイス色に発色し、粗い貫入が入る（ＰＬ23－ｅ）。

ＳＤ04出土遺物

土師器の杯か椀の体部小破片が1片出土しただけである。

ＳＤ05出土遺物

土師器の杯か椀の体部小破片、土師質の鍋・鉢、瓦質の擂鉢、石鍋、白磁碗（Ⅳ類）などが出土したが、すべて細片のため図示しえなかった。

掘立柱建物掘方出土遺物　（Fig. 34, ＰＬ. 24）

ＳＢ01　いくつかの掘方から、土師器、土師質の擂鉢、瓦器碗、瓦質の鉢、白磁碗（Ⅳ類）、施釉陶器（李朝あるいは唐津系）、土師質の釜などが出土しているが、ほとんどが細片のため図示しうるものは少ない。

土師質土器

釜（61）　体部中位の破片で、径は不確実である。胎土は砂粒が少なく精緻である。体部外面のツバより少し下ったところで屈折して底部にいたる。屈折部上方は粗い横のハケメ、下方は斜位のハケメ調整。体部内面はナデ調整である。ツバより下方は火を受けている。色調は外面暗褐色、内面茶褐色を呈する。

ＳＢ02　土師器、瓦器、白磁、染付、施釉陶器などが出土しているが、ほとんどが細片である。

染付

碗（54）　碁笥底の碗で、体部上半を欠く。見込みの蕉葉文は丁寧に表現され便化がみられない。胎土は白色で釉はやや厚めである。呉須の発色もよく藍色である。明の染付で15世紀～16世紀前半に属する。

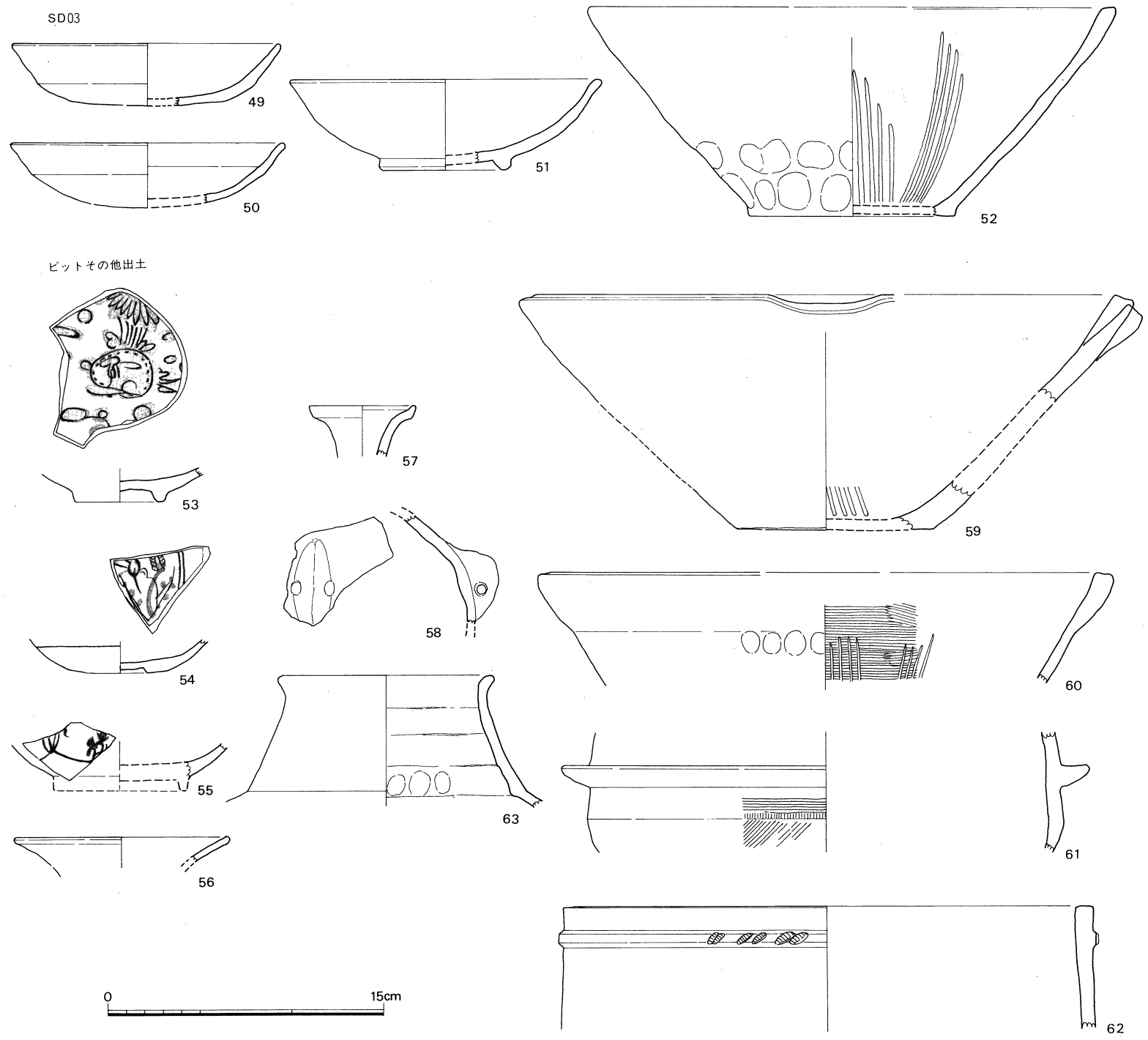


Fig. 34　遺物実測図Ⅳ（⅓）

SB03　土師器の小破片が出土しているが、図示しうるものはない。

SB05　土師器、白磁、染付のほか鍛冶滓と思われる鉄滓が出土している。染付（PL．24－a）は、碗の小片であるが、明灰褐色の胎土で、やや厚めの透明釉を施釉している。外面に唐草文の一部がみえる。明代の中国南部の製品。

SB07　染付が出土している。染付は小破片で詳細はわからないが、内面に蕉葉文の一部がみえる（PL．24－c）。明の染付の可能性もある。

SB08　土師器、瓦質の鉢、龍泉窯系青磁、白磁、染付などが出土したが、いずれも細片である。その他、鍛冶滓と思われる鉄滓がある。染付は小破片で詳しくはわからないが明代の可能性がある（PL．24－b）。

SB09　瓦質の擂鉢、土師質の釜、白磁、染付、施釉陶器などが出土している。いずれも細片である。

土師質土器

釜（58）　把手部の破片である。傾きについては正確なものでない。

白磁

壺（57）　口縁部のみで、器形全体はわからない。水注であろうか。胎土は灰色ぎみの白色で、釉は厚めである。釉色は青みがかった白色。

染付（53）　碗の底部破片。胎土は灰白色で精緻である。見込みには、中心に動物文様を置き、周囲に菊花、草文を配する。高台は太く安定している。呉須は藍色に発色しており、透明釉はやや厚めに施釉されている。伊万里でも比較的初期の段階に属する。

SB10　土師器、土師質の鍋、瓦質の火鉢、龍泉窯系青磁、施釉陶器などが出土したがいずれも細片である。

瓦質土器

火鉢（62）　口径20cm、口縁部下に低い凸帯がめぐる。凸帯上には柾目の板端部を押圧している。口縁部内・外面はヨコナデ、凸帯以下は、内・外面ともナデ調整を加える。胎土は精緻で、砂粒をほとんど含まない。暗灰色を呈する。

SB12　土師器・施釉陶器の小破片が出土している。

施釉陶器

（56）　器形は碗であろうか。小破片のため口径は不確実である。胎土は明灰色で、砂粒の混入は少ない。釉はうすく施釉され、ウグイス色ぎみの灰白色である。細かい貫入が入る。

ピット出土土器　（Fig. 34, PL．24）

土師質土器

擂鉢（59）　破片が小さいため口径は不確実である。胎土は3～4㎜の石英・長石等を多量に含み粗い。内面に4本を単位とした条線が施される。明灰褐色。ピット1出土。

瓦質土器

擂鉢（60）　破片が小さいため、口径は不確実である。口縁部の外面が肥厚した形態で、片口部分はわからない。口縁部内・外面はヨコナデ、以下外面はナデ調整を施す。内面は全体にハケメ調整され、その上に４本を単位とした条溝を刻んでいる。胎土は精緻で砂粒の混入は少ない。内面から口縁部外面に炭素の吸着がみられる。体部外面は明るい灰白色を呈する。ピット２の出土。

染付

碗（55）　小破片のため、傾き・径は不確実である。淡い灰色の胎土でやや厚めに施釉している。体部外面下半部に唐草文がめぐる。呉須は濃緑色に発色している。透明釉には粗い貫入が入る。明代中国南部（広東・安南周辺）の製品。**ＳＢ05**柱穴掘方出土の染付と同産地である。ピット３出土。

無釉陶器

擂鉢（ＰＬ．24－ｆ）　小破片である。口縁部の内に鈍い凸帯をめぐらす。２～３㎜の砂粒を含む粗い胎土で、内・外面とも暗赤褐色である。13世紀頃の中国産か。ピット４からの出土。

夜臼式土器

壺（63）　口径11.8cmほどの中形の壺である。口頸部は内傾し、口縁部がかるく外反している。体部との境は明瞭である。口頸部～体部の外面は横方向の細かいヘラミガキを施し、口縁部内面もミガキを加えている。それ以下の内面は削り調整である。胎土は砂粒を多量に含んだ粗いもので、色調は黒色を呈する。**ＳＥ02**東側の近世攪乱中から出土した。

4　小結

本調査で検出された遺構・遺物は、大きく２つの時期にわかれる。１つは井戸**ＳＥ01**・溝**ＳＤ03**であって、ほぼ11世紀後半～12世紀のものである。いま１つは、調査区全体に検出された掘立柱建物群で、それには井戸**ＳＥ02・03**、溝**ＳＤ01・02・04・05**、土坑**ＳＫ01・02**などが伴う。建物の出現・消滅とも明確にはしがたいが、おおむね16世紀～17世紀と考えられる。

いま少しく仔細にみておきたい。**ＳＥ01**の埋没は、下層出土土器にみられるように、大宰府編年の**ＳＤ1330**期[註4]にあたる。上層出土土器には、外底系切りの土師器、龍泉窯系青磁Ｉ類なども入っており、上層の埋没が12世紀前半～中頃にあることをしめしている。またこの上層や**ＳＤ03**の出土土器に、新しい段階の輸入・国産陶磁器がみとめられるが、これは遺構の著しい重複から、混入したものと思われる。この段階の遺構は、建物群造営時の地下げ整地によって、ほとんど削平され消滅したのであろう。

掘立柱建物は、その平面的規模の全部、あるいは一部を確認しえたもので12棟がある。それでも、柱穴掘方と想定されるピットの半分強がまとまったにすぎない。そのなかで、建物の重

複回数をみると、例えばＳＢ02では８棟の建物と重複している。この地区で間断のない造替とみて、１棟を20～25年とする耐用年数の単純計算でも、相当な長期にわたる宅地としての使用が想定される。この時期に通有なように、建物の柱穴掘方は小さく、仮りに重複していてもその先後関係を明確に把えることは難かしい。この調査区のばあいも、いくつかの好例をのぞいては、判別しえなかったものが多い。

いま、溝・土坑・柱穴掘方などの出土遺物から、この建物群の上限を考えると、李朝陶器、明染付・白磁、美濃系灰釉陶器などからほぼ16世紀の初め頃に求められるようである。下限は伊万里系の染付で、17世紀前半の製品までが柱穴掘方に入っている。したがって17世紀前半以後となる。

建物の平面形では、大きく３種に分かれる。１．２×３間、あるいは２×３間以上の長方形プランで、桁行柱間の大きいもの（ＳＢ02・06・08）。２．２×３間であるが、桁行柱間が狭く正方形に近いプランのもの（ＳＢ01・07・09）。３．１×１間の小規模建物（ＳＢ10・12）である。１と２の建物を比較したばあい、１が東西棟建物で概して規模が大きく、２は南北棟建物で１よりも小規模である。いくつかの柱穴掘方の重複からは、１の建物が２よりも後出するようである。

また、調査区のなかで重複しない建物もいくつかある。建物の方位でみるとＳＢ01と05、ＳＢ03と04、ＳＢ02と10などは、同時期に併存して宅地を構成した可能性もあるが、断定しうるところではない。

ＳＢ03の南側とＳＡ03の東側には、ほとんど建物がみとめられず、井戸があるにすぎない。こうした配置は、この地区が一つの宅地として継続して使用された可能性をしめすのではなかろうか。

註１　福岡市教育委員会『板付周辺遺跡調査報告書（６）』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集）1980

註２　以下、青磁・白磁の分類は下記文献による。横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」（九州歴史資料館研究論集４）1978
なお、分類にあたっては、横田・森田氏の教示をえた。厚くお礼申しあげる。

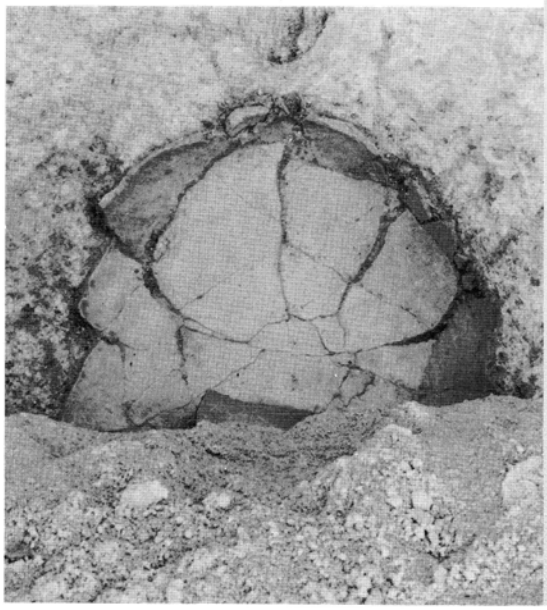
註３　以下、施釉陶器、染付磁器については佐賀県立九州陶磁文化館　大橋康治氏、佐賀県教育委員会文化課　東中川忠美氏の教示をえた。厚くお礼申しあげる。

註４　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚書」（九州歴史資料館研究論集２）1976、森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚書（２）」（九州歴史資料館研究論集３）1977、および註２文献

図　　版

PLATES

1．調査区全景
（西から）

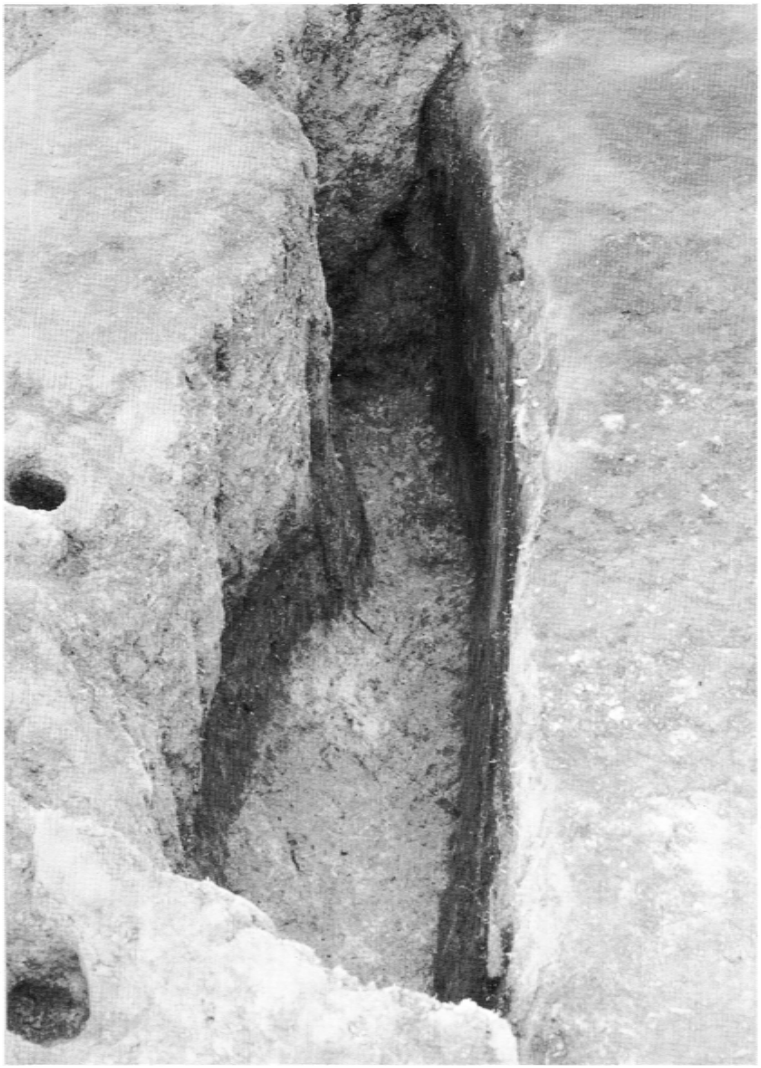


2．K01　出土状況

3．K01

1．調査終了全景（南々西から）

2．調査終了全景（北から）



2. SX01（西から）

1. SD01およびSX02（南から）

1．SX01と柱穴群（南から）

2．SX02（南西から）

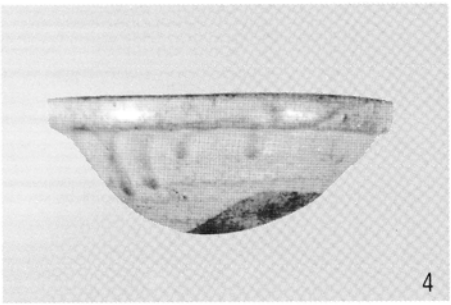
1．SX02（南から）

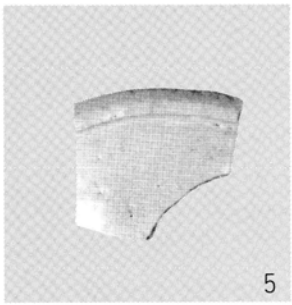
2．SX02（玄室から羨門部をのぞむ）

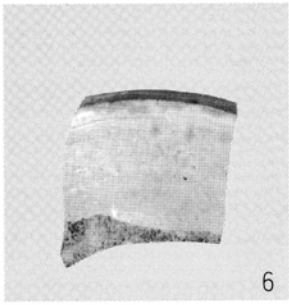
1. SX03（玄室より竪坑をのぞむ）

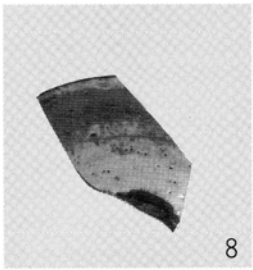
2. SX03竪坑部（南から）

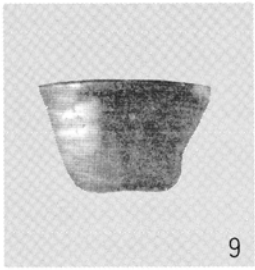
3. SX03（西から）

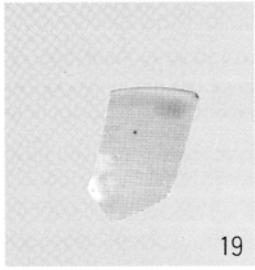


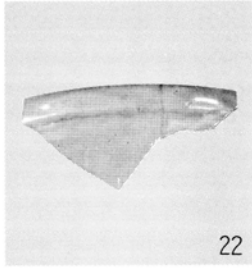


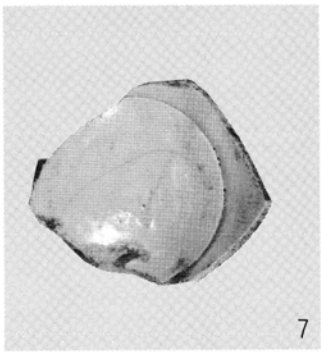


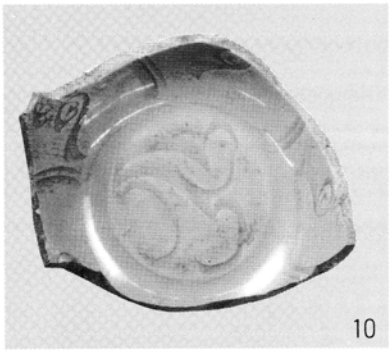


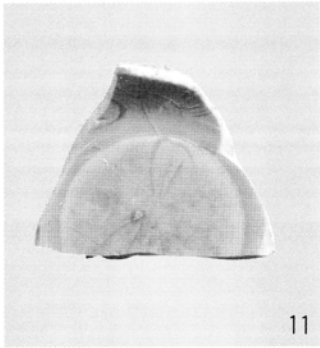


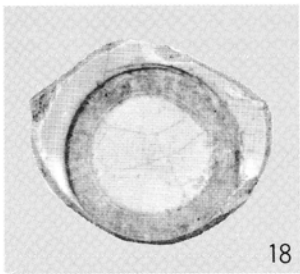


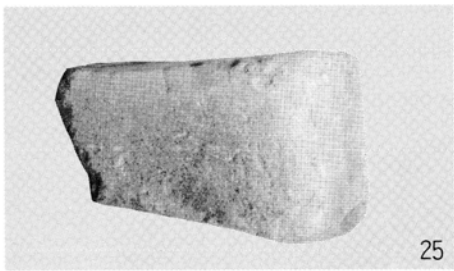


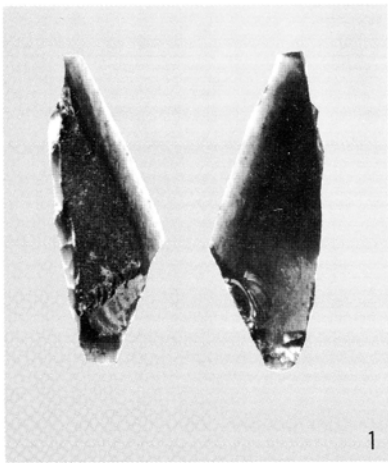












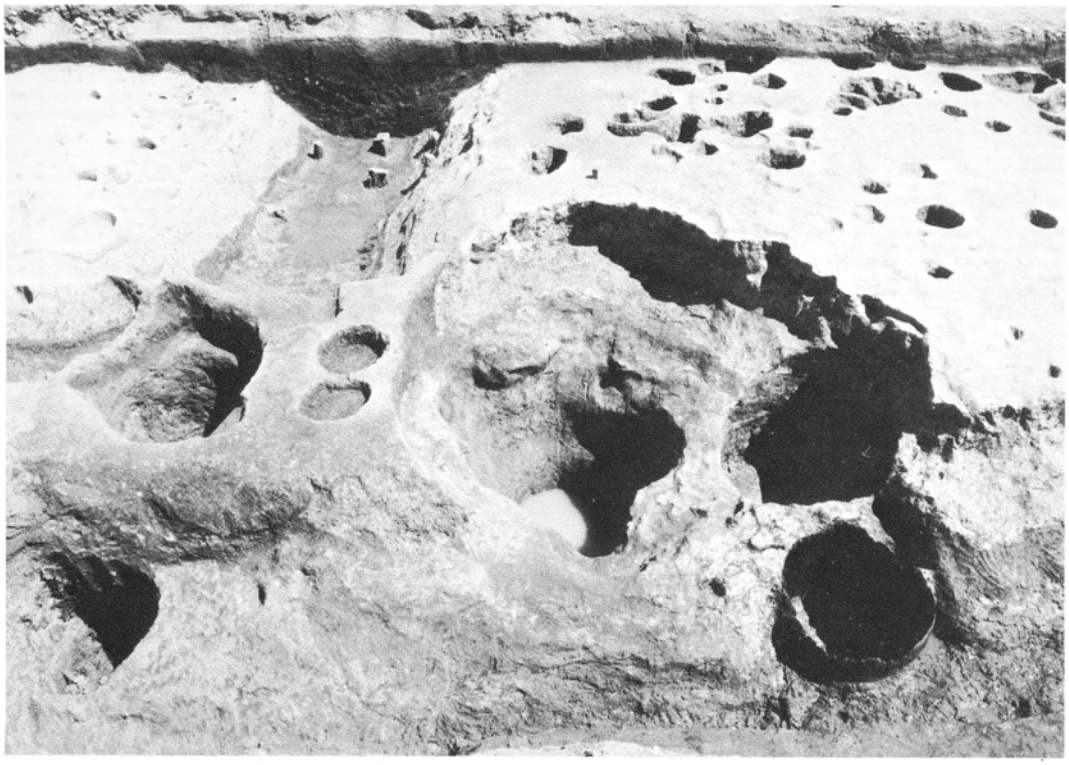
出土遺物

1．調査前現況近景（東から）

2．調査終了全景（東から）

1．調査終了全景（東から）

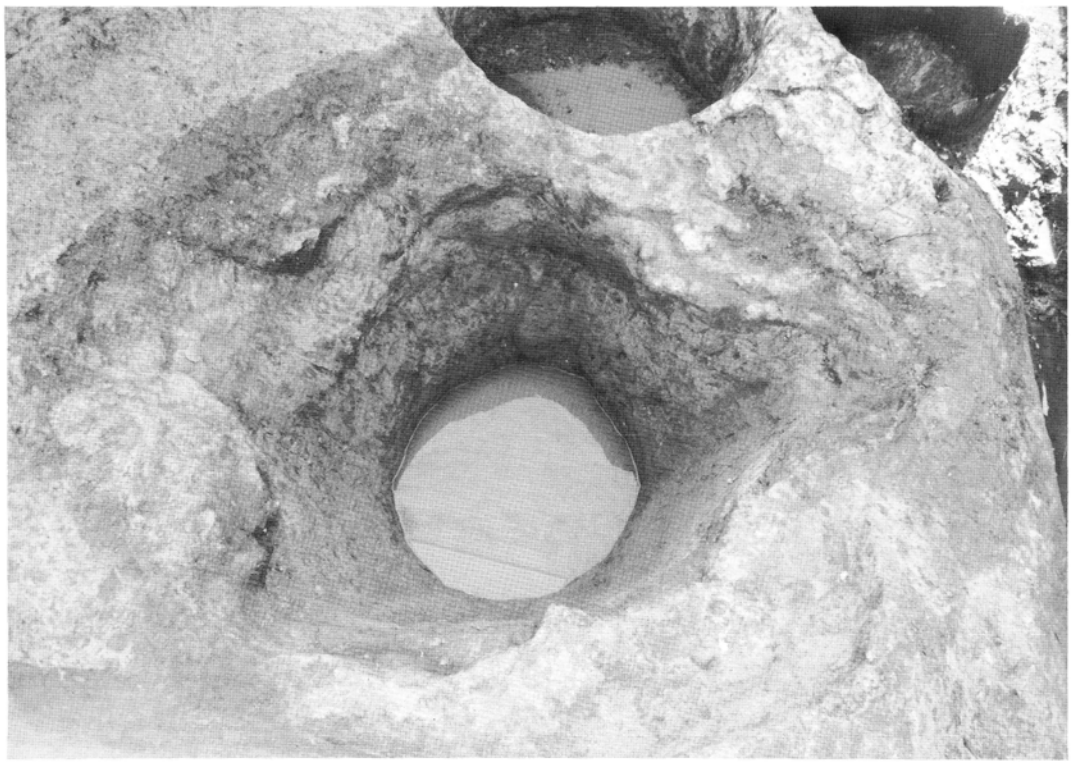
2．調査終了後全景（南から）



1．井戸および柱穴群、SD01（北から）

2．SD01，SE01～05（南から）

1．SD01土層断面（北から）

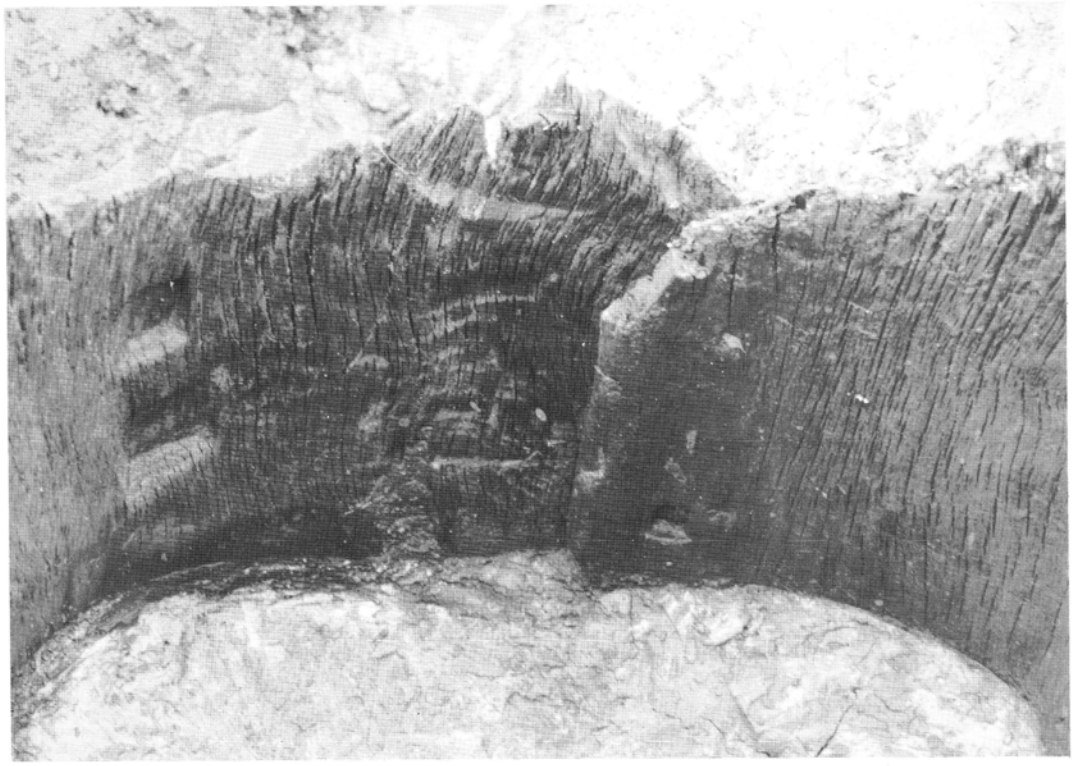


2．SE01（東から）

1．SE02（東から）

2．SE03・04（東から）

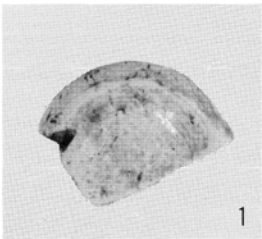
1．SE04　木製桶出土状況

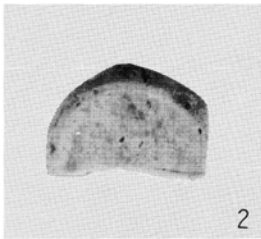


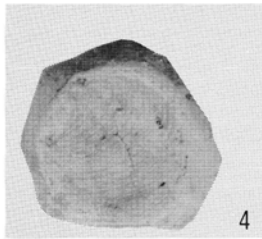
2．SE04　枠組状況

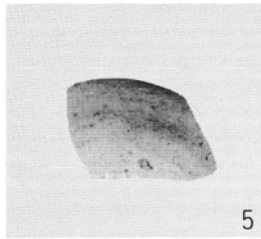
1．SK01（東から）

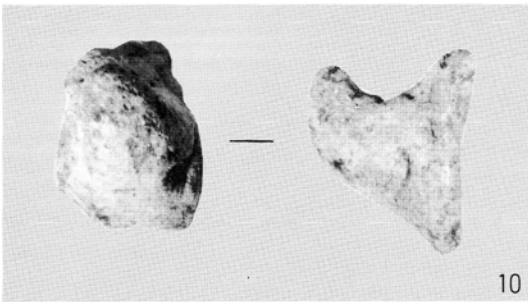
2．SK02（北から）

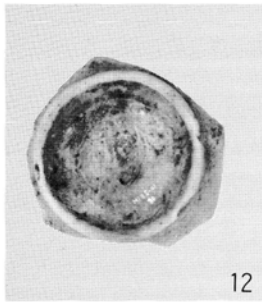

1


2


4

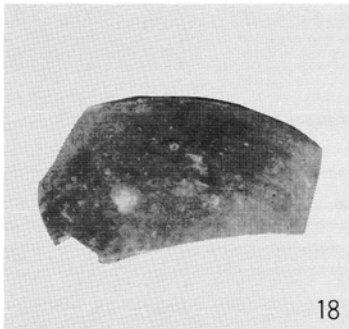

5

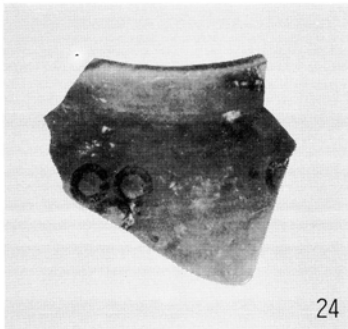

10

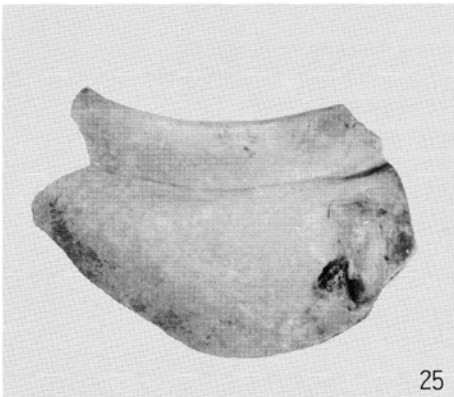

12

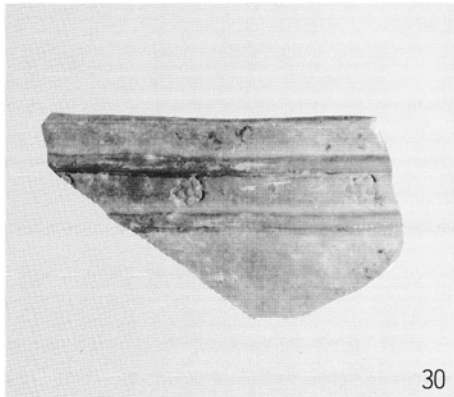
15

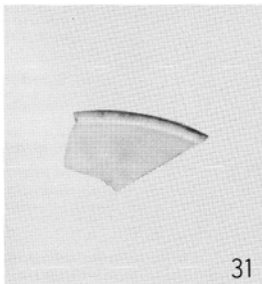
17


18

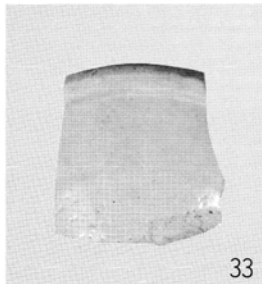

24

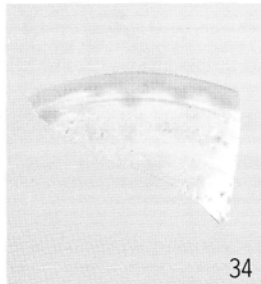

25


30

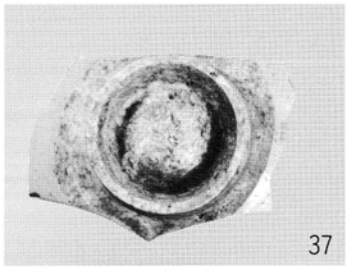

31

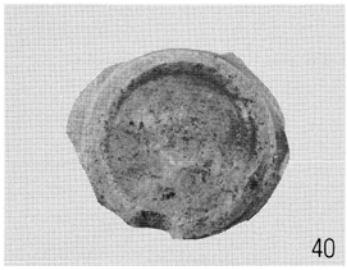
32

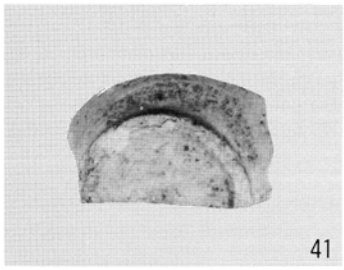

33

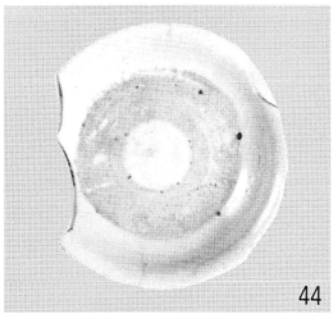

34

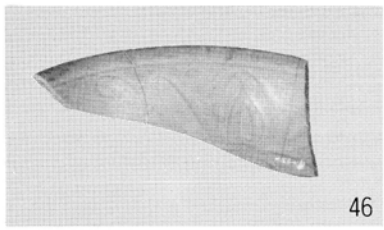
出土土師器・瓦器・白磁

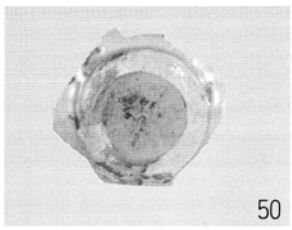

37

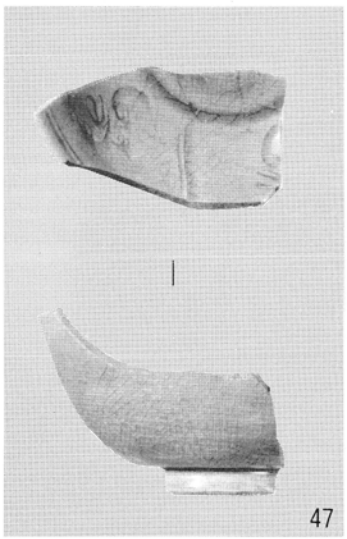

40

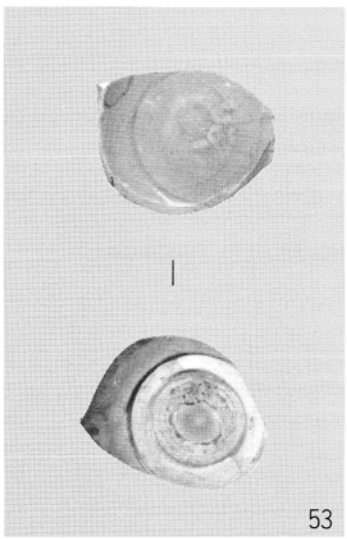

41

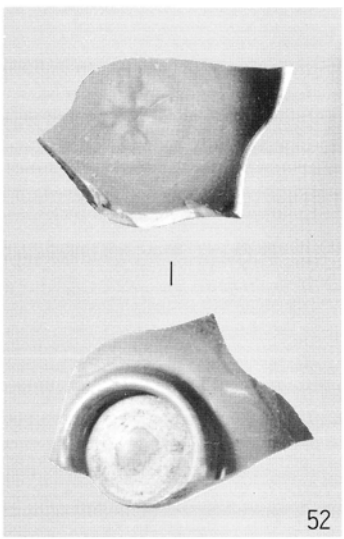

44

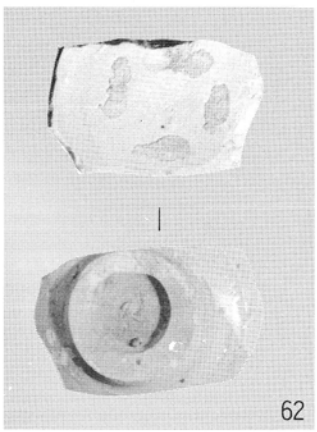

46

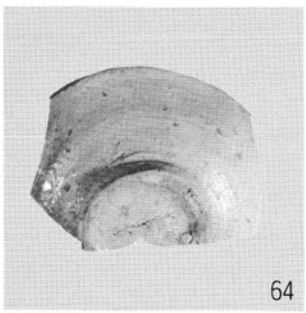

50

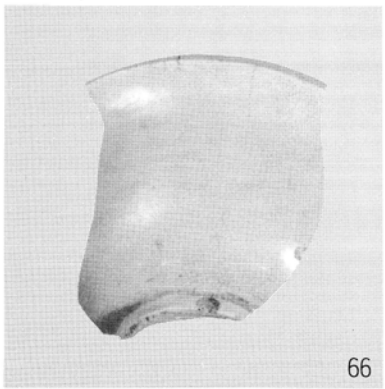

47


53

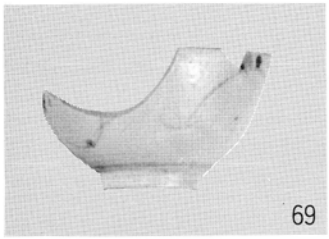

52

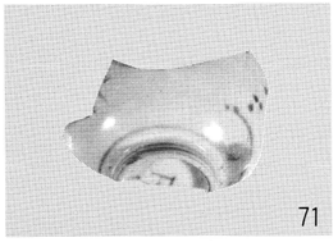

62

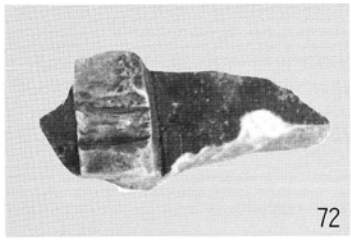

64

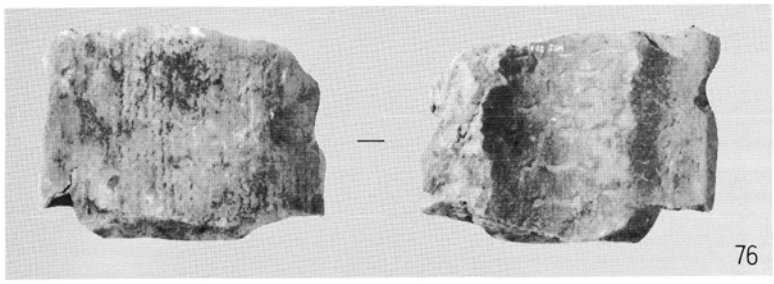

66

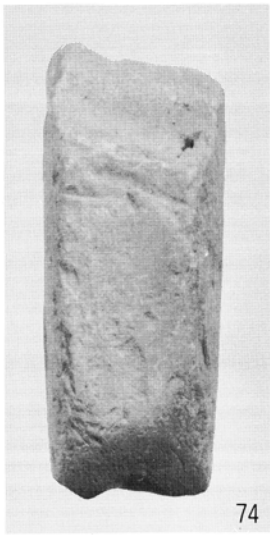
出土青磁・陶器・染付

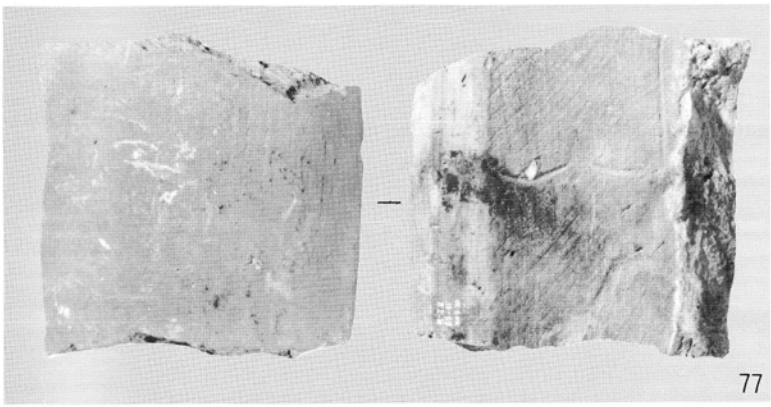

69

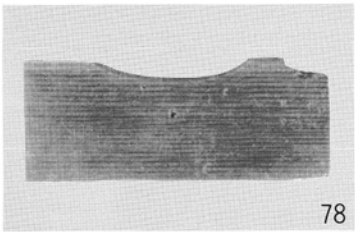

71

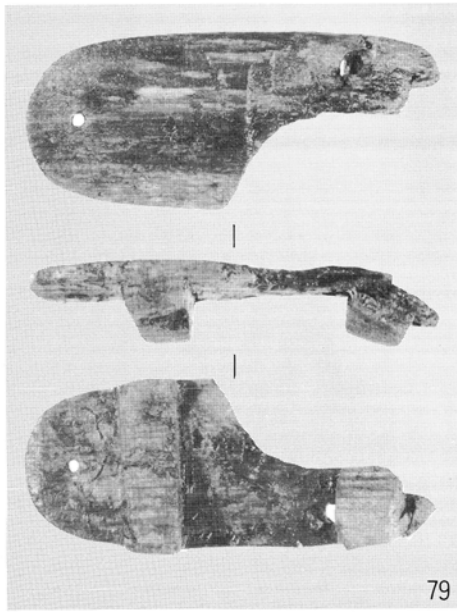

72

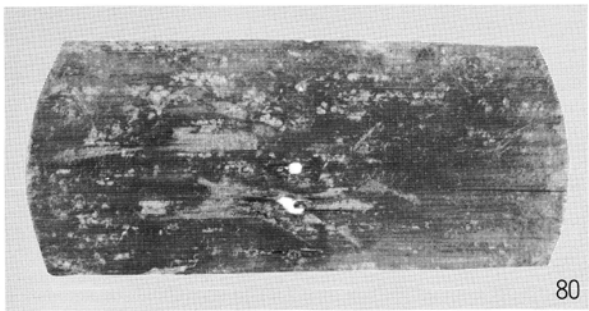

76


74

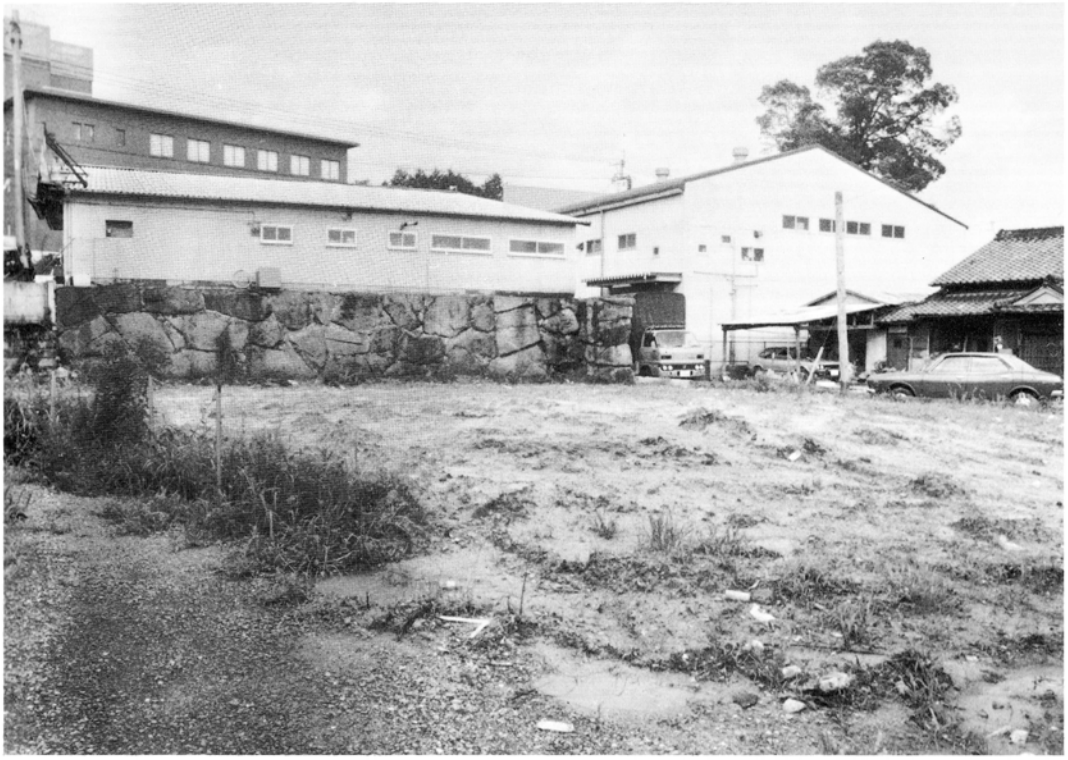

77


78

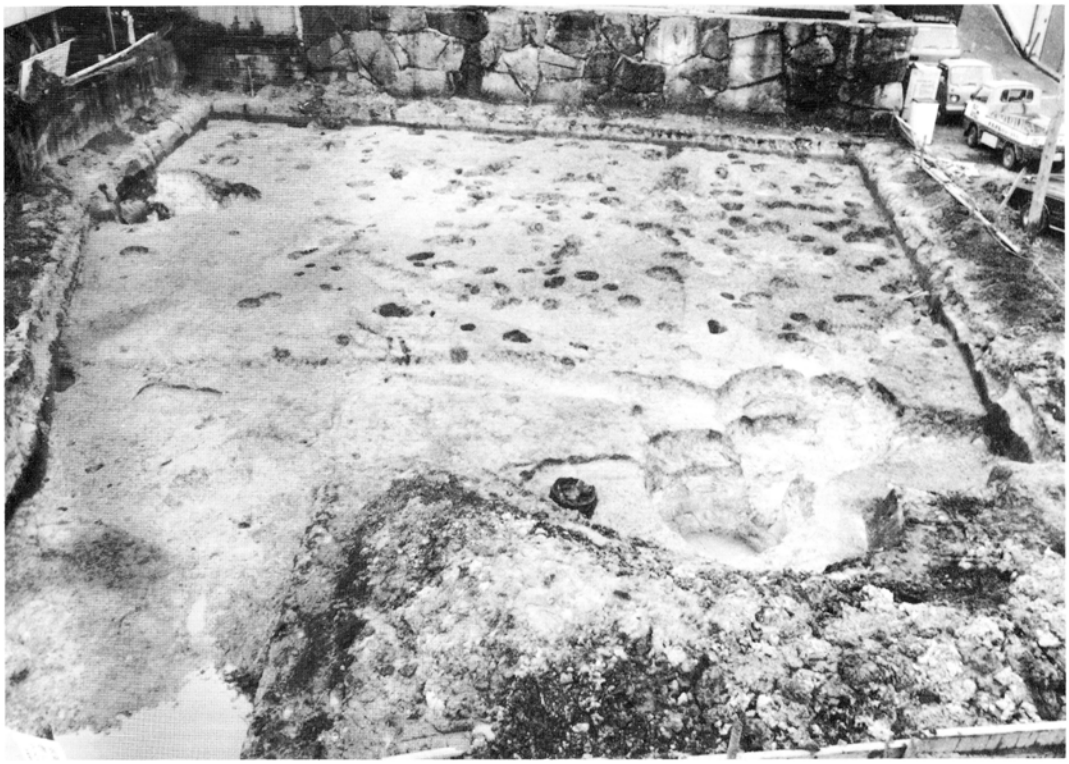

79


80

出土石製品・瓦・木製品



1．調査区全景（調査前・南東から）



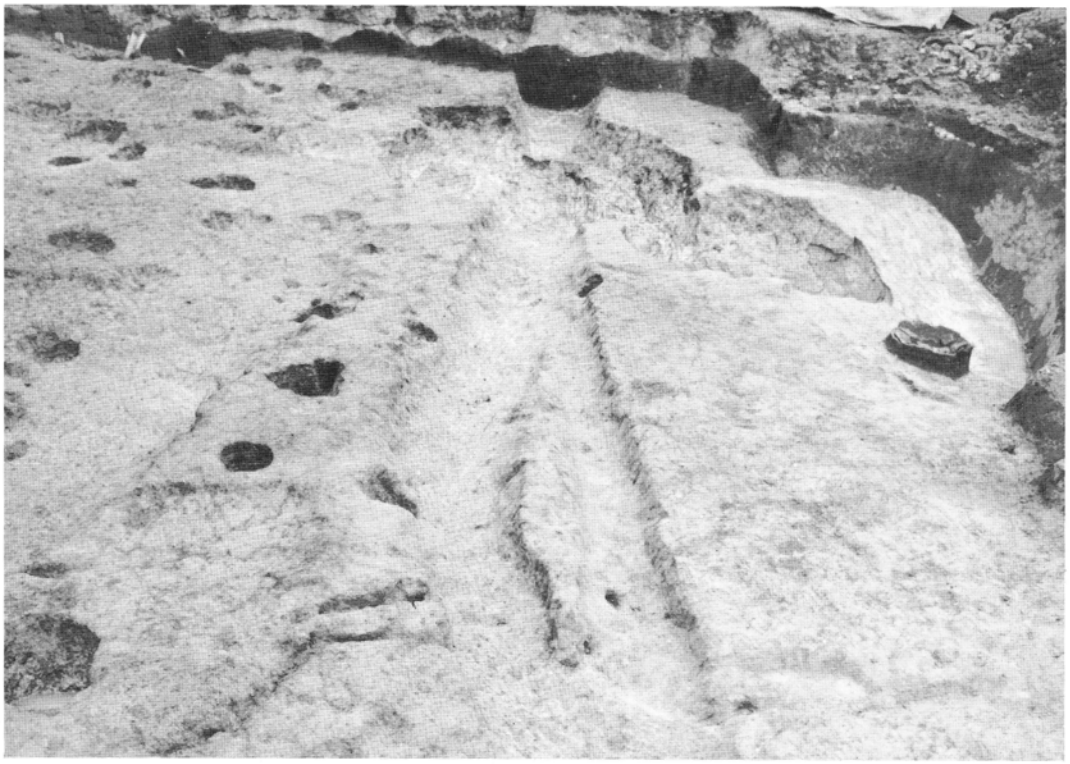
2．調査区全景（東から）

1．掘立柱建物群（北から）

2．掘立柱建物群（南から）

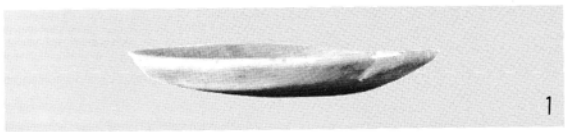
1．井戸SE01･02（左がSE01・南から）

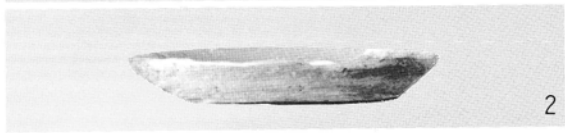
2．井戸SE03（北から）

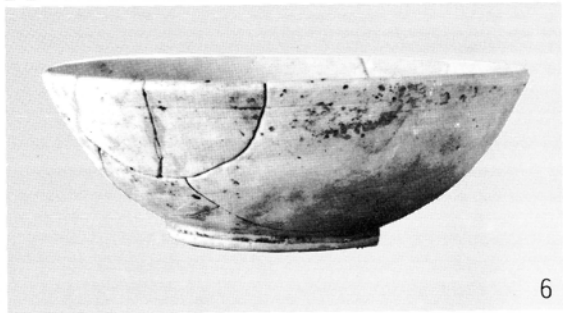


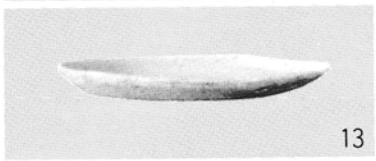
1．SE03･04（南から）

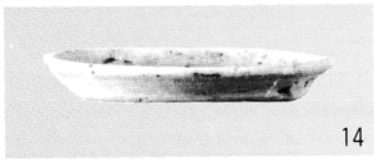
2．SD01（東から）

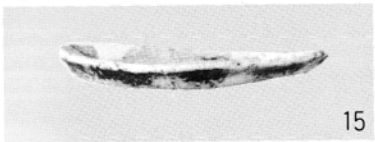


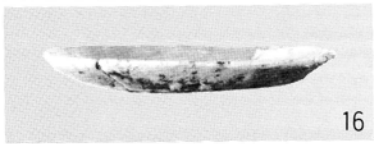


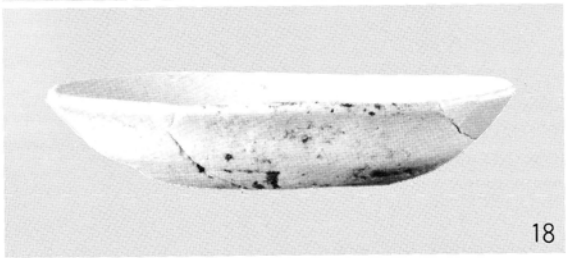


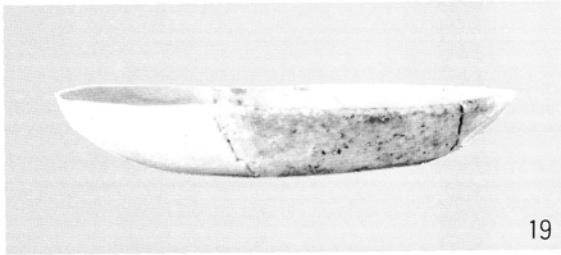


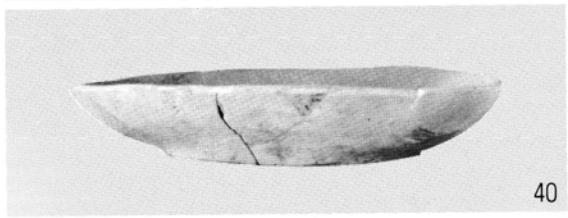




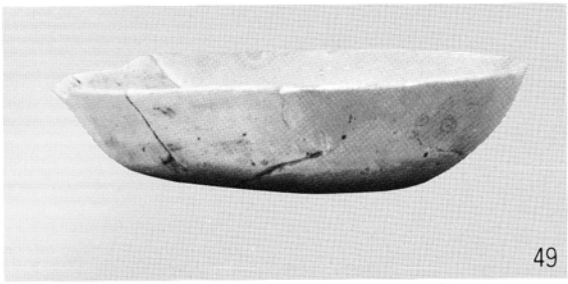


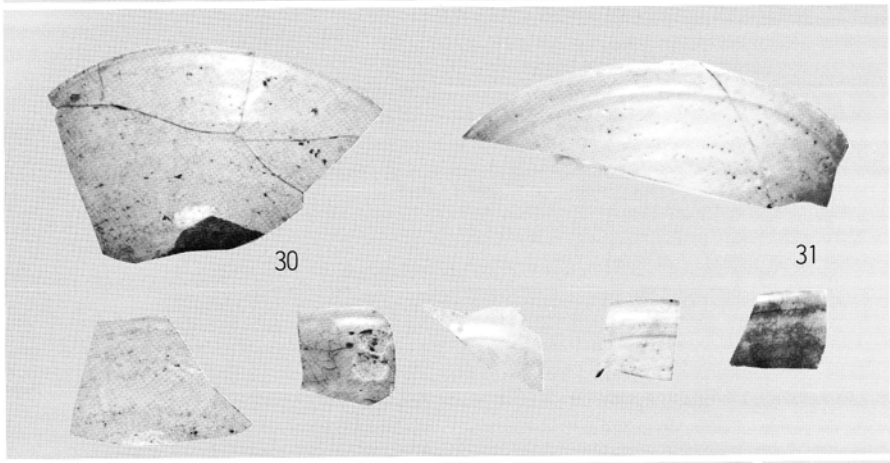


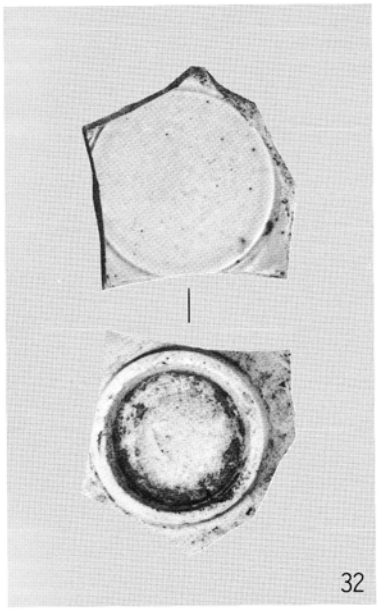


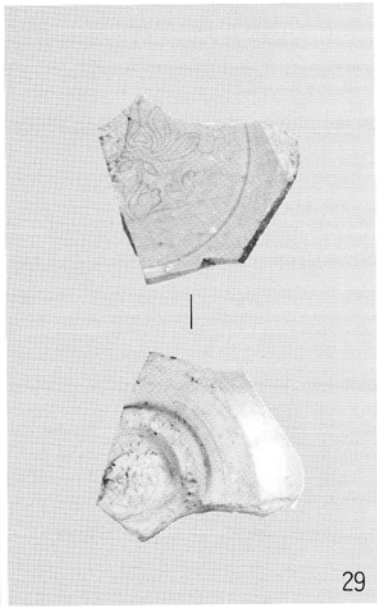


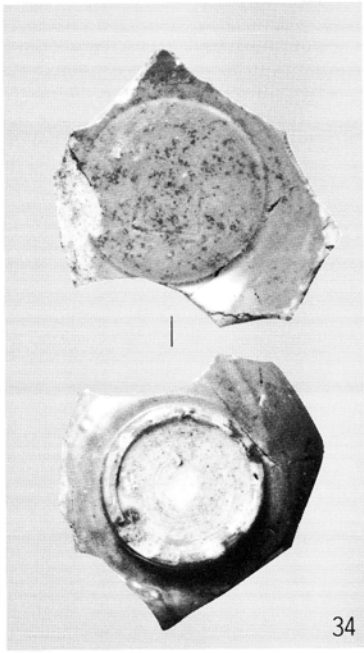
SE01下層(1～6)　SE01上層（13～19）　SE03(40～43)

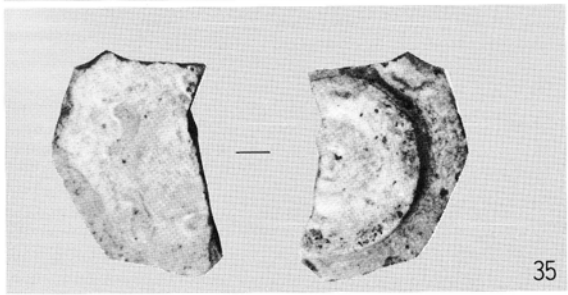


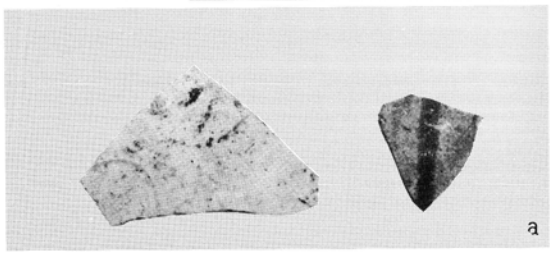




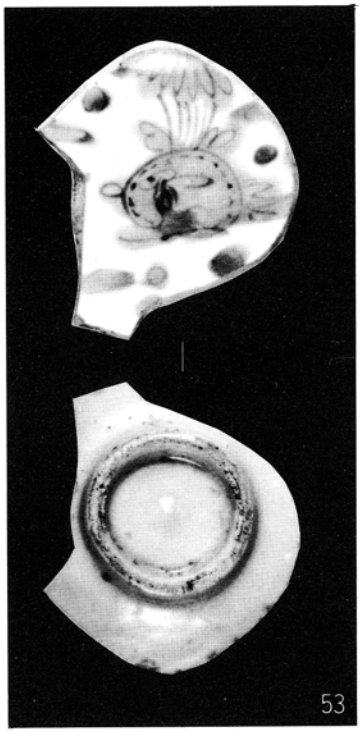


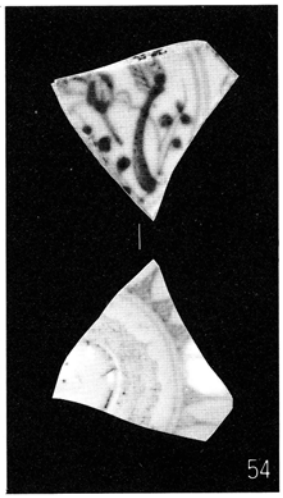


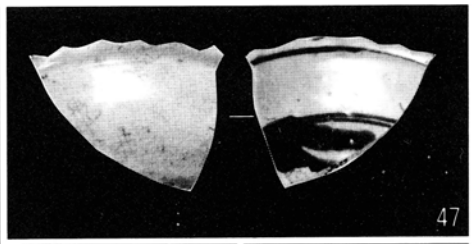


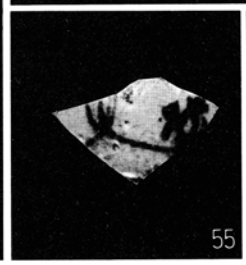


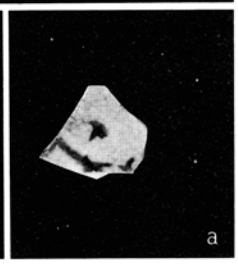
SD03(49･50)　SE01上層(29～35・a)

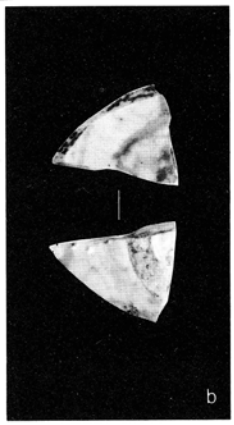


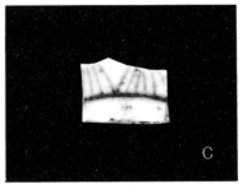


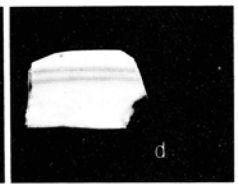


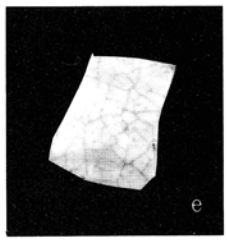


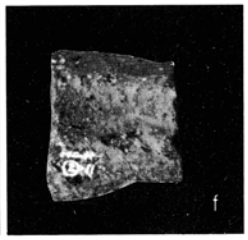


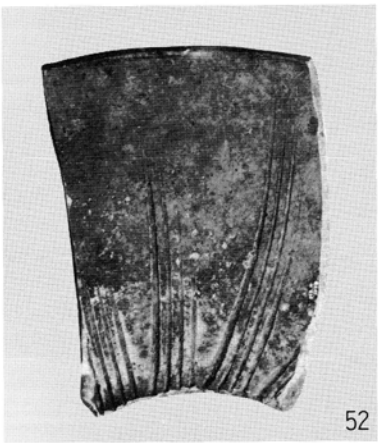


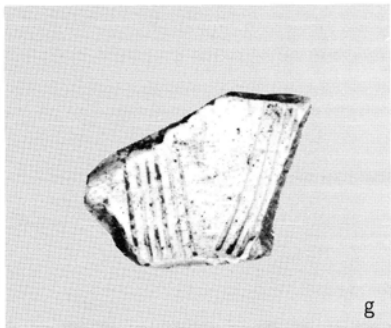


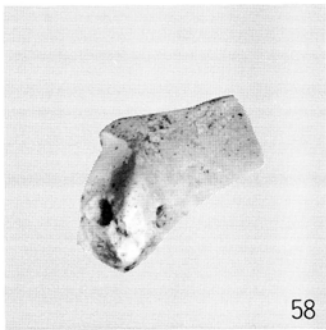


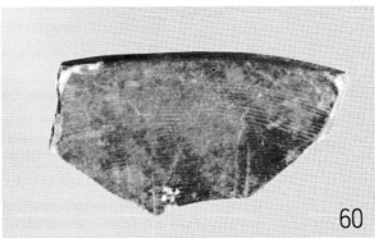


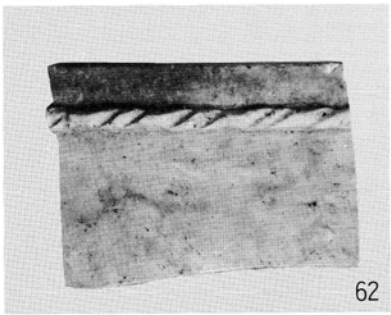


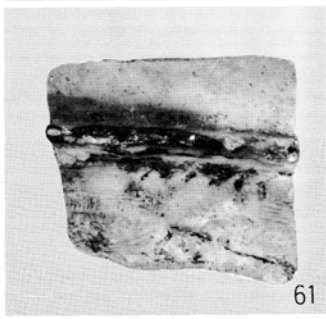




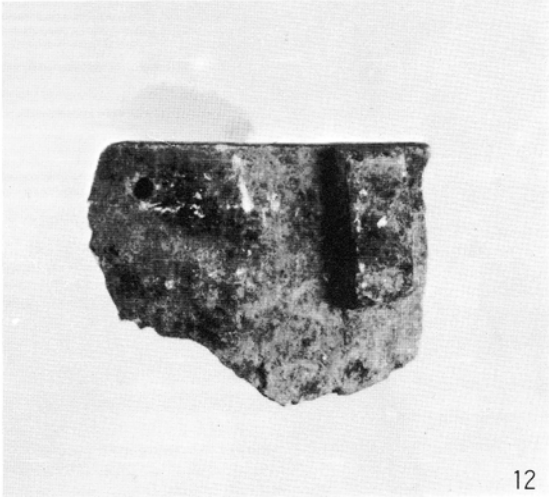


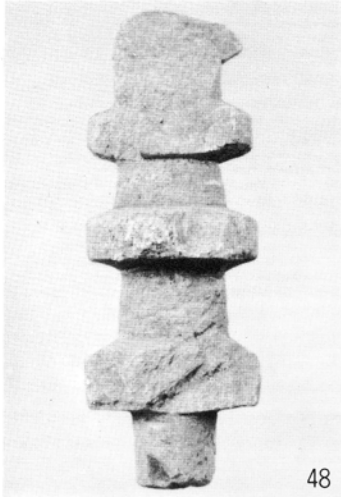


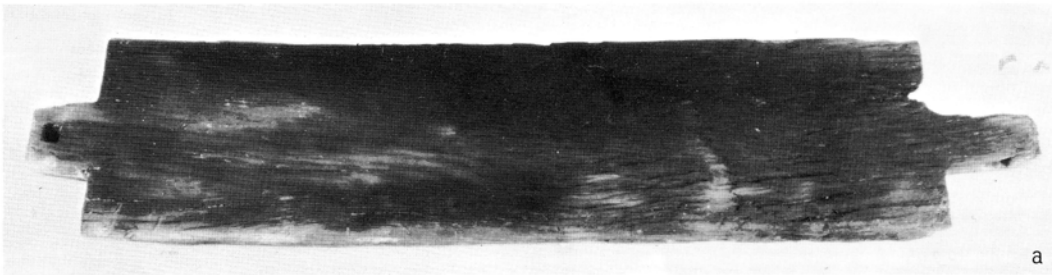


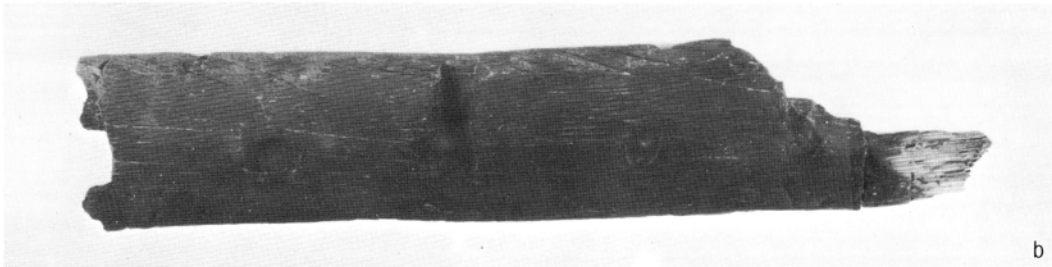


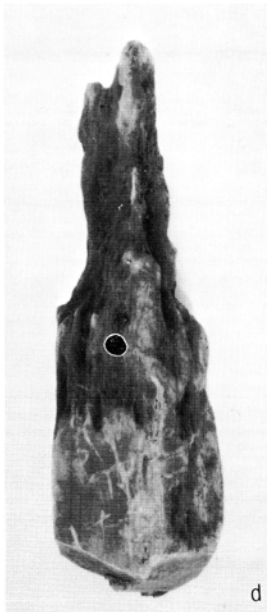
SD01(47・g)　SD03(52・e)
柱穴掘方　SB01(61)　SB05(a)　SB08(b)　SB10(62)　ピット1(60)
SB02(54)　SB07(c)　SB09(53・58)　ピット2(55)
ピット3(f)











SE01下層(12)　　a（SE03井戸枠）
SD01（48）　　b（SE03井戸枠）
c（bの拡大）
d（SB08柱根）

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第65集
板付周辺遺跡調査報告書　(7)
1981年３月31日
編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8の1
印　　刷　秀巧社印刷株式会社